

---

# 夢幻町へようこそ

神楽樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢幻町へようこそ

### 【Nコード】

N0745A

### 【作者名】

神楽樹

### 【あらすじ】

適当に何の不自由もなく生きてきた相島剣示にいきなり降りかかってきた災難。それはある美少女からの告白から始まった。「好きです」その言葉に全てを狂わせれてしまう。何か変な魔法とがあり、拳と拳の剣と剣の白熱するバトルもあるかもの不思議世界スペクタクル！

## 第一夜：その名はリペア

「好きです！」

人通りの少ない舞阪市夢幻町住宅地郊外の道路のど真ん中で、いきなり美少女に告白を受けるといって、きょうびギャルゲーでもないシユチユエーションに驚きつつも冷静を装う男子高校生相島剣示18歳。

生まれてこのかた女の子に告白された事など一切無い。

しかも、だ。告白してきた女の子はまるで芸能人だと言われても納得してしまう様な容姿の持ち主なのである。しかも、金髪の青い瞳、最高です状態である。

「ちよつと、考えさせてくれないかな？」

うおおおお。これだ！このフリーズ言ってみたかったんだよね！最高です神様！もう死んでもいいかも・・・

剣示が心の中で身悶えている間、女の子は少し俯いて言う。

「じゃあ！殺させてください！」

そして、こんなストレートなお願いもされたことは無い。

勿論、じゃあ！の意味が分からない。告白の次に来る言葉に相応しくないランキング第2位にランクインしそうなくらい訳が分からない。

じゃあ、1位は何かって？とりあえず2位に置いとけばこの先、物凄く悲惨な言葉を聞いた時にランク落ちはないかと思ってこうしてますみたいな感じだろう。

幸福から一転、困惑。

その言葉の意味を理解するまでに数秒もかかってしまった。

「その、冗談だったらほかをあたってくれや」

ガツクリとうな垂れる剣示が女の子に背を向けた瞬間、背筋に冷たいものが走った。

思わず飛び退いた数瞬後、どこから取り出したのか女の子の日本刀

が振りかぶられていた。

「え？マジ？」

「まじまじ」

につこりと頷く女の子に少しドキッとしてしまいが、ある意味この状況でドキッとしないうかがオカシイだろう。

「あー・・・俺、何か君にしたのかな？」

「え？全然。何もしてませんよ？」

本当に屈託の無い無邪気な笑顔が痛い。痛すぎる。あらゆる意味でイタイ子である。

「えー、君の名前は？」

「私、アカシッククロニクス図書館司書。リペアです」

赤だか黒だか知らないが、図書館の司書に命を狙われる状況に陥った人間は一体どれくらいいるだろう？というか、図書館司書に命を狙われる理由が思いつかない。

「あー、リペア君。俺には君に命を狙われる理由が一切無いような気がするのだが、君はどう思うよ？」

「そーですねー・・・まあ、貴方には何の過失もありませんが、とりあえず死んでもらえればなあと思うしだいなのですよー」

ああ。と剣示は思った。

阿呆か。こいつは、き がいなのか。

剣示はこいつに関わっていると、とんでもない事態になりそうな気が物凄くしてきた。

そういうことなので、こういう場合に陥ってしまった人は俺を見習って欲しい。

剣示は一目散に逃げ出した。あっけに取られるリペアを他所にとりあえずありったけの力を振り絞り、まあ言うなれば学校のアイドルが見ている体力測定での短距離走並に振り絞りまくった。

「はあ・・・はあ・・・す、スケさん、カクさん、も、もういいでしょう・・・て、感じやわ」

数分の全力疾走で心身ともに憔悴しきった顔で剣示は崩れ落ちた。

ここ、舞阪市夢幻町は特に誇れる名産物もなければ芸能人が出身地なわけでもない、人口数千人の只の田舎街である。まあ強いて言うならば、ここには奇怪な事件が多々語り継がれている。

かといってTV局が取材に来ることもない。てか来いよ！な感じである。

そして、我らが主人公、相島剣示は、容姿普通。運動神経普通。成績普通以下。特に何の取り得もない冴えない男子高校生である。

痙攣しそうな足を引きずりやつとこさ家路に着いた剣示は、安堵のため息を吐き、玄関のドアを開ける。

「おかえり、剣ちゃん。遅かったわねー、お友達が待ってたのよ？」と剣示の母が出迎える。

友達ねえ・・・剣示はまたオタツキーの佐藤が来ているのかとウンザリしたのも束の間に。

「剣示さん、遅かったから心配しましたよー」

「ナンデイルンデスカ？」

何故か母と出迎えている人は先程出会った、きがい女リペアだったことに思わず言葉がカタカナになってしまふ剣示だった。

「というか、帰ってくれますかね？」

剣示の部屋の中央のテーブルに見合う様な格好で座り、開口一番剣示は言う。

「まあまあ、落ち着いて、殺風景な部屋ですが。さあコーヒーでもどうぞ」

「お前の家かよ！てか、なんで家に居るんだよ！そして、誰だよお前は！」

「ここは私の家ではないですねえ。まあここに居るのは貴方が逃げたからで、私は前にも言いましたがアカシッククロニクル図書館司書、リペアといいます」

リペアは律儀に全ての質問に順を追って答えていく。

「いやいやいやいやいや、判ってる！今言った事全部判ってるけども！！アエティワセテモライマシター！」

もうどうでもいいですよ口調で剣示は叫んだ。脳天から声が出るほどの叫びだった。

叫んだら喉が渴いたのでコーヒーを頂いた。

「ケツコーナオテマエデ！」

「お粗末さまですー」

「俺が淹れたんだけどな」

「そうでしたねえ。おほほほ……ところで」

ふと急にリペアが真剣な面持ちで話を続ける。

「私のコーヒーはないんでしょうか？」

「貴方はお客様ではありません」

「酷い話です。他人のお家にお邪魔しても、コーヒーさえも出してくれないなんて」

本当に機嫌を損ねたように口元を歪める。しかし、まあよく見ると本当に整った顔をした女の子だと良くわかる。怒った顔も可愛いとかよく言うが、まさにこの娘には当てはまるだろう。

「本当に酷い話だけどな、しかし俺はもつと酷い話を知っている。まさに最近のことなんだけどな、告白してきた女の子が次の瞬間、殺させるとポン刀で斬りかかってきたんだぜ？」

「まあ！本当に酷いお話ですねえ」

リペアは心底驚いたという顔をして相槌を打った。

「アナタノコトデスヨ？トンチキ娘がつ！」

「あー……私のことでしたねえ。でもでも、正当な理由にならなかったんでしょうか……そう言う文献を載せた書物を見たことがあるんですけどねえ」

本当に何が悪かったのか判らないといった面持ちでリペアが首を傾げている。

剣示はコーヒーをもう一口含み、コクリと喉を鳴らし、どういうこ

とか質問する。

「えつとですねー、告白しますよね？フラれますよね。逆上しますよね？そして殺害。」

「まあ、連鎖は分かるが正当ではないわな。しかも最後行き過ぎだから」

割と普通というか冷静に答える剣示にハテナマークいつぱいの顔で考え込む。

「というか、フツてねえし」

「えゝ！？・・・うあ・・・あの、私ちよつと貴方は趣味じゃありませんのでごめんなさい」

「ソウデスカー。ワタクシも貴方のような頭の螺子が1本どころか10本ほどぶつとんじやつてる系な子は趣味じゃないんですよー。気が合いますね」

リペアは心底ほつとした表情で「そうですねー！」と笑った。

「まあ、当然ながら訊くけども。じゃあなんで告白した？」

「正当に貴方を殺すためですかねえー・・・あつ、じゃあ結局私フラれちゃったわけで。あーのー・・・殺していいんですかねえ？」

剣示は眉間の皺を指で押さえながら怒りも押さえ込む。

怒るな俺！耐える俺！がんばれ俺！

「まあまあ、ちよいとこらでシリアスっぽい話を折り込もうや。

いい加減テンポについて行けん」

「と、言われましても。アカシッククロニクレス図書館最重要書物倉庫イデアから盗まれた魔法書物、イーヴァルズグラックスが貴方の脳内に隠されてしまったのでその回収命令を受けて行動していますのでとりあえず、殺させていただいたうえに頭部の回収を速やかに行わなければならないのですよー」

ごめんごめん。ちよつと俺、話に全然ついていけないわ。シリアスもいい加減にしたほうがよさそうだね。

自分の振った話だが、たちまち後悔してしまう剣示であった。

「まあ、落ち着こう。その・・・イーヴァルなんちゃらが俺の頭に

埋め込まれたとでもいうんだろうけど、俺は生まれてこの方大きな病気はしたことないから手術なんぞしたことはない」

「イーヴァルズグラックスです。まあ簡単に説明すると、アカシツククロニクス図書館に収められてる知識は全て磁気情報集合体なんですよね。つまり、貴方の脳に直接コピーされてるって考えたほうがいいでしょうね」

「そうかー・・・よし！まあとりあえず力エレ。」

いい加減、日常生活に戻してください本当に。精神が崩壊しそうです。

「帰れ帰れと、私も終いには怒りますよ？言わせてもらえば、魔術書物に比べれば貴方の命などわんこの大便です！」

憤慨だと言わんばかりに髪を振り乱し、リペアはテーブルに拳を叩きつけながら言う。

「なんだとう！言わせておけば自分の価値観だけで物言いやがつて・・・大体こつちゃあ被害者なんだよ！どうにかこうにかする方法でも見つけたらどうなんだ！」

「あーあ。嫌だ嫌だ、こつやってすぐ人間は被害者面ですよ。ちよつと何か言われたらこつちは被害者だーですよ。ホント勘弁してほしいです」

あえて剣示に聞こえるようにリペアは愚痴をこぼしながら悪態をつく。

リペアの言葉をそのままに取るのならば自分は人間では無いような台詞にふとした疑問を抱き、剣示は取り合えず訊いておく事にした。

「取り合えず訊くけども、あんた人間じゃないのか？」

「まあ。貴方方の言葉を取って言わせていただくと、私は天使という存在になりますね」

「俺にとつちゃあ、あんたは死神にしか見えんが」

「やだー、私なんて・・・そんなまだ人の魂を司るほどの職務を任せられるほど偉くないですよー・・・でもこの任務をこなしたらちよつと偉くなりますけどー・・・でも私そんな偉く見えます？あは



「つやだなあもう」

嫌味を言ったつもりだったのだが、意に反してリペアは照れくさそうに否定をし始める。

「どうやら死神とはリペア側の世界？では偉いらしい。」

「今だもじもじと照れているリペアにウンザリとしつつも剣示は訊かなければならないことがあったことを思い出し、言う。」

「ちよつと訊くが、その魔術書物を俺の頭に埋めた奴はどうなったんだよ？というかそいつにも俺は命狙われるのか？」

「さあ？」

「今まで質問には律儀なほどに答えてきたリペアの答えとしては明らかに短く、そして回答にはなっていなかった。」

「さあ？ってなんだ？そういうところ知ってなきゃならんんじゃないのか？」

「知りませんよ。そういうのはフォースの仕事ですし、私はアカシツククロニクレスの管理ですからフォースの仕事内容まで把握しているわけ無いじゃないですか」

「なんだその、フォースつつーのは・・・」

と訊こうとした事柄に答えるかのような状況はいきなり起きた。

「剣示の部屋の窓を突き破ってテーブルの上に叩きつけられるような形で現れた人影に剣示はもう驚くことも無く、ただ一つだけ心配事を抱えるのだった。」

「ガラス代弁償してもらえるんだろうか？と・・・。」

## 第二夜：エッジ墜落する

剣示の部屋の室内温度は急激に下がっていく。原因はやはり粉々に割られた窓のせいだろう。

しかも！季節は真冬。あり得ない寒さである。首を縮め、身を震わせながら剣示はリペアに訊く。

「知り合い？」

「いえ、全然」

テーブルを半壊させつつその上に叩き付けられたままの格好の少女が呻きながら起き上がった。ボブショートの黒髪に良く似合った愛らしい顔つきの少女が身に纏っているのは黒い髪とは正反対の真っ白で統一された服だった。

取り合えず高価そうなオーダーメイドな服だ。とてもユニ　口では買えそうにない。

「こ、ここは・・・！？なんでここに図書館の犬が！？」

少女は飛び起きるようにリペアを見て身構えた。

「えー、あちらの方貴方のこと知ってるみたいですが？」

「あらまあ・・・その様な侮蔑の呼び方をする者は一組織しか知りませんねー」

「さっき言ってたあの、フォースとかなんとかいうやつか？」

「そうそう、そうです」

どうやら、先程の質問の答えを知っていきそうな人物のようだった。

つまりはこの少女こそフォースという戦闘、調査、工作などを主に行う組織に属する者であるらしい。

「なあなあ、フォースと図書館は仲悪いわけ？」

ヒソヒソと剣示はリペアに耳打ちをする。

「まあ、それなりに仲は悪いですよー。何か私達が職務怠慢しているからいつつも自分達が尻拭いをしてるーみたいな勘違いをしている勘違い野郎ども組織なんですよー。まあ言うなれば私達のように頭を

使うお仕事じゃないようすし？頭悪いんでしょうねー」

「・・・なんですって？」

少女がリペアの言葉に目を細め、眉を吊り上げる。

部屋の温度が更に下がった様な感覚に、剣示は鼻水を嚙りながら冷めたコーヒーをすすする。

「ずず・・・まあ、この部屋の所有者なんだけど。一言いいですかね？窓ガラスとか弁償してもらるんでしょうか？」

「・・・え？あ、す、済みません！あの、わ、私、魔道探索組織フォースに属しているエッジと申します。こ、今回は、窓ガラス割っちゃってほんと、ご、ごめんなさい！えつとえつと・・・多分労災おけるんで私個人でお支払いいたします！絶対払いますから！」

「労災あるんだ・・・」

エッジと名乗った少女が土下座でもしそうな勢いで平謝りするなか、どうにもこうにもこの異常事態の最中間きなれているというか、微妙な単語に意外性を見出してしまふ。

「そりゃ、私達の世界にだって労災保険くらいありますよー」

とりペアが独り言のように呟いた剣示に答えた。その間にも「済みません、ごめんなさい」と謝り続けるエッジはとても素直ない子に見えた。

「ああ、そんな気にしなくっていいよ。ほら座って、今コーヒーでも淹れてくるよ」

「あ、済みません・・・」

「じゃあついでに私にも頼みますね・・・ってすんごい今無視しますね？あり得ませんから。こんな至近距離で無視されるなんてあり得ませんよ？ちょ、ちょっと剣示さん！？」

本気無視の入った剣示は喚くりペアを他所に部屋を出て行った。

二人取り残された形で向かい合い、気まずい雰囲気どちらからとも無く目を逸らしていた。

「先程もいったけれど、何故貴方がここにいいのかしら？」

エッジは仕方なくといった感じで溜息と共に口を開いた。

「私は、私の本分を全うするためにここにいるに決まっているじゃないですか？それくらいも理解出来ないのですかねーフォースに属する輩は」

わざと相手を挑発するような言い草でリペアはエッジを牽制した。深呼吸をするようにエッジは挑発には乗らず、その先を促した。

「どういふことが説明してもらえるんでしょうね？」

「私の任務はたった一つですよ。魔術書物イーヴァルズグラックスの回収ですよ」

リペアの言葉に激昂するようにエッジは立ち上がり、リペアの顔に指を突きつけ怒鳴った。

「確かにイーヴァルズグラックスの回収は重要です！ですが！今回は私達フォースに一任するはずでしょう！？何故今になって貴方がしゃしゃり出て現場を掻き乱すような真似をするのが本当に理解出来ないわ！」

「理解出来ないのはそちらのやり方ですね。大体、魔術書物を罔に”彼”を捕まえるという発想が頭がオカシイとは思えません。ナンセンスです」

リペアはさも当然といった顔で冷静に物を言う。エッジはリペアの言い分に反論出来ないのだろう、唇を噛み、突き出していた指を収め、拳を怒りに震えさせている。

「まあ、貴方が考えた作戦ではないにしろ、アカシッククロニクルス上層部の方達はフォースのやり方には賛成出来ないと言っているですよ。私が動いた旨は貴方方フォースのトップ、”闇の剣”に伝えてあります」

「・・・そう」

エッジは力が抜けたように座り込んだ。フォースのトップが承認したことに自分がどうこう言える立場ではないことくらいは理解しているつもりなのだ。

肩の力が抜けたように頂垂れるエッジにリペアが質問を繰り返した。「ところで、貴方の登場の仕方の異常さを指摘するのを忘れていま

したよ」

「・・・別にこれといって報告するほどのことじゃないわ。”彼”の”目”を潰していた際の交戦中”彼”の眷属に襲撃を受けたのよ。今のところイーヴァルズグリアックスに手を出す動きは出ていないわ」

もう訊くことは無いといった雰囲気でリペアは「そう」と短く返事を返し、壊れかけたテーブルに肘をついてそっぽを向いた・・・瞬間。

「・・・襲撃を受けたんですね？」

「・・・？だから言ってるじゃない」

「・・・撃退しましたか？」

「・・・撃墜されたからここに居るのよ」

「・・・貴方を襲撃した敵さんがお待ちですけど？」

リペアの言葉にゆっくりとエッジが首を回し、「あ」と言う。割れた窓の外側の瓦に立ち尽くす形でエッジとは正反対の黒一色に統一された和服に身を包み、腰まで伸ばした栗色の髪をうなじ辺りで結わえた品の良さそうな女性がにっこりと笑って言う。

「攻撃してもよろしいかしら？」

「すごく良心的な作りのRPGでもその台詞はプレイヤーに馬鹿にしてると思われそうですね」

全く関係無いといった様子で、リペアがヘラヘラと笑いながら解説している。

「”彼”は何処にいるのか・・・力づくでも答えてもらっわ！・・・御出でなさい竜斬刀グラム！！」

エッジの叫びに応えるかのようにその両手に色鮮やかな光の粒子が漂い、形を成していく。

「貴方は”彼”の名さえも知ることなく滅びることになるでしょう・・・御出でなさい閃光槍ブリューナク」

エッジに対抗するように和服の女性は手を掲げ、呼びかける。

エッジには本当に竜でも殺すために作られたような馬鹿でかい大剣

が、和服の女性には稲妻を迸らせながら光輝く聖槍が顕れた。

今までヘラヘラしていたリペアが女性の呼んだブリューナクを見た瞬間に顔色を変えた。

「・・・神具召喚。まさか、アカシッククロニクレスに不正アクセスされている・・・？」

まさに、神と人間の作った武器の戦い。分が悪すぎる・・・エッジさんには悪いけれどこの戦い明らかにエッジさんの負けになる。

ブリューナクは三大神槍の中の一つ。その力は都市を一振りで消滅させることすら朝飯前・・・。ってどうしよう・・・都市壊滅させられでもしたら魔術書物の回収は不可能！？

今日はさっさと回収して帰って時代劇見る予定だったのにい・・・。

心底嫌そうな顔でリペアがげんなりとしている所にタイミングいいのか悪いのか、剣示が部屋に戻ってきた。

「・・・あ、お邪魔しています」

と間の抜けきった挨拶をする和服の女性。剣示はもう何事にも動じない精神を身につけそうだった。

「えー。戦うんですしたら外でお願いするわ」

「ええ、それはもう重々承知しておりますので御心配なさらずに」  
今から生死を懸けた戦いが始まるにしては全く相応しくない会話に剣示のほうがげんなりとしそうだった。

「まあ、とりあえずコーヒー淹れたんで飲んでからということはどうですかね？」

そういつてエッジと自分のために淹れたコーヒーを和服の女性に差し出した。

「あ、これは済みません。ありがたく頂戴いたします」

「あ、済みません。ありがとうございます」

エッジと和服の女性は二人して剣示に礼を言いながら腰を下ろした。  
「ちよつと。剣示さん・・・私のは？私のをこの人に渡したですか？  
なんですか？なんでそんなことするんですか？イジメですか？

イジメかつこ悪いです!!」

「いや。リペアの分は最初から淹れてないから心配するな。あれは俺の分だ」

剣示がにこやかにリペアを宥める様にぽんぽんと肩を優しく叩いた。  
「あーそうだったんですかあ。なあんだビックリしましたよー。私の分が無いのかと思って・・・ってないんですね？最初からって・・・？こんな酷い話がありますか？ねえ皆さん!？」

「ふう。落ち着きますね・・・剣示さん、でしたね。コーヒーを淹れるのがお上手ですね」

「ほんと、おいしいです！ありがとうございます剣示さん」

「あれえー。ちよつと今、不覚にも泣きそうになっちゃいましたよ？アウトオブ眼中ですか？」

本気で表情が凍るような顔でリペアが今にも泣き出しそうになるのをよそ目に、三人はちよつとしたコーヒーの淹れ方講義を始めていた。

「さて、コーヒーご馳走様でした。さてエツジさん。始めましょうか」

「ええ。剣示さん美味しかったです。ありがとうございます！では」

二人は剣示にそう挨拶して窓から外へと飛び出していった。本当は戦いなど止めたいが剣示には止める理由も権利も無い。ただ、二人が無事に終わることを祈るだけだった。

「さて、今度は私のお仕事もしなくてはいいけませんねえー」

怒りに震えるような形相でリペアが剣示に向ってそう告げた。

ああ。そうだった。

こっちはこっちでピンチだったのを失念していたと剣示は頂垂れた。

冬の夜空は綺麗だなあ・・・。

吹き抜けの窓から空を眺めつつ、  
つつい現実逃避をしてしまう剣  
示であつた。



### 第3夜：イヴ覚醒

剣示の部屋を出た二人は家々の屋根を利用しながらお互いの距離を取り、睨み合う格好で動きを止めた。

流星に一筋縄じゃあ行かないようだわ・・・この女戦い慣れている。瞬時にそう悟り、エッジはグラムを右手から左手に持ち替えた。

「御出でなさい！黒き魔剣ストームブリンガー！」

エッジの右手に漆黒の粒子が収束していく。このストームブリンガーを顕現する時はいつも貧血にも似たクラリとする感覚に見舞われる。オリジナルは他者の命を吸い魂を喰らいながらその魔を増大していったと伝えられているものだ。

幻想具現で顕現し、オリジナルの闇の部分は大半取り除いてはいるもののやはり魔剣、その魔を完全に取り除くことは不可能らしい。相手を見据えたまま目を細め焦点を取り戻す。

言うなればこの魔剣顕現はエッジにとって奥の手なのだ。長時間の魔剣使用は精神汚染を酷く誘発し、危険な状態になりかねない。短期決戦を前提に置いた幻想具現なのである。

「吼えろ！ストームブリンガー！！」

エッジは魔剣を天に翳し、高らかに叫んだ。その刹那、空は漆黒の雲に覆われ月明かりを奪い去る。辺り一面闇に覆われるが、魔剣の所有者であるエッジの瞳は赤く光り、まるで真昼のように辺りを見渡せる。

和服の女性の視野を奪い去った瞬間、エッジは屋根を蹴って空中へと躍り出た。

「ちょっと、リペアさん？顔とても怖いのですが、落ち着いてくれ、頼むから落ち着こう」

「これが落ち着いていられると思いますか？私はさつさと任務を全うして、今日は自宅に帰って溜まっていた時代劇のビデオをかたすはずだったんですよ！まったりとのんびりと！」

「時代劇とかもあんのかよ・・・というかテレビ放送とかあるんだ・・・」

この先どんなことがあるうがなかるうが、もう驚くのは止めにしようと言った。と誓った。

「ちっ、分かったよ。やるんだったらやってやろうじゃねえかよ・・・女に手をあげるのは嫌だがこの際仕方ねえし・・・痛い目にあっても後悔すんじゃないぞ」

剣示はベッド脇に置いてあった土産物の木刀を手にとって、リペアを見据えて構えた。

「何してるんですか・・・？」

「え、何って・・・自己防衛？」

「はあ・・・自己防衛ですかー何から身を守ってるんですか？」

「え、何って・・・リペアから？」

訳が分からないといった風にリペアは首を傾げている。

「え、だって、さつき仕事しなきゃいけないとか何とか言わなかったっけ？」

「ええ、言いましたけど？だからイライラしちゃってるんですけどね」

「俺を殺すのがリペアの任務だろ？だから・・・」

「ああ！あーあーあー。なるほどなるほどー、任務とお仕事は違いますから、今は安心してもらって構いませんよ」

今はという言葉にいつかは殺すつもりなのだろうという不安が沸いてくる。

とはいえ、本当に今現在は、リペアは剣示を殺すつもりなど無いらしく、「椅子お借りしますねー」と椅子を机から離し、腰掛けた。

「アクセス。クロニクレス・・・承認ナンバー0097665322109771リペア」

長つたらしい認証ナンバーコードを支えもせず、さらりと言つてのけるリペアにちょっとした尊敬の念を抱く。

言い終えたリペアの周りにカラフルな光のキーボードが顕れる。

まさにギネスもビックリなスピードでキーを叩き出すリペアに呆氣に取られる剣示だったが、ふと何かを思い直したように部屋を出て行った。

「アクセス者数検索。内、高位図書アクセス者ろ過。不正コード検索。H I T！やっぱり居た！アクセス隔壁閉鎖。くっ、ちょこまかと！バスター起動。こうなったら包囲しちゃいましょうかね！」

光の画面の得体の知れない文字の羅列を見ながら、リペアはブツブツと独り言を言いつつ手を休めず動かし続けている。

ブラインドタッチがさまになっていているリペアは、時折、Sh i t！などと暴言を吐きつつ黙々と処理をし続けていた。

処理に熱中していたリペアの鼻腔を擽る香ばしい香りがリペアの思考と動きを止める。振り返ると、剣示が照れくさそうにミルクと砂糖を入れたコーヒーをリペアの手におさめた。

「ありがとう！剣示さん」

意外そうな顔を一瞬し、にっこりと笑つたりペアに、不覚にも剣示はやっぱり可愛いなと思ってしまうのだった。

視野をほとんど奪っているにも関わらず、和服の女性はエッジの攻撃をことごとくあつさりとかわすしていく。

「この程度の魔剣で私の瞳を奪つたつもりなのでしたら・・・がっかりですね」

失望したとでもいうように和服の女性は溜息を吐いて、神槍を構えなおす。

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

苦しげな呼吸に全身の筋の震え、エッジは自分の体が限界に達しようとしていることに気付く。

まずい・・・魔剣を使いすぎた。このままじゃ、魔を抑えている私の精神が崩れる！

追い討ちをかけるように和服の女性は言い放つ。

「今度は私から行きます」

神槍を回転させながらエッジに向って屋根を蹴った。エッジは攻撃を受けるため、グラムを構え直し、カウンターに備え、魔剣を半回転させ逆手に構えた。

キンッと金属特有の衝突音が響く瞬間、逆手に構えた魔剣を振るおうとしたエッジは目を見開いた。神槍を受け止めたはずのグラムがみるみると消滅してゆく。

「開け、5つの門。破滅の光！」

受けとめた神槍の穂先が5つに分かれ、稲妻を迸らせながら輝きを増してゆく。

「ルイネーション！」

真っ白な光に包まれていくエッジ。エッジの輪郭すらも掻き消して行く白い光、いや、最早これは光などではない。

白い闇だ。

エッジは見開いた目を閉じ、どうすることも出来ない現実には唇を噛んだ。

閉じた瞳から一筋、雫が頬を伝った。

リペアの処理画面をなんとなく見ていた剣示に見たことのある文字が映し出された。

caution！画面にはその文字が中央に表示されていた。

「動きが止まった！？やらせませんよー！」

まるで今までの動きは序の口だったとも言つかのような速度でタイピングをしていくリペア。

「ウォール展開！バスター一斉掃射！アクセスログ昇華。プロセス反転！捕まえたあ！デリート！！！」

そう叫んだりリペアは心底やり終えたといった笑顔を浮かべた。画面中央にはDelete complete!の文字が映し出されていた。

エッジを包んでいく白い闇が急速に反転収束して消え去っていく。

「・・・ケールテイカー（管理者）の仕業ですか」

そして神槍までも光の粒子に変わり消え去っていく。

「そうですよー！いい仕事してますでしょ？」

剣示の家の玄関にエツヘンと腰に手を当て、胸を張っているリペアが呟きに応える。

リペアと一緒に玄関に出ていた剣示が何かに気付いたように走り出した。

気を失い、グラリと屋根から落下するエッジをぎりぎりで受け止める。

「あ、あぶねえー・・・」

ほつと息を吐いた剣示の背中にリペアが声を浴びせる。

「フォースは体だけは頑丈に出来てますから屋根から落ちたくらいじゃどうにもなりませんのにー」

「んなこと言ったって・・・女の子なんだぞ、怪我するじゃねえか」  
剣示の言葉に重なるように、パンパンと手を叩く音が響いてきた。

「嗚呼、何と偽善に満ちた優しいお言葉だろう。全く吐き気がするほど素晴らしいね」

暗がりからぬうつと姿を現せたのは、黒いロングコートを羽織った表情の無い男だった。

笑顔なのにまるで能面のような印象を受けさせる。銀髪をオールバックにし、ロングコートのしたの衣類も全て黒一色の姿はある種の歪ささえ感じさせていた。

「・・・名無し・・・」

蒼白な顔でリペアは呟くように言う。

「ふ、名無しとは酷い言い草だな。アカシッククロニクレスの連中はまだ私の名前さえ見つけられぬと見える」

「誰だ・・・お前・・・」

口を開いた剣示を男が見やり、言う。

「やあ、初めましてだね。相島 剣示君。私は、相島 剣示だよ」  
さも当然のように言い放ち、口元を歪める。

困惑する剣示を他所に屋根の上の和服の女性に向かい、笑う。

「サッド。私はこんなことまで命じただろうか？」

「・・・申し訳ありません。サッド様・・・」

サッドと呼ばれた女性は今にも泣きそうな顔で只俯いた。その瞬間屋根の下にいたはずの男はサッドの目の前に移動し、「顔をあげろ、サッド」と言い放つ。

顔を上げたサッドの顔面を強かに拳で打ち抜く。崩れ落ち、顔を抑えたサッドは血を流しながら「申し訳ありません」それだけを繰り返す。

さらに、崩れ折れたサッドの頭を靴で踏みつけ屋根に押し付ける。

「いいんだよ、サッド。サッドは私のためにと働いてくれたのだから」

言っていることとやっていることが全く違う男に、虫唾が走り、剣示はエッジを優しく横たえて立ち上がった。

「おい。最低男。やめろ」

自分のことを言っていると気付くのが遅れたとでも言うように、ああ。と言いながら、もう一度強かにサッドの頭を踏みつける。

「これを止めると言っているのかな？」

「くっ！降りて来い糞野郎」

「いいのです！剣示さん。私は喜んでサッド様のお叱りを受けているのですから」

屋根の上で踏みつけられながらも本当に笑顔でサッドは剣示を制した。

「喜んでいらっしゃるらしいよ？剣示君」

「いいから、ヤメロ。偽善でものいつてんじゃないよ。俺がムカつくから、ソレをヤメロと言ってる」

「嗚呼、私はそういうの好きだよ。人の喜びに怒りを覚える。価値観を押し付ける自己満足・・・いや、実にいい」

頭に血が上っていく恍惚にも似た興奮の感覚。脳内麻薬が次々と分泌され、体が熱くなり、今ならばその男をクロスことだつて出来そうな感じさえもする。

体の奥底で何かと共鳴しているような心地良さを感じる。

ああ。と思う。

この男をクロスことが出来ると。その理由が十分にあると。

剣示の怒りを気にも留めた様子なく、男は屋根から姿を消す。

次に現れたのはリペアの目の前だった。

「!？」

リペアが驚き、目を見開いた瞬間、リペアの体が近くの家を囲っているコンクリートにめり込んだ。

「ごふっ・・・っ」

全身を押し潰す衝撃にリペアは口から血を吐く。

「やめる!! 何してやがる・・・!!」

「私がここを訪れた理由はね。君を救うためだよ」

剣示の言葉を遮る様に冷静に満ちた言葉が男の口から吐き出される。

「君の命を代償に魔法書物イーヴアルズグラックスの回収を命じられたこの女を、殺すためにね・・・君だつて安心して毎日を迎えられるんだ。礼はいらないよ、私がそうしたいからするのだからね」

「黙れ」

目の前が赤く染まっていく。まるで頭に上った血が目を侵食しているかのような感覚。

次に何か喋りでもした瞬間、俺はあいつを殺す。

ああ、心地良い。

頭の中で、誰かの声が聞こえた気がした。

「どうして？分からないな君は」

男がそう口を開いた瞬間、剣示は地を蹴っていた。剣示の足が蹴った地面がまるでクレーンの鉄球を落としたように決れる。

音が遅れて響く、すでに剣示は十数メートル離れた距離の男を殴りつけていた。

振り下ろしの拳で殴りつけた男は信じられないことに地面にめり込んでいる。

それにも拘らず、男は狂喜したようにワラウ。

「意外だよ。本当に意外な展開だよ。君がこんなにも早く目覚めてくれるとは・・・イーヴァルズグラックス」

ゆっくりと立ち上がり、男は剣示の後方を見やり言う。

剣示が振り返ると、そこにはゴスロリヨロシクな格好をした年の頃10の少女が微笑みながら立っていた。

金色の瞳に金色の髪を肩口に切りそろえ、到底年相応には見え無い魅力的な顔つきをした少女は剣示を見つめながらうつとりしていた。

「おはよう。マスター」

剣示に向って少女はハッキリとそう言った。

「さあ、おいでイーヴァルズグラックス」

優しい表情を見せるがどこか能面のような表情を消しきれていない男が、少女に手を差し伸べる。

「厭よ。私のマスターは貴方じゃない」

一瞬理解出来ないと言った表情を浮かべるが、すぐに笑い出す。

「そうか、そうか。意外なことは重なるものだ。まさか剣示君がイーヴァルズグラックスの主として覚醒させるとは」

「煩い奴。マスターは貴方に敵意を殺意を持っている。だから、私は貴方を殺す」

少女は男に向って手を翳す。瞬間光が収束していく。

「今日は何という素晴らしい日だろうか。喜びに心躍るとはこのこ



とだ。また日を改めて会いに来るとしよう、さあサッド帰ろうか」  
「はっ」

サッドと男の輪郭が急速に薄くなり、消え去った。

少女は収束しつくした光を今度はリペアに向ける。

「お、おい!？」

「何？マスター？」

少女はキョトンとした表情で剣示を見返す。

「何してんだよ、もう敵はいないだ。それ消してくれ」

「いるよ？だつてコイツ、アカシツククロニクレスのケールテイカ  
ーだもの。マスターの命を狙っていたんだよ？」

「いいから、やめろ」

「・・・分からない、何で？マスター」

子供を宥めるように剣示は少女の肩に手をやり、収束した光を消滅  
させた。

「そいつは友達だから。どんなことがあっても友達は殺しちゃいけ  
ない」

「友達は、殺しちゃいけない」

鸚鵡返しのように言う少女に剣示は優しく頷いた。

「そう、友達は殺しちゃいけない」

「分かったよ。マスター」

「そう、いい子だ・・・えっと」

「イヴ。私の名前」

「いい子だ。イヴ」

そういつてイヴの頭を撫でた。

「結界が解けるよ。マスター」

空を見上げるようにいうイヴに剣示は訊き返す。

「結界？なんだそりゃ」

「フォースの常套手段、このエリアの空間を閉じ込めて、人間に知  
られないように戦いを行うの。それを結界と呼んでいるの」

「じゃあ、うちの親や、近所の連中が出てこないのは結界のおかげ

つてことか？」

「うん」

その結果が解けるということに急いで剣示は気絶しているリペアとエッジを回収して部屋へと戻った。

「ぜえぜえ・・・何かとんでもなく疲れた」

「大丈夫？マスター」

肩で息をする剣示に笑いながら声をかけるイヴ。

「はあはあ・・・ダメだとしてもなく、眠いぞ？何でだ・・・」

「きつと初めて魔法を使っただのが原因だと思うよ」

剣示の疑問にサラリと答える。眠いのには逆らってはだめだというイヴに従い、ベッドにリペアとエッジを寝かせて、下に布団を敷いて眠りにつくことにした。

「一緒に寝ていい？」

「ああ、寝なさい」

「違う。そっち。一緒に布団」

「狭いからやだ」

イヴはにべも無く言い放つ剣示にぶうーと頬を膨らませて拗ねるが、すぐに機嫌を直し、「それじゃおやすみなさい」といって電気を消して床に就いた。

次の日、剣示が朝起きると一緒に布団の中でイヴが寝息を立てていた。

「・・・全く」

そう呟いて、イヴを起こさないようにそっと起き上がってベッドを見るとすでに二人の姿は無く、壊れかけたテーブルの上にエッジからトリペアからのメモが残されていた。

「剣示さん。昨日はお世話になりました。これから剣示さんの周りで何かしら事件が起こると思います。その時にはまた私が現れると思いますのでまたよろしくお願いします。エッジ。追伸 コーヒ

「の淹れ方私も試してみようと思います。」

「事件予言されてもなあ・・・」

そう言ったものの、剣示自身もこれが始まりに過ぎないことくらい容易に理解できていた。

「剣示さんへ。お世話かけましたー。私は任務失敗しちゃったんで帰りますー。多分もう会うことは無いと思います。・・・友達は何があっても殺しちやいけませんもんね？では、お元気で。リペアヨリ」

「・・・お前も元気でな、リペア」

リペアのメモ書きにちよつとジンとして、目頭が熱くなっていた剣示に玄関のチャイム音が鳴り響いた。

「うお、誰だ日曜の朝っぱらから・・・」

朝っぱらとは言ったものの、現時刻は11時過ぎだった。

ピンポンピンポン。いつもなら母親が、父親が出るのにおかしいなあと思い居間に行ってみた剣示はテーブルにメモを見つける。

「父さんと外食してきます。起こしたけど起きなかったので、残念だけど剣ちゃんのカップラーメンでも食べてなさいね（笑）母」

何だカツコ笑いって！畜生！

仕方なくジャケットを羽織って玄関に向かってドアを開ける。

「え？」

「てへ。クビになっちゃいましたー！寮追い出されたんで取り合えず、責任もって私を住まわせてくださいよねー？友達なもの、当然ですよねえー？」

笑いながら、荷物を抱えたりペアが固まる剣示の脇を抜けて堂々と家へ上がっていく。

相島 剣示 スコア 居候×2獲得。

親に説明をする文章を必死で頭に描きだすが、どうにもこうにもうまく纏まる筈もなく。冷や汗が出てくる始末で、しかも、世間体

今から悩みだす剣示であつた。

#### 第4夜：居候大作戦

「ずずうゝひゃから、んぐ。言ってるじゃないですかー。ずるずるゝんぐ。ほのままおふうたえひはら・・・んぐ。そのままお伝えしたらいいのではないですかと」

昼食は有無を言わすことなく、カップラーメンだった。剣示がその中でも一番食いたかった極上トンコツラーメンを啜りながらリペアはそう言った。

「ずずゝずつ、んぐ。お前はあほか！この子は魔法の本で、俺が人間にしちゃったらリペアが図書館クビになったんでこの二人をこの家に住まわせることにしたって言うのかよ！」

「まあ！完璧ですわ。剣示さん」

極上トンコツラーメンを取られた剣示は仕方なく、シーフードラーメンをイヴと啜っている。

「却下。遂に頭おかしくなったと思われる精神病院に通院することになりかねん」

「ふーふー・・・ずー。もぐもぐ。こく。じゃあマスター。私が意識操作して、交換留学のホームステイということにしようか？不本意だけど、姉妹ということにして」

その時、ラーメンを可愛く食べながら二人の話を聞いていたイヴが不意にそう提案した。

「え？ソナンデキルデスカ？」

「うん？うん出来るよ」

「承認！それで行こう！偉い偉い。イヴはどこぞの居候と違って賢くていい子だなー」

聞こえよがしに剣示はイヴを撫でながら、リペアを見やった。

「どこぞの居候って居候の知り合いが多いんですねえー」

「お前だよっ！あとな、言っておくけど居候の分際で家主の子より高い品物食ってんじゃねえよ。おかわり3杯目はそつと出す精神も

つてろや！」

「ケチ臭い人ですねえー。そんなだと女性にもてませんよ？」

「うーわ。イラっときましたよ？決めた。もー決めた」

剣示が一人でうんうんと頷きながらイヴに向き直る。

「さつてと、イヴ。俺の隣に割と小奇麗にしてる衣類棚置いた部屋があるんだ」

「・・・？うん？」

「そこを整理したいんだけど、魔法の力でちょちょいつと出来る？」

「うん。出来るよマスター」

自分の力を必要とされると嬉しいらしく、イヴはににこと返事をする。

「そつかそつか、んでその部屋をイヴの部屋にしようと思うんだ。後でなんか必要なもんを買いに行こうな」

「うん。分かったよマスター」

「よかったですねえーイヴさん。で？私の部屋はどこですか？」

リペアの言葉に剣示がにつこりと笑い案内する。

居間を出て、玄関先の階段下の扉を指し、言う。

「さあ！ここがリペアの部屋だよ」

「狭っ！！！！！」

そこは完全な物置部屋だった。光も入らず、あるのは裸電球一つの薄暗い2畳半くらいの部屋である。

「私は囚人ですか！？酷い仕打ちですよー！横暴ですよー！！人でなしですよー！！大体こんなとこに人を閉じ込めるみたいなことは軟禁ですよ！あれでしょう？こんな物置に女の子を隠すように置いておく・・・そして・・・きやあああああ！あーれー、後生ですよ！お戯れをー！」

顔を赤らめて悶えながら一人で喚いていたリペアがはつと我に返って周りを見ると、やはりそこには。

「誰もいないし！」

夢幻アーケード街。人口密度の少ない過疎化したこの町で唯一人通りの多いのがこのアーケード街だ。剣示とイヴは一人上手をしていたりペアを置き去りにこのアーケード街に来ていた。

「むげんアーケードがい・・・？」

「そうだ。お店が密集してるつつつとこでな。まあ、何でも揃うと思うぜ」

剣示の言葉に得心がいったという感じに頷いた。

「ここは王都の城下町ですね」

「んー。イヴちゃん、所々知識がヘンだぞうー・・・ま、この夢幻町ではその、王都の城下町並の所だと思う・・・かな」

と、シドロモドロしながら説明していた剣示を不思議そうに見つめていたイヴが、ふとショーウィンドウに釘付けになった。

そこに居たのはペットショップの犬だった。ミニチュアダックスフントが嬉しそうに尻尾をふり愛想をまいていた。

「マスター・・・」

犬を欲しがる美少女という構図は初めてで、その可愛さにノックダウンしそうな剣示だったのだが、その後続く言葉に別の意味でノックダウンしそうになる。

「人間は変わらないね。やはり、命をお金で売り買いしている。今も人間の命すらお金で買えるの？」

「いや、それは無いと思うが・・・まあ、そうだなあ・・・命の売り買いか・・・」

深い・・・深いなあ。

剣示は少女の姿にまるで達観した淑女を見る。そう、この少女はただの少女じゃないのだ。魔法書物の具現化した姿。いつから存在していたのかも分からないほど気の遠くなる時間すら越えてきた存在なのだ。

「まあ、今は日用雑貨やら、寝具やらを買いに来たわけだ。ペットショップはおいとこ」

「うん」

その後、日用雑貨店や、寝具店を回ったものの、イヴは何一つ注文をつけることなく剣示や店の人に勧められたものを何故か、いたく気に入るのだった。

痛み。絶望を伴い我が身を食む。

軋み。憎しみを伴い我が心を焦がす。

嘆き。恐怖を伴い我が全てを消し去る。

ああ。愛しいき我が御名よ。存在を顕す術よ。

渴望している。我が全てを肯定するその御名よ。

緩やかに穏やかに闇がとぐろを巻くかのようにその場所は深い、深い暗がりにある。

そこからいずれ這い出ることが出来ると確信している。

だからこそ、絶望を、憎しみを、恐怖を甘受した。

”彼”はゆっくりと瞳を開く。また彼の苦痛の時間が始まったのだ。

置いてけぼりをくらったりペアは焦点の無い瞳で虚空を見つめ、ぶつぶつと何事か呟いている。まるで誰かと会話をしているかのよう  
に……。

「はい……は、確かに……して……まだ、……をしていない……です」

玄関の開く音で急速に瞳に光が宿る。

ドタドタと玄関に走り、開口一番こう言った。

「お土産はっ!？」



「お前には居候としての自覚を持つことを勧めるぞ」

剣示はげんなりした顔で溜息をついて、手に提げていた紙袋を手渡した。

「わあい。たいやきですねえー。おいしそうー」

と言った瞬間にリペアはたいやきをかぶりついている。

「って早速かよ！手が早いにもほどがあるぞお前」

買ってきた荷物を玄関に置きながらつつこんでいたその時、後ろで玄関のドアが開いた。

「あら」

「む・・・」

3人は剣示の両親と思いつき鉢合わせをしてしまった。

固まる剣示。もぐもぐと口を動かしているリペア。あわてることなく冷静なイヴ。

まさしく三者三様の表情をしている。

「あの、その、これはだなー。何というか・・・」

シドロモドロに冷や汗を掻きながら剣示がどうにもこうにもならないと思った矢先、両親から意味不明な言葉が放たれた。

「なんだ、お前」達”も出かけていたのか」

はい？・・・達”て親父こいつらに会ったことあつたか・・・？

「本当に”ホームステイに来て”日も浅いけど仲良しで助かるわ」

はっ？・・・何を言っているんだこの母親は・・・？

ぽかんと口を開いたままさらに固まる剣示を他所にリペアとイヴはにこつと笑って言う。

「剣示さんが色々と世話を焼いてくれるから助かりますよー」

おいおい何言っているリペア！世話なんか焼いてないだろっ

「お兄ちゃんが私の部屋に置くもの色々を買ってくれたの」

お兄ちゃんってナンデスカー！？

硬直が解けた剣示はこう叫ぶしかなかったのだった。

「前置きとか無しかいっ!!!!!!」

## 第1夜・日常よさようなら

嗚呼、何と、何と無慈悲なことだろう。

白い影が言う。否、声というにはあまりにも違う。それは何重にも重なり響く音。

嗚呼、何と、何と狂ったことだろう。

白い影が嘆く。否、嘆きというにはあまりにも違う。それは狂喜にも似た錯乱。

「やめろ」

「何故？」

酷く冷酷に言い放つ銀色の髪の青年の言葉にキョトンとした表情で返す少女。

「やめろ、殺したら俺は、俺は君を許さない」

「許せないのは私のほう。マスター、私は貴方を信じていたのに」

青年の言葉に初めて少女は表情を歪めて言う。

「煩い。お前など消えてしまえばいい」

「私の断片を返して」

「厭だ。これさえあれば彼女が生き返るんだ」

「馬鹿な人。死んだ人間は元のその人間ではなくなるというのに」

呆れ果てたとしてもいつかのように少女は青年に手を翳した。  
少女の手に光が灯る。破壊を含んだ禍々しい光。

「私は光を容認する闇。光を拒絶する白い闇を開放する人は滅ぼす。  
単純でしょう?」

「俺はお前の主だろう!俺に齒向かうな!」

「さようなら、マスター」

嗚呼、何と、何と無慈悲なことだろう。

白い影が言う。否、声というにはあまりにも違う。それは何重にも  
重なり響く音。

嗚呼、何と、何と狂ったことだろう。

白い影が嘆く。否、嘆きというにはあまりにも違う。それは狂喜に  
も似た錯乱。

「残念だったな。」 白き闇” 私はお前の名を放ったりしはしない」

少女は口元を歪めて白い影に言い放った。

白い影はもんどりうって消滅していく。少女を愛しむ様に、憎む様  
に、穢す様に見つめながら。

その少し後、少女の姿も薄っすらと希薄になっていき、最後には完  
全に消え去ってしまった。

真冬の朝は寒い。とにかく寒い。

休みの日ならば昼間ではベッドの中でゴロゴロしたい所だが生憎と今日は月曜日、一学生は登校するためにベッドとおさらばしなくてはならないのだ。

「くう、今日もさみいなあ・・・って！うお！？な、ナンデスカ！？」

眠気を堪えて目を開けた剣示の目の前に飛び込んできたのは、イヴの顔のドアップだった。

「マスターを起こそうと思って」

「いや、もうばっちり目が覚めましたよ・・・ありがとう・・・イヴ」

溜息を吐きながら剣示はベッドから這出た。寝巻きを脱ごうと剣示は振り返るとじっと剣示を凝視しているイヴと目が合った。

「イヴ君。着替えるからね」

「うん」

返事をしたが、出て行く気配は一切ない。

「イヴ君。何度も済まないが着替えますよ？」

「うん、分かってるよマスター」

・・・オーケー、分かった。俺のナイスなバディを見たいのだろう。「安くはないぜ？」

「何が？」

・・・分かってる、俺今ただ滑りだわ。今のジョークはイヴには高すぎる。

「イヴ。着替えるところ見られるとおいちゃんは恥ずかしいなあと思うのですよ」

「うん、分かった」

そう言うといヴは素直に部屋の外に出て行った。

・・・人間、ストレートって言う言葉も大事だわ。

切実に思う剣示であった。

剣示は制服に袖を通し、鞆を持ってから居間に下りた。

「おはようーさん」

「おはようお兄ちゃん」

「おはよーです剣示さん」

「おはよう」

「おはよう剣ちゃん」

「・・・一気に賑やかになった我が家だ。うーむ新鮮だ。

意外と悪い気はしない剣示だったのだが、気になったのはテーブルに置かれた朝ご飯だった。

「ところで、この物体Xはなんですか？」

「それはイヴちゃんが剣ちゃんのために作った朝ごはんよ」

「うん。よかつたら食べて」

そりゃ、気持ち的には良い。大いに良いのだが、肉体的にこの物質を食べてもいいのかと思うのだが・・・どうだろう、死ぬかな。もう、元がなんなのか判別するのが不可能なほど黒く炭になり、形は大いに崩れ去っている。

「まあ、一応訊くけど食べられるものを調理したんだよね？」

「うん。卵と、ウィンナーを焼いたの」

よくもまあここまで原型を留めない調理ができるものだと、逆に感心してしまうほどの炭だった。

「無理しなくていいよ。自分でも下手だって分かってるから」

そう言っつてしゅんと下を向くイヴを見ると、食わなければ死ねと言われているのと同義である。

剣示は覚悟を決めてその物体を口に入れて一噛み。

じやり。苦い。究極に苦い。苦い以外の味は全くない。

「うわあよく食べますねえそれ」

信じられないといった顔でリペアが剣示の母親が作った朝食を口に運んでいる。

「うる・・・さいな。いやあ、まあ渋い味でなかないける・・・  
ような気もしないでもないぞ」

じやり。苦っ

「あ、今、苦って言いましたね？」

「いつてねえよ。単細胞リペア！幻みてんじゃねえよ」

じやり。じやり。じやりじやりじやりじやりじやりじやりじやりじやりじやり。

完食。

「うえ・・・う、うまかったよイヴありがとう」

できればもう二度と作って欲しくはないが。と心の中で思う剣示。

笑顔のイヴが何か言う暇もなく、剣示は逃げるように家を飛び出し学校へと急いだ。

その途中に甘いオレンジジュースと菓子パンを買ったのは言うまでもない。

始業のチャイムがなる十数分前のざわざわした教室。

剣示にとつては恒例の仮眠タイムである。机にうつ伏せになり、即、夢の世界へと誘う睡魔に逆らうことなく落ちようとした寸前で現実へと引き戻される。

「おはよう剣示さん」

「・・・はっ?!」

目を見開いて剣示は声を少しだけ荒げてしまう。

「な、なんでここに!?!つてあれ?制服!?!」

「おい剣示寝ぼけてんのかあ?エッジさんはかなり前に転入してきたじゃねえか何言ってるんだお前は」

と、隣の席の一般生徒(台詞はこれだけ名前すらなし)がそんなことを言ってくる。

「そうですよ。全く、寝ぼけてるんですね?剣示さん」

そう、そこにいたのは紛れも無く、学校指定の制服を着たエッジだった。

頭が整理出来ないまま、最早自分には普通という名の日常は戻ってこないことを確信するのであった。

## 第終夜：別つ世界。

「貴方にだけは、こんな姿、見られたくありませんでした」

激しい雨の音に消されること無く彼女の言葉が耳にこびり付く。

薄暗い家屋の中、項垂れるように女性がやって来た青年を上目に見ている。

着物の乱れた姿。美しい栗色の髪が流れるようにその着物の上を走る。

乱れた着物の隙間から覗くものはその女性には似つかわしくない、禍々しく隆起した赤黒い肌。首筋の下辺りから左肩までがその化け物じみた肌に犯されていた。

「嗚呼。何が、何があつたんだ・・・」

サッド・・・。

銀色の髪をした青い瞳の青年が呼ぶ名。彼女の名前だ。

「私のことは、もう。忘れてくださいまし」

何を言っているんだ？彼女は何を言っている？

青年は言葉すらも通じていないのかと思う程困惑した顔で彼女を見つめてしまう。

これが夢であればいいと幾度願ったことでせう・・・。



俯いた女性の口から漏れる嗚咽を含んだうめき声。発声すらきちんとしていないというのにも拘らず、青年の耳にこびり付くかのよう  
に鮮明に刻まれる言葉。

「私は。闇に囚われました。最早私は長くはありません」

いずれは人ではなくなり、人を喰らうものへと変わり果てませう・  
・。

嗚呼。嗚呼。青年は嘆く。己の招いた惨事が彼女に絶望を招いてしま  
ったのだと。

「マスター・・・」

青年の背中にか細い声がかかる。振り向いた青年の瞳は酷く憎しみを  
孕んだものだった。一瞬全てを白く染めるかのように雷光が進り、  
落雷音が酷く大きく響く。

その後静まりかえる暗がりの中、青年は静かに口を開いた。

「お前のせいだ」

「断片？なんだそりゃ？」

舞阪市のほぼ中央に面する夢幻高等学校。ここが剣示が通っている学校である。

その屋上の寒空の下、エッジと二人でベンチに座り、剣示はコロツケパンをエッジはあんぱんを齧りながら会話している。

「ええ、私も詳しくは知らされていないのですが、魔法書物、えっといヴさんでしたね？彼女は完全な状態では無いということが判明しているんです」

「はあ・・・？ちよつとついていけないんだが？」

曖昧な返事をしながら剣示はコロツケパンを嚙下してからコーヒーを飲み干す。

「ええと。つまり、私達でいうところの記憶喪失といったところなんですよ。彼女が失っている断片は”目次”。えっと・・・彼女は今自分に何が出来なのか、何を知っているのかを全く判っていない状態なんですよ・・・分かりにくいならすみません」

「まあ、俺の理解云々は置いといてだ。エッジはその断片を探してるつてのか？イヴじゃなく？」

エッジはもぐもぐとあんぱんを嚙下して、話し出す。

「ええ。イヴさんは断片のことすらわかっていないでしょう。忘れてしまっているのですよ、全てを。私の特務は魔法書物の断片の回収。更にその断片の消去です」

さらつと危なげなことを言うエッジに剣示が疑問を抱く。

「え？ちよつと待てよ、その断片はその・・・イヴの記憶みたいなもんなんだろう？それを消すつてどういうことだよ」

「私達には関係の無い話なのですよ・・・不本意ですがそういうことです」

剣示は中身のなくなったパンの袋をクシャッと丸めて制服のポケットに入れながら顔を歪めて言う。

「そういうことかよ・・・その断片っていうのに興味なんざねえけどよ。でもさ・・・イヴのものだろ？イヴの記憶なんだろう？それを関係無いっていうのはいただけないな」

「上の指令で動くだけです・・・冷酷と思われるでしょうけど、仕方ありません」

剣示にそう思われることが嫌なのだろう、悔しそうに顔を伏せながらエツジは踵を返した。

「なあ、エツジは・・・そのイヴのことあんま知らないと思うけどさ・・・あいついい子なんだ。どんな記憶かしらんが、それが戻ったところであいつが悪いことするなんて思えない」

「ええ。剣示さんがそう言うならそうなのでしょね・・・でも・・・私にはどうすることも出来ません・・・」

エツジが言葉を終わると共にエツジの姿が屋上の扉の向こうに消えて、扉の閉まる音が剣示一人の屋上に響いていた。

剣示はベンチの背もたれに頭をつけてダラシナイ姿で溜息を吐く。俺に何が出来るとていうんだよ・・・

「ま、なるようになれってんだ・・・」

誰に言うでもなくそう呟いて寒空のベンチで少し目を閉じ、チャイムが鳴るまでこの屋上で過ごすことをきめた。

大体たかが一高校生に何が出来るとていうんだ・・・

そう思い耽っていた瞬間、キイインという耳鳴りがした。

「よう、イーヴァルズグラックスの主ってのはお前だな？」

いきなり目の前に現れたのは白髪のボーイッシュなショートカットの髪に褐色の肌をした少女だった。

赤い瞳がキラリと光り、端正な顔つきがとても女性的な美人の部類に入る少女だ。

黒一色で統一されたレザー系の服装を身に着け、その魅力を倍増させている。

「えっと？誰ですかあんたは？」

「俺は炸羅<sup>サク</sup>だ。手っ取り早く言うとお前の命を奪いに来た！」

「・・・またか。またかよ！いい加減にしてくれ・・・俺は一般市民だぞ？何か知らんが命狙われるほど重要人物じゃねえ！！」  
いい加減このノリにうんざりしていた剣示がすごい剣幕で炸羅を捲

くし立てる。

「問答。無用」

腰にそえ付けたナイフを抜き、剣示の喉元を掻っ切る。

危機感にゾワッと総毛立つ感覚がしたと思ったら剣示は炸羅から数メートルも離れた場所に飛んでいた。

「・・・は？」

剣示がいた場所にはコンクリートの地面にヒビが入っている。

「流石、魔術書物の主。一筋縄ではいかないね！」

炸羅は持っているナイフを逆手に変え投げつけると同時に太股の剣を抜いた。

剣示の眉間を一直線に飛んでくるナイフが剣示にはまるでスローモーションで飛んでくるように見える。

難なくそれを捕り、炸羅の剣撃をナイフで止めた。

「あれー？まじかよ・・・」

常人に出来そうな動きとはかけ離れた自分の動きに驚きを隠せない。「余裕ぶった口！閉じさせてやる！！」

間延びした剣示の口調に怒りを彷彿させ炸羅は剣撃に蹴り、拳を織り交ぜ息も吐かせない連続攻撃を繰り出す。

首筋を狙った剣を紙一重でかわし、鳩尾を狙う爪先を払い、顎を正確に狙ったフックをバックスウェイで避ける。僅か数秒の出来事ではあるが炸羅は相手が自分より数段も上の実力を保有していると確信した。

「お前の名、聞いておく！言え！」

間合いを取り、構えを解いて剣示に向ってデカデカと叫んだ。

「はあ。相島 剣示だ。ヨロシク？」

「剣示か！覚えておくぞ・・・」

悔しそうに吐き捨て炸羅は忍者ヨロシクな様子で掻き消えた。

「覚えておかなくていいよ・・・」

タイミングよく始業のチャイムが鳴り響くなか、泣きそうな顔で剣示は教室へと向うのだった。

屋上の扉の上で一部始終を眺めていた影がくすくすと笑っている。滑らかな黒髪に大きな黒いリボンが印象的な幼い少女である。

「炸羅つたら、情けないなあゝくすくす・・・今度は凜の番だよ・・・」

自分のことを凜と呼ぶ幼い少女は黒いスカートを翻し、立ち上がって指を鳴らした。

エッジは目の前の光景に目を丸くしている。

教室の外の廊下にはパンダや熊やライオンやトラ。さながら動物園並の光景が広がっている。

「どうということ・・・？まさか・・・」彼の眷属の仕業・・・「でも・・・どうして今更・・・私を狙っているのではないとすると剣示さんを・・・？」

最早”彼”が剣示さんを殺すメリットが見当たらない。

だとすると、眷属の単独行動ということになるわね・・・。

眷属の中には好き勝手な行動をとる者が多く存在していることをエッジは知っていた。

それを容認するかのように”彼”は何の制御もしない。好きなように行動させそれが”彼”にとって不都合な場合のみ”彼”は出てくる。

「何はともあれ剣示さんを守らなきゃ・・・」

エッジは教室を飛び出そうと扉に手をかけたがまるで接着剤で止められているかのようにびくともしない。

「くっ・・・とにかく・・・クラフト。エリア凍結！」

両手で印を組むとエッジは結界を創る。そうすると教室の外の異変に気付き始めた生徒が騒ぎ始めた瞬間まるで氷ついたようにその姿を止めた。

「ふう・・・まずは・・・剣示さんを見つけないと」

「そうはさせないよ？デシヤバリなフォースは凜、大っ嫌い！！」  
「そう？光栄ね、私も眷属は大嫌いよ！」

エッジは制服のスカートを翻し、太股につけたベルトに固定してあったナイフを投げつける。

それを難なく避け、凜は教室内に黒豹を呼び出した。

「へえ。使い魔具現化能力か、でもそんな他力本願な能力は得てして使えないものよ？御出でなさい！グラム！」

エッジが構えた両手に光が収束し、馬鹿でかい剣がその姿を顕す。

「凜の能力を馬鹿にしたら死んじゃうんだからね？ケルベロスちゃん御出で〜」

凜がまるで歌うようにその名を呼ぶ。教室の3分の1ほどを有する巨体が顕れる。

寧猛を隠さず、その姿は破壊と殺戮の権化。地獄の番犬ケルベロス。

「・・・只の使い魔具現とは違うみたいね・・・」

「うふふふ。さあ、やつちゃえ！」

剣示は教室には向うことなく一直線に下駄箱に向っていた。

理由は勿論。

「くまっばんだっライオンっトラあああ・・・！？いつからここは動物園に様変わりしたわけ！？」

追われていた。

「・・・えー・・・ありえない・・・」

下駄箱にいたのはワニの大群だった。剣示は仕方なく振り返り、覚悟を決めた。

「マジでこれどうしよう？」

持っているのはさっき手に入れたというか奪ったナイフ一つである。ナイフを逆手に構え、飛び掛ってきたトラを紙一重で避けながら首筋を搔つ切る。素早く地を蹴り、後ろに控えていたライオンの脳天

にナイフを投げつけライオンの背中に着地と同時にナイフを引き抜いた。

「うーわ。こんな人間の動きじゃないなあ・・・」

自分の動きに気持ち悪くなるが、そんな悠長なことを言っている場合じゃないのでパンダと熊からバックステップでライオンの背から飛び降り、間合いを取る。

剣示の動きに危機感を覚えたのか、パンダも熊もすでに臨戦態勢で唸っている。

「こら。パンダお前もつと愛嬌良くしとかないと動物園で人気おちちゃうぞ」

と言ってみた。が、なんの効果もないようだ。

「わー。もう動物に愛着もてなくなりそ・・・」

そう剣示が言ったのは廊下の向こうから猫や、犬、果てには馬などが怒涛のように走ってくる姿を見てしまったからだ。

「しかし、これ殺しまくったら動物愛護団体から苦情きそうだぜ」などと呟いて近くで口を開いているワニの尻尾を掴んでパンダと熊に投げつけ、地を蹴り、階段の踊り場まで一気に飛んだ。

その後はもう後ろに目もくれずにとりあえず教室へと向う。スーパーマンヨロシクのスピードで速攻教室の前まで走り抜けた剣示の目に飛び込んだのは化け物と対峙するエッジの姿だった。

「ホント、勘弁してくれ」

「剣示さん！？逃げてください」

剣示の姿を確認したエッジが急かすように言う。それに対して凜がのんびりした口調で剣示に話しかけてくる。

「あれ？まだ生きてたんだね」

「まあ、なんとか」

剣示に気をとられたのかケルベロスの前足に易々とエッジは吹き飛ばされる。GRAMで咄嗟に受け止めたが、衝撃まではどうすることも出来ず、窓ガラスを突き破り剣示のいる廊下まで吹き飛ばされてきた。

「うぐっ・・・っ」

「まあ。でつかい犬ころですこと・・・」

エッジを抱き起こしながらケルベロスに向ってそう言った瞬間ケルベロスが口を開いた。

「ニンゲンゴトキガワレノソンザイヲケガストハユルサン」

剣示に一直線に突撃してきたケルベロスを思いっきり殴りつける。

まるでピンボールのように逆方向にすごい勢いで飛んで行き、外側の窓を突き破り校庭に叩きつけられた。

「まあ所詮犬ころは犬ころだな」

剣示が殴りつけた手をぶらぶらとしながら凜を見据える。

「！？ケルベロス！？」

凜は慌てふためいて校庭に血反吐を吐きながら横たわっているケルベロスを見下ろした。

「な、なんで？なんで凜の能力があっけなく破られるの・・・なんだ！？」

「え？知らね。」

「剣示さん・・・貴方一体どうしちゃったの・・・？まさか・・・リンクしたままなの！？」

エッジが驚きを隠せない様子で剣示の肩を揺さぶる。

「お、おい。なんだそのリンクって、知らないってば」

「剣示！凜が今度あったらぎったんばったんにしてやるんだから！」

エッジに問い詰められていた隙に凜は校庭に飛び降り、その瞬間に姿を消した。凜が姿を消したそのすぐ後にはケルベロスもほかの動物も全て消滅していた。

「ふう・・・やれやれ・・・ってどうしようかねえこの有様は・・・」

「

溜息を吐き、辺りの惨状を目の当たりにした剣示が呟く。

「君がそれを心配することはない」

その声は剣示のすぐ傍で聞こえるようできて、遙か彼方から響いているようにも思えた。



「シェイド様！？・・・何故？・・・」

エッジが驚いたように後ろを振り返るとそこには銀色の長い髪を腰辺りまで伸ばした美女がエッジと同じく白一色の出で立ちで立っていた。

「初めましてだね。剣示君、私はフォースの指揮官シェイド。」闇の剣”とも呼ばれている」

「あ、ああ、初めまして・・・シェイドさん」

「残念だが、剣示君。君の抹殺が承認された」

「え、」

剣示が訊き返す暇も無く強かに顎を打ちぬかれた。剣示にはその手の動きすら見る事が出来なかった。

「がっ・・・何を・・・？」

「シェイド様！？」

「エッジ。お前はどう思った？簡潔に言え」

シェイドはエッジに有無を言わすことなくピシャリと言い放つ。

「はっ・・・私は剣示さんが魔法書物とのリンクを常時行っていると判断します」

「そうか。だとしたらすべき事は判っている筈だ」

「でも！！剣示さんはっ・・・」

エッジは震えながら目に涙さえ溜めたままシェイドに食い下がる。

「いい人か？そのいい人間とやらの何度この世界を滅ぼされかけた？」

まるで物でも見るかのようにエッジを見下ろし、淡々と言い放つシェイド。

ふう、と短い溜息の後、シェイドは手を翳し、呼ぶ。

「御出でなさい。レーヴァンテイン」

漆黒と紅の光がシェイドの手に収束し、禍々しい剣の姿を形取る。まるで脳内がザーザーと砂嵐のように荒れ狂う音を立てている。

なんて理不尽な。

剣示は思う。

ああ。何てこいつは理不尽な事を言っている？

剣示の体は急速に変化している。より速く動けるように。より強く硬く全てを砕くように。否、これは最早変化ではない、進化だ。

なんの説明すらなく俺を殺す？

みしみしと体が音を立てている。

馬鹿にしている。ああ、馬鹿にしている。

「見る、エツジ。急速な進化だ。それでも彼が危険ではないと？」

「それはっ！？シェイド様が何の説明もなく剣示さんを殺そうとしているからじゃないですか！？剣示さん！！落ち着いてください！お願い！お願いですから！！」

エツジが剣示に縋る様に抱きすくめ叫ぶ。

「無尽蔵に魔法書の力を引き出し、かつ自然にそれを行使出来る人間に危険が無いと言えるほうが狂人だ」

「剣示さんは私を助けてくれました・・・優しい本当に優しい味のコーヒーを作れる人なんですよ・・・だから大丈夫だと思うんです」

「失望だエツジ」

次の瞬間には剣示の背中にはレーヴァンティンの切っ先が突き出ていた。

エツジと共に貫いたレーヴァンティンを冷酷に引き抜き、踵を返して言い放つ。

「闇に還れ」

ああ。なんて酷い結末だ。

こんなありがよ・・・？

頼む、誰か・・・

誰か  
・  
・  
・

助けてくれ

[illegible]

「!？」

エッジを抱きしめながら咆哮する剣示の体が急速に光を纏い、白い闇を形成していく。

「くっ！させるかっ！！！」

シェイドがレーヴァンティンを振りかざす暇も無く、剣示とエッジの姿は一瞬にして消え去っていた。

「……世界生成か。まずいことになった……夢幻町とはよく言

ったものだ。ここは魔に満ち溢れている」  
吐き捨てるように言い、シェイドの姿は忽然と消え去った。

「あ、イヴ。食べないなら私に頂戴よー」

リペアがボウツとしているイヴのアイスに手を伸ばすと、反応良くひよいとその手を避ける。

「むう・・・意地汚いなあーイヴ」

それはリペアのほうだろうが、イヴは反論もせず、ゆっくりとリペアを見て言う。

「マスターが、消えた」

## 第終夜：別つ世界。（後書き）

終夜と書いておりますが、最終回ではありません。言わばちょっとした展開の区切りとしてそういう感じにしました。ちよつと長くなりましたが読んでくれると嬉しく思います。ではまた次の話で会いましょう。

## 第一夢：夢ノハジマリ（前書き）

リペア「どーん！どうもみなさん！毎度読んでくれて嬉しい限り  
っす」

イヴ「ありがとう」

リペア「さてさて、この”夢よこ”（夢幻町へようこそ）も新章突  
入っす。そういうわけでまあ登場人物やら関係などなどをちよこつ  
と説明しちやおうかなあと思っております！」

イヴ「余計なお世話？」

リペア「そこ！ちやちやいれない！ただでさえ今回笑いか一切な  
いからここでちよつと馬鹿やつとかないとモタナイのよ！」

イヴ「うん。これ読むのね？えつと・・・リペア。アカシッククロ  
ニクレス図書館の司書として働いていたが、最近クビにされる。年  
齢は不詳。身長は157cmで体重は・・・」

リペア「ごらああああ！！リペアチョップ！」

イヴ「痛いよ・・・」

リペア「どっから持ってきたんなもん！？」

イヴ「天の声が聞こえて・・・」

リペア「ま、まあ。そんなわけで私の好きな食べ物はもちろん甘い  
もの全般でっす 嫌いなものはあんまないっすねえー。ま。そんな  
わけで今回のキャラ紹介はワタクシことリペアでしたー しーゆー

ー  
イヴ「しーゆー。ばいばいみんな」

## 第一夢：夢ノハジマリ

リン・・・

鈴の音が聞こえる。

リン・・・リン・・・

「ん・・・朝か」

「おはよう。剣示さん」

柔らかな日差しが二人の眠るベッドを照らし出す。剣示の腕枕で眠っていたエッジが身じろぎし、柔らかな唇を剣示の唇に重ねる。

「ふふ。おはようのキス・・・もう慣れた？」

「恥ずかしいぞ」

剣示は照れくさそうに優しくエッジの頭をずらして起き上がる。

「誰もいないんだから恥ずかしがる必要ないじゃない？」

「そうだけど・・・何か・・・な」

クスクスとエッジが笑いながら起き上がってシーツを剥いでからクローゼットに入っている自分の服を身に着けた。勿論二人共裸で寝ていたのだ。つまりはそういう関係だ。

「何食べたい？」

「何でもいいよ。エッジが作るものなら何でも食べるさ」

ボブカットの髪をゴムで纏めながらエッジはクスッと笑って振り返った。

「ねえ、知ってる？剣示さんいつもそう言ってるのよ？」  
「そうだった？」

たまに思う。俺は誰だろうかと。

エッジのことも本当は分かっているのではないだろうか。

俺は相島 剣示。それは只の呼称にすぎない。彼女はエッジ。それも只の呼称にすぎない。

「ただ、気付いたらエッジと暮らしてたんだよな・・・」

「うん？何？剣示さん・・・？」

「いや、別に何でもないよ。そうだ、今日はエッジの得意な卵のフルコースがいいな」

「ふふ。分かった、すぐ用意するね」

ニツコリと笑ってエッジは寝室を出て行った。いつもと変わらない日常。ただ平穏で、変わり映えはないが幸せに満ちた日常。

俺は・・・何者だ？

そう、それは恐怖。自己を知らないというとてもない恐怖。

ただ、世界が自分という存在を容認している。とても都合のよい形で。

そう、剣示という存在はこの世界に必要であると。誇示するかのように剣示は愛されている。

「この世界は・・・核心に霞がかかっている気がしてならないんだ・・・」



キンコンカン・・・。終業のチャイムが鳴っている。

リペアは大きく伸びをして欠伸をかみ殺した。

「ふう。退屈だわー」

「リペアさん？妹様がお迎えに来てますわよ」

リペアが教室のドアのところに目をやるとイヴがちょこんと突っ立っていた。

「じゃあ帰りますねーまた明日」

「御機嫌ようさようなら、リペアさん」

教室内で女子達が挨拶を交わす。

ここは舞阪市立のエスカレータ式の名門夢幻女子学園の高等部でほかにも小等部と中等部がある。リペアは最近からこの学園に通っている。イヴも同じくこの学園の中等部に通っている。

つまりは辻褄合わせなのだが、リペアはどうにもこうにも馴染めないでいた。

学園からの帰り道、いつもながらに同じことを言わなければ気が済まない。

「イヴ・・・名門女子高はやめて欲しかったわよ・・・」

「交換留学を行ってるところがここしかないと言ったはずでしょ？」  
これをまた律儀に同じ答えを繰り返すイヴ。全く同じやり取りを行

うことに何の意味すらないが二人の恒例の行事となりつつあった。

「それで、姉さん。何か進展はあったの？」

「まあ、アカシッククロニクレスにハックかけるのは精神的にもすんごいシンドイから長時間は危険なのよ・・・」

「それで？マスターは・・・？」

リペアの不幸自慢を軽く流しながら次を促す。その様子にリペアは溜息を吐きながら答えていく。

「簡単に言つと剣示さんは、フォースの隊員を取り込んで世界を創つたのよ・・・どうやら”闇の剣”が一枚かんでるみたいね」

「フォースのトップね？コロシテやろうかしら・・・」

本当に憎しみを込めたような声でイヴは忌々しげに言い放った。

「ちよつと。その危ない発言は止めて？怖いから」

それからイヴは一言も話すことなく黙々とリペアの後について帰る。夢幻女子学園から数分の所にあるバス停のベンチで二人何の会話も無く、只、バスを待つ。

このバスで10分くらいの駅前に降り、それから電車に乗り継ぎ3駅目で降りると剣示の家の近くの駅に着く。

登校時間はそこまではないが、乗り遅れるなどした場合、完全に遅刻したりするのだ。

だからイヴもリペアも常に腕時計を見る癖を身につけてしまった。

剣示の周辺の事後処理なのだが、イヴとリペアが結託し、うまくやっていた。

剣示が行方不明になってからイヴの力を使い、剣示の家族や周辺に暗示をかけ、剣示は交換留学で外国にホームステイしていることになった。

たまにリペアがエメールを作成し、イヴの力で転送しこちらに郵送してくる。

リペアの能力もあってかキッチリとケアしているもので、剣示がホームステイしていることになっている家に電話をするときちゃんとそ

ちら側の家族が剣示の様子などを報告してくれる。

もちろん人間の雛形を作成し、擬似人格を植えつけた仮初の家族である。

手っ取り早く事故処理をするのであれば、剣示の雛形を創り、擬似人格をアカシッククロニクレスにアクセス後に剣示本人の記憶を植えつけたものを雛形に移植すればよいのだが、それにはイヴが猛反発した。

何故か分らないが、イヴの言い分では剣示の雛形は最早創ることが不可能だということだった。

リペアが最近アカシッククロニクレスを調べたところ、事実剣示の記憶はおろか、剣示という存在自体がゴッソリと抜け落ちるかのようになり白紙になっていた。

電車にユラユラと揺られながらリペアは考え事をする。

短い時間だがリペアにとって時間などは問題ではない。脳内でアクセス記録を圧縮し、整理することは司書の時の癖ではあるが、ずっと司書をやって来たリペアにとってそれは最早習慣となっている。

「ふう……」

一息吐いたリペアが隣を見るとイヴはうつらうつらと小船を漕いでいた。

「……端から貴方は剣示さんを選んでいたの……？イーヴアルズグラックス……」

リペアは疑問を整理するかのようにな誰にも聞こえないような小声で呟いた。

その声はカタンカタンと電車の走行音に掻き消され、自分の耳にも残ることはなかった……。

「サッド様……？」

「ん・・・ああ、サッド。少しウトウトとしていたよ」

薄暗い家屋の中、場違いな豪華な椅子に肘をついて目を瞑っていた  
”彼”がサッドの声に目を開けた。

「そうですか。起こしてしまつて済みません」

「いや。構わないよ・・・それにしてもここまで私の思いのままに  
事が運ぶとは嬉しい限りだよ」

「・・・剣示さんのことですか？」

サッドが俯き加減に訊くと”彼”は薄く笑つて「そうだ」と短く答  
えた。

「彼に何をさせるお積もりなのでしょう？」

「何をさせる？何を言っているのか・・・サッド。彼には只、思い  
出してもらっただけでいいのさ。自分が何であるかをね・・・」

”彼”は足を組みなおし、口元を歪めて禍々しく微笑んだ。

その家にはサッドの好きなオルゴールの音色が只永遠と流れ続けて  
いた。

悲しい音色と共にサッドは薄暗い縁側に座り、その音色を聞くとた  
だ頬に雫が伝うのだった。

## 第一夢：夢ノハジマリ（後書き）

今回はシリアスな部分が多くて面白くなかったかもしれませんが、前書きの二人の微妙なコントで勘弁してください……。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

## 第二夢：泡沫ノ夢（前書き）

イヴ「皆さんこんにちは今日はリペアはお留守番です」

剣示「お？イヴここは何する場所なわけ？」

イヴ「あ、マスターお久しぶりー。ここは自己紹介する場所みたいだよ」

剣示「ほほう。いつからそんなもんが出来たんだかしらんが、大体そういうのって俺が一番に紹介されんじゃねえの？」

イヴ「・・・さあ？・・・ごめんマスター・・・今日は私みたい・・・」

剣示「・・・マジデスカ？」

イヴ「あ、これ読むのね？イヴ。正式名称イーヴアルズグラアックス。現在、相島 剣示をマスターとして世界に顕現している。身長144cm体重34kg。B52W44H49。好きなものはマスター。嫌いなものはマスターに危険をもたらすもの」

剣示「開けっぴろげだなあイヴ。そういうのは小出しがいいらしいぞ」

イヴ「そうなの？あ。マスターもう終わりみたいだよ」

剣示「マジかよ！？はえーよ！」

イヴ「しーゆー。皆またね」



ダレニ？

体はどこも痛くはない。感覚もないが、それも少しの間に過ぎなかった。

「う．．．あれ？」

夢．．．？

ソウ、ユメダ

剣示は冷たい床の感覚に目を覚ました。朦朧とする意識を必死で繋ぎとめながら辺りを見回すと、そこにはエツジが横たわっていた。

「おい。おい！エツジ！？大丈夫か！？」

「ん．．．はれ？剣示．．．さん？うう．．．頭いたあい．．．」

剣示に起こされ、頭を揺すりながらゆっくりと起き上がってエツジは周りをキョロキョロと見渡す。

「はあ．．．れ？うーん。やっぱり昨日は飲みすぎましたね．．．

二人して酔いつぶれてこんな所に寝てるなんて」

え．．．？

剣示の意識は急に遠退くような奇妙な感覚に襲われた。まるで暗示にかかったような感覚。

「あ、ああ。やっぱり量が過ぎたよな．．．」

「そうですよ。いくら大学の新年会だって言っても飲みすぎでした」  
ああ。と剣示は思う。

俺は相島 剣示。22歳。今年で大学4年になることになってい  
る、だから就職活動に勤しんでいるところじゃないか。やっぱり飲



みすぎたな・・・。

それから隣にいるのはエッジだ。高校の時に会って、同じ大学に入学してから友達として付き合い始めた。そして最近恋人という関係になったばかりだ。

「わ。バイトっ！？遅刻しちゃう！」

エッジは時計を見て飛び上がりながら慌ただしく支度を始めた。

エッジは近くの喫茶店のウェイトレスのバイトをしている。どうも、そのマスターの淹れるコーヒーに一目惚れしたらしい。

「じゃ、行って来るね！」

「ああ、行ってらっしゃい」

エッジを見送り、少し寒い部屋のエアコンの温度を上げた。

季節は冬真っ盛りだ。

二日酔いなのだろう、剣示は少し痛む頭を押さえながらもう少ししたら外の空気でも吸いに行こうと思うのだった。

## ハジマリノ冬

チユンチユンと鳥の囀りで目を覚ませる朝というのはとても良い。それが真冬で冷たい空気の中で目が覚めたとしても気分がいいものだ。

言うなれば出来たての恋人とのさり気ないキスを交わしたような気分になれる。

「うーん・・・」

剣示は大きく伸びをして半身を起こした。

「ん、あ・・・おはよー剣示さん」

一瞬ぎよっとなる剣示にキョトンとしながらエッジは剣示と同じく半身を起こす。その際体を覆っていた厚手のシャツがハラリと落ちる。全裸だ。

事件デス！ネエサン！

などと姉もいないのに心の中で叫んでいる剣示を他所に、眠そうにふぁーっと欠伸をしているエッジ。

「ん？どしたの？剣示さん？」

「え？え？どしたのと訊かれましても・・・俺ドシタンデスカ？」

思わず棒読み口調で固まる剣示を可笑しそうに見ながらエッジは悪戯っぽく言う。

「どしたって・・・それ私に訊くの？・・・エッチ」

「きゅーんきゅん」

「え？何？剣示さん？」

「うむ、これはな、ハートを射抜かれた効果音だ」

「ぶ。あははははははは」

剣示のいかにも真面目ですといった顔で言う台詞に思わず噴出してしまふ。

笑われている剣示もエッジの可笑しそうな顔につられて笑ってしまふ。

ひとしきり笑ったところでエッジは不意に微笑んで剣示にキスをする。呆氣にとられる剣示にエッジは笑って言う。

「おはようの・・・キス」

剣示は思う。

ああ。愛しい。と・・・。

## 剣示失踪から2日目

「ちよいとイヴさん！私のプリン食べたでしょ！？」

物凄い剣幕でイヴの部屋へと踏み込んできたリペアは開口一番そう言い放った。

「冷蔵庫にあったやつ？」

「そうよ！それ！！」

「2つあったから1つ私のかと思ったの・・・ごめんなさい」

ダンッとイヴの部屋のテーブルに足を乗せ、リペアは叫んだ。

「そうやって素直な子気取ってりや読者の好感度上がってると思っていてんでしょー！！」

・・・と、意味不明なことを喚きながらリペアはプリン一個に拘ってイヴに突っかかっている。

「ふうふう・・・もういいですー。はあはあ、喚いたら余計疲れた・・・」

「首尾のほうはどうだったの？」

イヴは頂垂れながら荒い息をしているリペアに淡々と質問をする。

「はあはあ・・・まあ、ハッキングに魔法文章違法コピー。必要なものはごっそり奪って強盗成功な気分ですよ・・・」

「そう。よかった・・・こっちも見つかったよ。夢幻女子学園、ここが交換留学生制度を実施してる有名な学園みたい」

「お嬢様学校はやめてね？かたくるしーの嫌いなんです」

「残念だけとお嬢様学校と言われてるみたいだし、ここしか交換留学生制度を実施している学校はこの周辺には存在してないみたい」  
冷静に事実を述べていくイヴにリペアはこめかみを押さえながら怒りを抑えている。

「人が死ぬ思いでアカシッククロニクレスにハッキングしたつてのに、調べるだけ調べてその結果を言って終わりですか！！！！」

やはり怒りを抑えられないタイプらしい・・・。

イヴの方と言うと何故リペアが怒るのか皆目検討がつかないといった感じでキョトンとしている。

「・・・」

「はあはあ・・・」

「・・・」

「ふうふう・・・」

暫しのリペアの息遣いだけが聞こえる沈黙の後、ゆっくりとイヴは

口を開く。

「なんで怒ってるの？」

「じゃー…………！！！！！」

・  
・  
・  
何も言うまい。

さりとて冬はまだ当分の寒さを誇示し続けるだろう。

この家の住人である、剣示の居ないまるで明かりが消えたかのよう  
な寒さも当分癒える事はないのかもしれない・・・。

只、リン・・・とイヴのクビに提げられた鈴1つだけつけられたネツクレスが鳴り響いた。

寂しそくに、切ない音色を響かせながら夜は更けていく……。

リン・

サクラノイロノナイ春

春の日差しが心地良い。

鳥の囀りが安らぎを与えてくれる。

春の日の昼過ぎに居間のテーブルにうつ伏せになりながら、剣示は春眠曉を覚えずの気持ちで瞼を接着剤で止められてしまったかのよ  
うに閉じたままである。

テーブルにうつ伏せた剣示の周りにはレポートと教科書が散らかっている。

カチャつと居間の扉が開く音がし、エッジが買い物袋をもって帰宅した。

剣示の姿を見て、子供を見る母のような表情でクスッと笑い、剣示の耳元にたたいまと囁く。

それから剣示が散らかした教科書類を片付け、キッチンへと向った。

トントントン。コトコト・・・ジュウ・・・

そんな音に誘われるかのように剣示は瞼を開く。  
外を見るとオレンジ色に染まった景色が見える。

「ああ。寝ちまったのか・・・ってもう夕方!？」

キッチンからエッジが顔を出して微笑む。

「よく寝てたね・・・あ、もうすぐご飯出来るからね」

「ああ、ってエッジも起こしてくれればよかったのに・・・」

「だって・・・あんまり気持ちよさそうに寝てるんだもの」

「春だからなあ・・・」

そう言ってから剣示は不意に気付いたことを口に出した。

「そういえば、桜。見てないなあ・・・今度花見にでもいこうか？」

「え?・・・うん・・・そう、だね」

ふと悲しそうな、切なそうな顔をしたエッジに剣示は気付くことはなかった。

春は、もう終わりを告げようとしていた・・・。

早足で過ぎ去っていく。全てが夢のように早く、とても早く・・・。

そう。夢のように・・・。

### 第三夢：安イ奇跡（前書き）

剣示「うお。いきなり俺から始まるなんて今日は俺が自己紹介する番なのかね？」

リペア「あー剣示さんいたんですねー」

剣示「おおー！？リペア・・・今回は人気でなさそうな自己紹介じゃないか！くそう・・・なんでイヴじゃないんだ・・・」

リペア「しっ失礼ですよー！！私は夢よこのヒロインですよ！  
！」

剣示「うそ！？まじかよ！！お前ヒロインだったの！？」

リペア「！？なんですかその嘘だろみたいな顔は！！」

イヴ「今日は二人が馬鹿やったから自己紹介スペースがとれないみたい。しーゆーみんな」

リペア・剣示「っておい！？」

### 第三夢：安イ奇跡

ミンミンミンミンミン……

蝉時雨の中、男性と女性のキスが交わされている。

「トキコさん……」

「セイジさん……」

ピ。という音と共に老人の前に二人の若者が印籠を掲げて叫びだす場面が映し出された。

「ええい！控え控え！このお方をどなたと心得る！？」

「ちょっと何でチャンネル変えるの？」

「うるさいですねー。なんでこんな真冬に夏のラブストーリーの再放送なんかみなきゃならないのよー……」

「この時代の情報収集してたのに……大体年中季節感の無い時代劇再放送を見る必要性が感じられないよ」

「なにいつてんですよ？これこそ日本の文化を知るに一番必要性在りないワバ濃縮日本文化ですよー！」

「この紋所が目に入らぬかー！？」

ピ。

「私、もうセイジさんしか目に入らないわ」

「僕も……トキコさんしか目に映らないよ……」

ピ。

「この仲の良い御兩人。認めてあげてはどうですか？タダキチ殿？」

「はっ、ご、御老公様・・・わかりました・・・」

ピ。

「保険料があがらない〜入るなら今ですよー」

ピ。

「よくかんがえよーお金は大事だよー」

ピ。

「ちょっとー！？何なのよー！？」

「そっちこそ何なの？」

お互い譲らない二人がリモコンを取り合いだし、二人の手からリモコンが離れ宙を舞う。

ガツッ・・・ゴトン。

「あ」

「あ」

宙を舞ったりリモコンが当たった先は不法侵入者だった。

その不法侵入者にはにつこりと微笑んで言う。

「お邪魔してます。お久しぶりですね、皆さん」

「あー・・・と。えっと？」

「だれ・・・？」

あまり顔合わせしていないイヴはともかくリペアが頭を押さえながら考え込んでいる。

「待って！今思い出すから。顔は覚えてる、うん覚えてる」



「サッドです。よろしく願いますねイヴさん」

「・・・よろしく」

警戒しつつも握手を求められそれに応じるイヴをにこやかに見ながらサッドは用件を切り出す。

「さて、ここに来たのには用件があつてのことです」

「そう。何の用？」

「貴方の主である、剣示さんの居場所についてです」

その言葉を聞いたイヴの顔色が変わった。

訝しい顔と嬉しそうな顔が入り混じった複雑な表情をしつつ、次の言葉を待つ。だが、

「超無視されてる？私・・・」

次の言葉はリペアだった。

## 真夏ノ雪

ミンミンミンミン・・・ジーワジーワ・・・。

蝉の声に薄っすらと額に滲んだ汗を拭いながら微笑むエッジ。

「ねえ、剣示さん。蝉の声ってなんかいいよね」

「そうか？うるさくつてたまらんがなあ・・・」

外の気温は凄まじいが、二人は木陰の中で本を読んでいる。久しぶりに図書館へ行つてからの帰り道、エッジが木陰で涼もつとの申し出に快く快諾したことを少し後悔している剣示だった。猛暑なのだ。こんな日は家でクーラーをつけてのんびりしたい現代人としてはこの行為はあからさまにキツイ。

「ねえ？エッジ・・・？お、お腹空かない？そこのファミレスでもいかねえ？」

「え？大丈夫だよ。それにまだ朝ごはん食べてから1時間くらいし

か経ってないよ」

うん。さり気無い、暑いからどこか行こうという申し出は却下だそうだ。まいったね・・・

剣示はガツクリと読んでいる本に目を落とす。

だが、少しするとジリジリと暑さが身に沁みてくる。

よし、ストレート勝負で行こう。大体　もストレートじゃなきゃ通じないじゃないか・・・

？・・・え？ま、まあいいや。よし言うか。

「なあエツジ。暑いから涼みにどっか入ろうか？」

「だめ」

あまりに短い返事に剣示は聞き違いかと思ひ訊きなおす。

「えっと、どっか涼みにいこうか」

「だから・・・ダメっていつてるでしょ？だって剣示さん暑い暑いっていつてもクーラー効かせた部屋から出ようとしないじゃない。たまにはこういうのも健康的なの！」

どうやらダメらしい・・・。残念だが、読書に没頭して暑いのを少しでも忘れるしかないな・・・。

覚悟を決めて持っていた本に目を落とした。

うむ。ちゃんと読むぞ！

この話は悲恋物の小説だ。

内容はこうだ。余命が半年と冬の初めに告げられる少女。これが始まりだ。

少女は雪がとても好きだった。その少女が病院で元気な少年に出会う。その少年は足を怪我して入院してくるのだ。その少年は最初どこにも動けないから退屈で我俵を言いつつ過ごしていた。少女はその少年の我俵に付き合ってあげ始めた。

「あの中庭の花が見てみたい」そう言えば少女はその花を摘んできてあげた。

「屋上からの空が見たい」そう言えば屋上の空を絵に描いてあげた。

動けない少年に代わって少女はいろんな所に行ってあげた。

・・・・・・・・・・。

む・・・読んでいる俺は読んでいるぞ・・・

それから少女は具合が悪くなっていき、今度は少女もベッドからあまり動けない状況に陥っていく。少年は足が治り、今度は少女の我俣を聞いてあげることにした。

だが、少女は「貴方の姿を見てるととても楽しい」とそう言うだけで我俣を言わない。

だから少年は少女に毎日会いに来てあげた。そして毎日少女に話をしてあげた。

今日あったこと、母親のこと、友達のこと、父親のこと、病院の近くの隠れ家のこと・・・。

・・・・・・・・。

む・・・眠くない。眠くなんて無いぞ・・・

そんなある日、少年が少女を訪ねると少女は面会謝絶の部屋に移されていた。

それでも少年は毎日少女のために手紙を書いて少女の母に手渡した。

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

・・・・・・・・。。

・・・あ。寝てない寝てないからね？

えーと・・・・。なんだっけ・・・・。

どっからだっけな・・・・。

まあ、それから色々あったんだろうけど、少女に最後に会った少年は少女に最後に我俣を言っただけだ。どんな我俣も1つだけ叶えてあげると言った。

「ふふ。じゃあ私は・・・雪が見たい・・・私、雪がとても好きなの・・・」

だが、季節は夏だ。少年は毎日神社やお寺などを回り神様に雪を降らせて欲しいと願った。

そして少年は寝る暇も惜しんで色々な所へと神頼みにいくのだ。

夏休みということもあつて自分の自転車で遠く遠くへと行く。

そして疲れ果てた少年は最後に着いた神社で言う。

「僕は死んでも構わないから最後に彼女に雪をみせてください」と。  
そして奇跡は起きる。

真夏の夜に真つ白な粉雪が降り注ぐ。

その雪を見ながら少女はこの雪は少年の見せてくれたものだと思い、  
とても幸せな表情で息を引き取ってしまう。

それから・・・・・・・・・・。

えつとね・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

・・

ジワジワ・・・・・・・・。

蝉の声が少しだけ心地良く聞こえてきた夕暮れ時・・・・・・・・。

剣示は周りの色にハツとして目を覚ました。

オレンジ色に染まつた景色に周りを見渡すとエッジが微笑んでいる  
のが目に止まつた。

「暑いのによく寝てたね？」

「あ、ああ。ごめんなエッジ・・・・せつかくの休日だったのに」

「ううん。いいのよ剣示さんの寝顔が可愛かったから許してあげる」

可愛くなかったら許してもらえなかったのだろうかという疑問は打ち  
消しつつ、剣示は照れくさそうに笑った。

でもさ、急に寒くなったつつうか・・・・なんだこれ？寝てたからか？  
剣示が不思議に思つてエッジに疑問をぶつけてみた。

「何か寒くないか？気のせいかな？」

「うん？そうだね？夕暮れ時だからかな？」

それにしても寒いな・・・・・・・・。

雪でも・・・降るんじゃないかと思えるほど・・・？

「え！？」

剣示が急に上を向くのでエッジも驚いてそれに習うかのように上を見上げた。

そこにはオレンジ色にそまった雪がちらちらと舞い落ちてくる姿が映し出されていた。

「わぁ・・・雪・・・？・・・素敵ね・・・奇跡みたい」

「え？まじかよ・・・」

自分が読んだ物語の出来事が現実起こったような奇妙な感覚に剣示は驚きつつ、その奇跡に二人で暫らく感動を共有した。

奇跡は・・・そんなに安く起こるもの？

誰かの声が聞こえた気がした・・・。

リン・・・

遥か遠くで鈴の音が聞こえた気がする。

でも、その音はとても切なく、悲しげな音に聞こえるのだった。

一休みしましょ（前書き）

リペア「リペアの自己紹介コーナー！！どどんパフパフ！！さー今日も始まりましたこのコーナー！私ことリペアが皆様に随時お知らせする自己紹介！今回は」

剣示「ってなに仕切ってんだよ！！お前のコーナーかよ！」

イヴ「早く紹介しないと場所なくなっちゃうよ？」

剣示「そうだった。リペアに突っ込んでる場合じゃない」

エッジ「あ。剣示さん。ここにいたんですね」

リペア「ほら人数増えたら場所がなくなっちゃうでしょ・・・皆出てってくださいよ」

剣示「うわっ自分勝手だな！！」

イヴ「いいよ。マスター出ようよ」

剣示「え？」

## 一休みしましょ

剣示「うおお！？見てみるエッジ！！すごいぞイヴがこんなことまで出来るなんて！！」

エッジ「わぁ！こつちまで自己紹介コーナーが来ちゃいましたねえ」

剣示「イヴ！こつちこいこつちこい」

イヴ「何？」

剣示「ナデナデナデ・・・いい子だぁイヴ！」

イヴ「えへへ・・・ありがと、マスター」

剣示「いやはや余裕があるっていいなぁ。適当にだべるか？」

エッジ「もう、剣示さんったら」。ちゃんとしなきゃダメですよ？」

剣示「うむ、わかつてるって・・・えっとそうだなー。俺の自己紹介からか？」

イヴ「うん。そうみたい」

剣示「よし！いくぜっ！相島 剣示。年齢18歳。夢幻高等学校3年だ！夜露死苦！えーと？ほかなんかあるんか？」

エッジ「あ、ほらほら。剣示さんあっちカンペありますよ？」

剣示「うわぁ・・・アカラサマだなぁ・・・まぁいいや。えー・・・特にこれといった得意科目や得意な運動関係はなし。いや、ほつとけ！それから・・・身長176cmに体重59kgまぁ自分で言うのも何だが筋肉はちゃんとしているからね？」

エッジ「そうそう剣示さんの身体って結構いい身体なんですよねえ」

イヴ「・・・なんで知ってるの？」

エッジ「え？・・・そ、それは・・・」

剣示「イヴ。そいつぁあれだ。大人の世界だからイヴは知っちゃだめなんだ」

イヴ「・・・マスターがそういうなら・・・分かったよ」

剣示「ナデナデ・・・ああ。イヴはいい子だなあ」

イヴ「・・・ぽ」

剣示「それから・・・？好きな食べ物というか本格的なコーヒーが好きだな。ちゃんとしたコーヒーマーカーも持つてるぜ自前のね。

まあ豆もちゃんと挽いてから作るから香りもいいのが出来るんだぜ

」

エッジ「ええ。剣示さんの淹れたコーヒーは絶品ですねえ」

サッド「ええ、本当に」

剣示「うおっ。いきなり来たのね？もしかして今日は拡大版自己紹介コーナーな訳？」

イヴ「うん。そうみたいだね」

剣示「そっぴきまで居たりペアはどうしたんだ？」

イヴ「リペアいると話ぐちゃぐちゃになるから向こうに置いて来たの」

剣示「いやいやいや。イヴ・・・いい子だ！！！！マジでよくやった！」

イヴ「えへへ」

サッド「それですね、今回はかなりの人数を紹介するにあたって、私がナレーターとして雇われました。時給300円です」

剣示「安っ！！え！それでよく受けたね・・・」

サッド「ええ、最近物入りでちよつとでもお金欲しいもので・・・」

剣示「・・・大変なんだなあ・・・」

エッジ「悪の組織っぽいのに入ってるのにバイトするのも微妙ですよね・・・」

サッド「あ、うちは給料出ませんから皆バイトしてるんですよ？」

剣示「うわ・・・それ言っちゃだめだろ・・・あれだ、読者の夢ぶち壊しだろ・・・」

サッド「現実には厳しいものなんですよ・・・本当に」

剣示「まあ。そろそろ本題に戻ろうか・・・」

サッド「そうですね。私も給料分のお仕事はさせて頂きます」



イヴ「お仕事ついてもカンペ読むだけだよね」

剣示「イヴ。それも大事なお仕事だ・・・察しなさい・・・」

サッド「登場人物ナンバー04。エッジ。年齢不詳。身長164cm  
体重46kg。フォースに所属。遊撃部隊特務隊隊長」

剣示「え？部隊長だったの？エッジって・・・」

エッジ「ええ、私、ちよつと偉いんです。この前あつさりやられたり、殺されたりと良いとこなしですけどね・・・」

サッド「好きなもの、可愛いもの全般。甘い食べ物。嫌いなもの、  
難しい人間関係（上層部の人間の価値観の相違など）スリーサイズ  
は」

エッジ「え？え？そういうの言わないでくださいよ！言わなきゃだ  
めなんですか!？」

剣示「まあまあ、エッジそういうのは知りたがる奴もいる」

エッジ「剣示さん何にやけてるんですか!？」

サッド「省きますね」

剣示「えー・・・」

エッジ「ふう・・・」

サッド「では次の登場人物ナンバー05は私ことサッドです。年齢  
21歳で死去の後、現在まで歳をとっておりません。身長168cm  
体重45kg。名無しと呼ばれている彼の側近をやっています。  
好きなもの、夕暮れ。真つ白な雪。美しい紅葉など。嫌いなもの、  
悲しい音楽。スリーサイズはB82W55H77ですね」

剣示「サッドはナイスバディですな・・・」

サッド「恐れ入ります」

エッジ「剣示さん・・・」

剣示「・・・黙秘します・・・ってあれれ？イヴ・・・寝てるのか  
・・・？」

イヴ「うゆ？・・・マスタぁ・・・おはよう」

剣示「そうか。退屈だったかぁ・・・まあ今の起き方は満点をあげ  
よう」

イヴ「？」

剣示「うゆ？は萌え度数が高そうだな」

イヴ「・・・？いいこと？」

剣示「ああ！もちろんさ！」

エッジ・サッド「剣示さん！！」

剣示「ああ。進めて進めて・・・」

サッド「登場人物ナンバー06名無し。年齢不詳。身長自由に変換可。体重自由に変換可。アカシッククロニクス図書館やフォースから要注意人物として危険度Sランクに相当する位置づけになっています。好きなもの不明。嫌いなもの不明。謎だらけの人物ですね」  
剣示「あーめんどくさいからコメントなしで」

サッド「では次へ。登場人物ナンバー07闇の剣こと、シェイド。年齢不詳。身長173cm体重56kg。フォース指揮官。好きなもの、綺麗な花。嫌いなもの、物分りの悪い人間。スリーサイズB84W58H78」

剣示「だめだコメントのしようがないなあ」

イヴ「こいつ嫌い」

エッジ「本当はいい人なんですよう・・・」

サッド「今どれくらい経ったんでしょう？給料いくらもらえるのか心配なんですよね・・・」

剣示「大変だなあ・・・カンパしようか500円」

サッド「涙が止まりません・・・剣示さんったらなんていい人なんでしょう」

剣示「俺が涙でそうだわ・・・大変なんだなあ」

イヴ「そろそろ終わり？」

剣示「そうだなあ終わりなんじゃない？」

炸羅「ああ、ここだここ。凜っやっぱりここでやってるぞー」

凜「あ！ほんとだあ」

剣示「・・・あー・・・ちょい役かと思ってたらちゃっかり来たよこいつら」

凜「ウルサイなあ馬鹿剣示」

イヴ「ねえ。マスター、こいつコロシテいいのかな？」

凜「！？こ、怖いよこの子」

剣示「まあこのコーナーで殺生はだめですよイヴ」

イヴ「・・・わかったよ」

炸羅「んじゃ俺からいくぜ。炸羅だ。年齢は16歳。身長165cm 体重50kg。名無しの眷属で、ナイフと素手での戦いが得意だ。好きなものは特にねえ。嫌いなものも特にねえ。スリーサイズはどのでもいい以上！」

剣示「えーと、好きなものは熊のぬいぐるみ。嫌いなものは蛇と・

・スリーサイズは」

炸羅「わああわああ！！！！なんで!？」

剣示「いや、カンペに書いてあるぞ」

炸羅「読むな！！！！」

凜「凜の紹介いくねー。えつと凜です。年齢10歳。身長134cm 体重30kg 好きなものは動物。嫌いなものは汚い大人です」

剣示「まあちよい役の紹介はその程度のもんだわなあ」

炸羅・凜「うるさい！！」

サッド「あら。もう終わりみたいですね」

剣示「おー。終わったか、なんだかんだで長々とやったなあ」

イヴ「じゃあ皆を元の空間に戻すね」

剣示「うむ。やっつくれ」

サッド「それでは皆さん御機嫌よう」

エッジ「ばいばーい」

炸羅「じゃな」

凜「皆じゃあねえ」

イヴ「それじゃ拡大版自己紹介コーナー終わりです。皆またね。しーゆー」

リペア「ぶはあ！ー！やっと出れた！ー！」

リペア「……………って終わり！？嘘でしょ！ー！ー！」

リペア「わあああああああああああああああああああ  
ん！ー！ー！イジメだあ！ー！」

#### 第四夢：夢カラ覚メル夢（前書き）

リペア「皆さんども〜元気っすかあ〜？この前は本当に酷いイジメにありました。くれぐれも皆さんはあんなイジメはしないでね・・・」

イヴ「あ。リペア自己紹介コーナー取り合えず一通り終わったからもうしないでいいらしいよ？」

リペア「じゃあ取り合えずだべるコーナーにしようよ」

イヴ「まあ、いいからほら。行くよ。しーゆー皆」

リペア「嫌っ終らないもんね！！じゃあリペアの朝まで生ライブ〜まずはリペアの恋愛相談コーナー！どんどんぱふふ〜。まずは北海道からのお葉書です ペンネームリペアたん大好きさんから〜」

イヴ「えい」

リペア「ぐあ！？」

イヴ「・・・じゃあね〜皆〜」

#### 第四夢：夢カラ覚メル夢

ある朝、イヴは目覚めると自分が喪失したのがあると思った。

「何でこんなに・・・空虚なの？」

それはとても大切で無くてはならないものだと思った。

「マスターといるとこんな気持ちにならなかったのに・・・」

だからイヴはそれが何であるか考えた。  
たくさん考えた。

それでも答えは見つかることなくイヴの悩みは解消されることはなかった。

「この喪失感は・・・何？」

それでもイヴはそれを思い出すことは出来ない・・・。

それが自分のモノであることさえも思い出すことは出来ないのだった。

リン・・・

切ない鈴の音がネックレスから聴こえる。

リン・・・

「それで？剣示さんの居場所を貴方が知っているっていうの？」

リペアがサッドに質問をしている。

イヴは相変わらず黙って居間のソファに座ってサッドを見つめている。

「いえ。居場所を知っているわけではありません。只、剣示さんの世界への干渉を可能とする魔法書の存在を知っています」

「クウアルバルタルの死文書・・・」

サッドの言葉を引き継ぐ形でイヴが呟く。

「ええ、そのクウアルバルタルの死文書に書かれている法を使えば剣示さんの世界への干渉は可能になります」

リペアは興味を失ったかのようにテーブルに肘をつき溜息を吐いた。  
「知っています。でもね、クウアルバルタルの死文書は重要魔法書物としてアカシククロニクレスでも最高峰のセキュリティシステムで守られているんですよ。そんなものをどうやって閲覧するっていうんです」

サッドはリペアの前の椅子に座り、微笑んで言う。

「貴方ならどうですか？貴方ならそのセキュリティシステムを無効化する方法もその魔法書物の在り処すら分かっているんではありませんか？」

「・・・ふざけないで。貴方・・・何を企んでいるの？貴方の行動はハッキリいつて疑わしいのよ。胡散臭いっただらありやしないわね」  
サッドをキツク睨み付けながらリペアはハッキリと言い放った。

それに対して何の物怖じもせず、サッドは相も変わらず微笑を絶やすことは無い。

ソファから立ち上がったイヴがサッドの横まで歩いて来て、サッドの首筋に手を当てて力を収束させる。

「何が狙いなの？言わなければ殺す」

「まあ、怖い。狙いなどありませんよ？只、剣示さんには少しばかりの恩がありますし、それを返しておこうと思った・・・それでは納得できませんか？」

「納得できると思うわけ？」

鼻で笑うようにリペアが即答したのを合図にイヴは収束した力を刃に変えた。

薄っすらと首筋から赤い血が流れる。

それでも少しも顔色を変えずに言う。

「納得しようとしまいと構いませんよ。私は只、それを伝えに来ただけですし、行動を起こすのはそちらの自由でしょう？貴方方が何のデメリットも感じる必要は無いと思うのですが？」

言うだけ言った挙句、サッドはその存在を希薄させていく。

「私の言いたいこと、用件は済みました。では皆さん、御機嫌よう」  
言い終わると共にサッドの姿はもうどこにもなくなっていた。

剣示失踪から2週間

「いたたたたたっ！」

アカシツククロニクレス図書館データバンク。そこでリペアはハッキングを行っている。

アカシツククロニクレスに精神だけ転送し、その中で目当てのデータを物色するのだ。

これぞ次世代ハッカー。まるでどこぞの未来映画さながらのハッキングである。

そしてリペアは今まさに絶叫を上げながらウィルスバスターやらフアイアウォールなどに追い回されながら死闘を繰り広げている最中である。



「うわわわわー。たんまたんまつ！ちよつとたんまつ！」  
相手は言葉の通じるモノではないのでたんまといつても無理な話である。

ウィルスバスターが馬鹿でかい包丁でリペアを一刀両断するべく物凄い勢いで襲い掛かってくる。

リペアはその斬撃を半身で避けつつ、合気道の要領でそのままの勢いを殺さず投げる。

「わー。物分りの悪い馬鹿どもめえー・・・チェックザデータ。リペア特製ウィルス、ドクトル超栄発信！」

ネーミングセンスは最悪ではあるが、そのウィルスは凄まじいもので、物々しい数の騎兵隊が一瞬にして目の前に顕れるやいなや、ウィルスバスターを粉々に粉碎していく。

「おほほほー。さっすがっスね私」

（リペア。マスターの世界に介入する魔法書データはクウアルバルタルの死文書だからね）

リペアの精神に直接響くイヴの声がそう告げる。

「分かってます。それでも私この元司書なんですからね！」

クウアルバルタルの死文書とは他者の精神や、心に思い描いている世界などを覗き見る法や、その世界に侵入出来る法が書き記されたもので、過去にはある国の王の精神を侵食し、一国を滅ぼすという事件が起こっている。往々にして魔法書物とは悪しき使い方でその存在を示している。

「よし。最終関門のプロテクトウォール破壊完了」

粉々に砕かれた厚さ数十センチほどもある鋼鉄を模した壁を破壊し終えたリペアが遂に魔法書物管理倉庫に侵入を果たした。

「えーと。たしかクウアルバルタルの死文書はと・・・！？・・・まさか・・・くっ！してやられたみたいね・・・」

（リペア？どうしたの？）

「やられたわ・・・私達より先にクウアルバルタルの死文書を盗み出した奴がいるみたい・・・やっぱ私達を囿に使ったみたいね」

落胆しているリペアを追い討ちするかのようにリペアが眠らせておいたセキュリティシステムが起動し直し、けたたましいアラームを鳴り響かせている。

「やっぱぁ！・・・イヴー旦そっちに戻るわ！フォローお願い」

（分かった）

それから数瞬後、リペアの姿は霞のように消え、その空間には何もなくなっていた。

## 喪失ノ秋

秋の日差しが心地良い。

鳥の囀りが遠方から聞こえてくるのが安らぎを与えてくれる。

秋の日の昼過ぎにテーブルにうつ伏せになりながら、剣示はさながら何かのRPGの混乱魔法にかかったモンスターのようにはーっとなっていた。

理由は無い。

そう、何も無いからぼーっとしているのだ。

今日は休日なのか、それともそもそも自分はすべきことが無いのか。ただ思うことは、何をすべきなのかということだ。

「剣示さん？剣示さん？・・・どうしたの？」

「ん・・・？ああ、エツジ・・・」

「ああエツジじゃないわよ？さつきからずっとぼーっとして・・・どうしちゃったの？」

「なあ、エツジ・・・俺は今から何をすればいい？」

「どうしたの？剣示さん・・・急にそんなこと言い出すなんて？」

いつも通りの反応を示すエツジに急に寒気が走る。

そう、エッジは剣示がこう訊くと決まってこういうのだ。

「剣示さんは何もしなくていいのよ。して欲しいことある？それなら私、何でもするよ？」

何故俺は何もしなくて良いのだろうか？

大体　は？　？・・・なんだっけ？大体・・・なんて思ったんだっけ？

ああ、頭がぼうつとする。・・・に出よう。

何処に出るって？・・・？ああ。ああ。何だろう？

ワカラナクナツテクル・・・ゼンブ、ドウデモイコト？

リン・・・

リン・・・リン・・・

まただ・・・この家に鈴の音を出すモノなんてあったっけ？  
そんなもの・・・あるのだろうか？

大体、この家は誰の・・・家？

嘘だろ・・・？

分らない・・・

何だ・・・？何だよこれ・・・

剣示は急に途轍もない恐怖に苛まれ始めた。何もかもが分からない。  
そんな恐怖に怯えながらこれからずっと生きていかなければならな

いのだろうか？そんなことを思いながら剣示はそれでも動けないでいた。

何故なら唯一つ、エッジとの暮らしの中に在った安らぎや幸福。それらは嘘でもなんでもない自分自身がそう感じた唯一の感情だったからだ。

「エッジ……。」

「なあに？」

「……エッジと暮らし始めてどれくらいだっけ？」

「そうだなあ……もうすぐ一年経つね……。」

そう一年もエッジと二人きりで暮らしてきた。  
本当に二人きりで。

「剣示さん。愛してる」

「ああ。知ってるよ」

そう、十分過ぎるくらい知っている。

君が俺を愛していることを。

そして、君の愛がどれだけ大きいのかを。

でも俺はこの世界を疑わなければならない。俺はこの世界の異常さに気付いてしまったから。

気付かなければ良かったと何度思ったことだろうか？

本当はもっと前から気付いていて、それでもシラをきってきたのだろうか？

ワカラナイ。

今でも本当にこの世界のこと気付いているのかさえも分かってい

ないのではないだろうかと思つ。

「本当に気付いていないわけじゃないのだろう?」

「!？」

目の前にいきなり現れたのは黒いロングコートを纏った銀髪の男だった。

記憶の中にあるような、どこか知っている男。その男は嘲うかのように口元を歪めた。

剣示とエッジ以外の存在を初めて認識することが出来る事実。剣示は戸惑う。

今までこの世界で剣示はエッジ以外の人間を認識したことが無かった。

大学へ行つても店にいつても、そこには本当は誰も居なかった。ただ、居ると思ひ込んでいただけ。

本当に認識できる存在はエッジ以外いなかったのだ。

驚きと戸惑いを織り交ぜた感情が渦巻く剣示とは反対に、エッジは半ば何かを諦めたかのように疲れたような顔をした。

「エッジ・・・」

「なあに? 剣示さん・・・」

「俺にとって・・・この世界は」

ヒテイスルノカ?

エッジは瞳を閉じ、諦めたように口元に笑みを浮かべる。

「この世界こそ、本当だ」

「!？」

エッジは驚いたように目を見開く。黒いコートの男も同じくそれに習う形で目を見開いていた。

「けん・・・じさん? どう・・・して」

「君は何を言っているのか分かつているのか? そうだとしたら失望

だ」

「煩い。お前に何が分かる。何も知らないくせにのこのことこの世界に進入しやがって、お前、うぜえよ。キエロ」

黒いコートの男はせせら笑う。幼稚な子供を見るかのように、穏やかな瞳で剣示に向って力を放つ。

咄嗟に両腕で衝撃を防御するものの剣示は慣性の法則にしたがいテーブルや椅子を壊しながら壁にぶち当たった。

「剣示さん!!」

「ぐっ・・・この」

「どうして分かってくれないんだい？君は必要不可欠な存在なのだよ？その君にこんな世界に引きこもられては困るのだよ」

身体に力を入れて立ち上がろうとするものの全身の痛みがそれを妨げる。

「無駄だ。イーヴァルズグラアックスの力を断ち切ってしまった君などに最早抵抗する能力は存在していない」

イーヴァルズグラアックス。

イヴ・・・

俺は。その魔法書の主。

「止めなさい！これ以上剣示さんに傷を負わせるようなことをしたら貴方を許さない・・・」

エッジは男を睨み付けながら一步一步と距離を近づけていく。

「ふ、フォースの女か。だが、本当の自分を取り戻しているのか？お前は誰か分かっているのか？お前はこの夢の住人に過ぎない、この夢の中ではお前は何だ？只の人間。何の力もない只の人間に過ぎないのだろう？」

男の声は世界に響くかのようにエコーする。エッジが目を眩まされ

たかのようにフラフラとしている。何が起こっているのか剣示とエツジの二人には理解出来ない。

へたり込むようにエツジが床に尻餅をついたと同時に男がエツジの顔を強かに蹴りつける。

「あぐっ!!」

ドクン。

ああ。この感覚は知っている。

この男を知っている。

俺が殺意を覚えた男だ。

ああ、コイツは今何をした？

俺の大事な人に何をした？

コロス。アア、コイツハイキラスルカチスライ。

剣示の家のリペアの部屋でイヴはリペアの精神がリペアの身体に入るのを確認してから頬をペチペチと叩いた。

「うっ……はあ、びびったあ」

起き上がりながら溜息を吐いてからイヴに向き直る。

「全く、あのサッドとかいう女。やってくれたわね」

「最初からリペアにセキュリティを眠らせて囷にするつもりだったということ？」

「そゆことね」

イヴは力が抜けたように座り込み、悲しそうな顔をする。

「・・・まあ、剣示さんを取り戻せなかったことは痛かったけど、元気だしてよ、きつと戻ってくるって・・・ね？」

「・・・うん」

返事をしてイヴの表情が豹変する。瞳の色も赤く変わり、異常さを前面にだすかのように呟きだした。

「マスター・・・マスターが私と繋がる・・・。マスターが私の力を顕現しようとしている」

「え！？剣示さんが！？じ、じゃあ剣示さんはこの世界に帰ってきているってことなの！？」

表情の消えた顔で首を振る。

「違う。世界を越えて繋がっている。私とマスターのリンクが再開される」

「まさか、そんな・・・次元を越えてリンクするなんて・・・出来るわけが・・・」

リペアの顔が蒼白になっていく。在り得ない事が起ころうとしていた。

イヴが右手を翳すと右手からペラペラと本のページのようにバラけ始め、宙を舞い始めた。

遂にイヴの姿全部がページと成り果てて収束していく。

「何故・・・主もいないのに真の姿に成り得るわけがない・・・」  
リペアは驚きに身を凍らせたようにその場に尻餅をついてしまう。  
完全なる魔法書物の姿へと変り、今度はその魔法書物は何処かへと移動するかのように消え始めた。



「マスターが・・・呼んでる」

イヴの声が響き、魔法書物は消え去っていた。

「ヤメロ」

剣示の瞳が赤く血の色に染まっていく。

「ほう、それでいいのだ。剣示君。君は君の存在意義を理解すべきだ」

「ダメレ」

剣示は立ち上がり、一步踏み出す。先程とは確実に違う。力が身体から溢れるほど漲る。

「知っているかい？君が主となった魔法書物イーヴアルズグラアツクスは、全ての魔法書物の中で最も悪の属性が強く、限りなく破壊の力に秀でている」

煩い奴だ。ベラベラと講釈たれやがって。

「だからこそ、その魔法書物の主は心を侵食され易く、最後には史上最強最悪の殺人鬼と化していく・・・最高の結末だろう？」

黙らせるならどうすればいい？そうか、もう二度と動けないように全てを粉々に、塵に還してやる。

ドクン・・・

懐かしい感覚。剣示の右手には見慣れない本が握られていた。

マスター……。

リン……鈴の音が聴こえる。

「……イヴ」

「ほう、顕現するとは……流石は剣示君だ。そろそろ引きこもりはやめにするんだね」

男の言葉が終わると共に剣示は男の顔を渾身の力を込めて蹴り上げた。

男は易々と天井に穴を開けて吹っ飛んでいく。

床に落ちてきた男の頭を踏みつけ、冷やかに見つめながら呟く。

「コロシテヤル」

「くつくくく……そうだ。その感情はいいぞ。とてもいい!!」  
男は剣示の足を払い、飛び上がり手を翳し何かを呟く。

「闇より闇に属する力。さあ、来い。ナッシング」

真っ白な光というよりも、照らすというより打ち消すような白の剣を翳した手に呼び出した。

「さあ、思い出すんだ自分が何であるのかを……」

「何を言ってる。てめえは何様だ? うぜえんだよ!!!!!!」

男は床を蹴り、風のように剣示に斬りかかる。その剣撃を剣示は避けつつ回転しながら回し蹴りを男の後頭部にぶち当てた。

男はそれさえも些細なことのように難なく床に足をつき、振り返って床を蹴る。

同じように斬りつける剣撃を避けた剣示の顎に今度は男の翻したコート影から蹴りが強かに打ちつけられた。仰け反った剣示の鳩尾に蹴りあがった足を直角に落とす。

凄まじい衝撃に口から血を吐き出した剣示は、痛みは感じないような素振りで立ち上がる。

「楽しいだろう？殺し殺される感覚は。楽しいだろう？」

ああ。タノシイ。

お前をコロスコトハタノシイ。

「さあ。楽しもうじゃないか最高の感覚を」

剣示の口元は自然に歪み、禍々しい笑みを浮かべるのだった。

## 第五夢：夢八終ワリヲ告ゲ（前書き）

エッジ「やつほ」エッジです。何故かしらないですけど今回からこの枠を私がもらうことになりました。って・・・次回から私あんまり本編でないみたいなんで・・・」

イヴ「残念ですね」

エッジ「まあ、仕方ないですけど・・・で、この枠をどういうコーナーにしようか思案中なんですよ」

イヴ「考え無しですか？」

エッジ「うつ・・・だってどうしたらいいのかわかんないですよ・・・私ってこの枠もらう際に何も伝えられてないんですもん」

イヴ「じゃあ、私そろそろ行きますね」

エッジ「！？まってイヴちゃん・・・一人にしないで・・・」

イヴ「そういわれても・・・こまったなあ」

エッジ「と、とりあえず、ほら、あれやりましょ。あの終わりの挨拶！」

イヴ「え？もう終るの？何もしてないよ？」

エッジ「いいからいいから！いつせいで」

イヴ・エッジ「それじゃ皆さんしーゆー」

## 第五夢：夢八終ワリヲ告ゲ

「ええ、明らかに異常な反応です。ええ、そうです。」

リペアは薄暗い自室から出て、居間のテレビに映し出された光景を直立で見つめている。

「いえ、今は次元跳躍をし、主の元へと向ったと思われます。．．．ええ。」

テレビの映像は荘厳な雰囲気の大聖堂。審問会さながらなものが映し出されている。中央を分断するかのような高級そうな赤い絨毯を挟み、両サイドにはローブを深く被った人影が十数人座っている。その絨毯の伸びた先、大聖堂のいわば中枢には一人の初老の老人が豪華な椅子に腰をかけ、リペアを見据えていた。

テレビの前で直立不動なりペア。テレビの中の絨毯の中央、それと同じくりペアは背筋をピンと伸ばして直立している。

「しかし！．．．はい。分かっております。はい、随時ご報告を．．．はっ」

焦点の定まらない瞳でブツブツと呟いていたリペアの瞳に急速に光が戻る。それから時を同じくしてテレビの映像は消え、電源の入っていない黒い画面へと切り替わった。

「．．．私．．．は．．．迷うな！自分の決めたことでしょう！！」

自分の頭を数回殴り、力が抜けたようにソファに座り込む。

オレンジ色の光が差し込む夕暮れにリペアは膝を抱えるように身を縮めた。

「さあ、楽しもうじゃないか。最高の感覚を」

黒いコートの男は言う。さも楽しそうに笑いを含んだ声で。

体が熱い。精神が殺意で満たされていく。ああ、タノシイ。

剣示は口元を歪める。禍々しい笑みを浮かべ男を見据えた。

ああ。とイヴは思う。

快い気分・・・でも。

「そう。イーヴァルズグラックスもこの感覚を望んでいる、そうだろう？」

違う、私はマスターがオカシクなるのを望んでいない！

只、繋がっていたいだけなのに！

それはだめなことなの？

いけないことなの？

「ハア、ハア、ハアハアハアハアハアハアハアハア、ハッハッハッハッ」

剣示の呼吸はどんどん荒く激しく短くなっていく。

瞳は最早完全に深紅に染まって今にも全てを敵に回し暴れださんばかりである。

「クロス、クロス、クロスクロスクロスクロスクロスクロス  
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス

クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス  
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス  
クロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロスクロス  
クロスクロスクロスクロス

何て心地良い言葉なのだろうか？剣示は思う。その言葉繰り返すだけで気持ちは高揚し、力が奥底から湧き出てくるようなのだ。

剣示は右手に持った本を握り締める。すると本はバラバラとページごとに散らばり始め剣示の体の中へと消えていく。

その途端にありとあらゆるイヴの知識や力を知っている自分がいた。イヴの知りえないイヴ自身の知識すら剣示には手に取るかのように知ることが出来た。

それが何故なのかそれは分からない、だが、剣示にはイヴ以上にイヴの力の使い方を知っていた。

「地獄の有力者にして筆頭に記されし、地獄の第一の王。バエル。我が呼ぶ汝が名、心せよ、我は汝の名を知るもの。汝の力を今我に顕現す！！右手に与えよ汝が牙を！左手に与えよ汝が爪を！顕現！不視の双剣！！」

一言一句間違えることもない。一度も口にしたことのない言葉さえ詰まることも無い。

剣示は知っているから。そう、知っているのだ。

剣示の両手には目に見えない透明な刀身が顕れているのだろ。それは剣示にしか視えず、長さも幅すらも誰にも知ることは出来ない。

「は・・・ハッ！！ハッハッハッ！！やはりか！！やはりお前がそうだったんだな！？これほど嬉しいことがあるか！？見つけたぞ！やはりお前が！！！！」

黒いコートの男は臆するでもなく狂喜に顔を歪め、今まで見たことの無い狂人の顔を見せた。

「待っていたぞ！！この瞬間を！待っていたぞ！！全ての苦痛を取り除く貴様を！！！！」

男は白い闇の剣を構え直し、剣示へと襲い掛かる。

剣示は無表情に右手を振り、男の腕を切り裂く。男が笑いながら血を撒き散らすのを見る暇もなく左手を振り、男の腹を切り裂いた。大量の血が床を穢していく。

剣示は止めない、男を切り刻む行為を。

ザクツ。刃を男に叩き込むと胸がすつとする心地良さが込み上げてくる。

ザクツ。何と心地良い感触なのだろうか？と思う。

ザクツ。ザクツ。ザクツザクツザクツ。

「ヒヤハハハハ！もつとだ！！そうだもつと切り刻め！！狂気に囚われる！もつと狂え！！」

男は致死にも至るほどの傷のはずだろくに狂ったように笑い続けている。

「い、ヴ・・・切りなさい！っ・・・リンクを切りなさい！！！！」

気を失っていたエッジが呻くように起き上がり、叫ぶ。

「イーヴァルズグラックス！！！！リンクを切りなさい！！！！」

エッジの叫びと共に剣示の瞳孔が開き、深紅の色が急速に薄れていく。

力を失ったように剣示は気を失い床へと倒れこんだ。

それとともに剣示の体内へと消えていったページがハラハラと倒れた剣示の体から出て行き、一冊の本の形をとった。

「おんなあ！！がっ・・・よくも・・・邪魔をおおおおおおおおおおお！！」

動くこともままならないほどの傷のはずなのに男は機敏に起き上がり、剣をエッジへと振り上げた。

「わ、かるでしょう！もうこの世界は否定されたのよ！！だから！私は！！御出でなさい！！黒い魔剣ストームブリンガー！！」

エッジの手に収束していく黒き光。顕れる魔剣。エッジは限定解除をしていた。

エッジの体全体に奇妙に張りめぐる血管。瞳からは血液が涙腺から



流れ落ちている。

オリジナルとほぼ変らない本物の魔剣と化したストームブリンガーを翳す。

「還りなさい！貴方の世界へと！！」名無し”！！！”

黒い霧が舞い嵐となつて男を包む。男は断末魔にも似た声を発しながらその姿を消失させていった。

「はぁ・・・はぁ・・・くう・・・ぐっ・・・」

エッジは魔剣を手から落とし、血を吐きながら倒れ、気を失ってしまった。

リン・・・

またか・・・。

リン・・・

分かったよ・・・もう、分かったから・・・

リン・・・

イヴ・・・。

目を覚ました剣示の瞳に映つたのは心配そうな顔をしたイヴの顔だった。やわらかい感触がするのはイヴが剣示を膝枕しているせいだということが分かった。

「マスター・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「・・・イヴ・・・あ。俺は・・・思い出しちゃったんだなあ。全部・・・」

「ええ、剣示さんはこの世界を否定したんです。イヴを呼ぶことによって・・・この世界が虚偽の世界だと認めてしまいました。・・・楽しかったですよ剣示さん。短い間でしたけど夢を見せてもらえて嬉しかったです」

剣示の言葉を引き継ぐ形でエッジが笑顔で話し出した。

悲しみに満ちた笑顔。相反する感情はこうまでも表情に出てしまうのかと思う。

二度と会えないかのような別れ際に見せる笑顔、エッジはそんな表情をしていた。

「まあ、帰ったらさ。またいつでも会えるんだからそんな顔するなつての」

剣示は自分の中にある確信にも似た思いを押し潰しながら笑う。

「剣示さん・・・あのね」

言うな！！聞きたくない！！聞きたくないんだエッジ！！

「剣示さんはイヴとリンクしていたからある意味、不死の属性を持っていたの。でも」

やめろ！言うな！！やめてくれ！！

「私は・・・」

畜生！！！！畜生！！！！

「もう死んでるの」

！！！！

まるで明日の予定でも言うかのように何でもない様子で自分のこと

を告げる。

目の前が真っ暗で眩暈さえ起こしそうな感覚。

知っていた？解っていた？だからこそ聞きたくなかった？

グルグルと思考が溶け始めていく。

「マスター・・・気分が悪いの？」

イヴの言葉すら剣示の耳に届かない。

急激なぶつける先の無い怒り。

何故エッジは俺と恋人を演じた？

死ンダ人間が自分ノ大切ナ人ニナツタノガ許セナイノカ？

違う！違う！！違う！！！！

何モ違ワナイダロウ？ソノ女ハオマエノ心ヲ奪イ尚且ツ届カナイ存在ダト言ウ。許セルノカ？

俺は・・・俺は・・・エッジのことを・・・憎いと思っている？

アア。思ッテイルダロウ？

エッジが悪いんじゃない。

本当ニ？コノ女ガ甘イ夢ヲ望ンダノダトシテモ？

黙れ。もう、たくさんだ。お前は誰だっというんだ。何がしたい！？

俺ハオマエダヨ。ズット前カラオマエト共ニ在ッタジャナイカ。忘レタノカ？

！！！！

浅い溜息。それはエッジの口から吐き出された。閉じた瞳を薄っすら開けて言う。

「イヴ・・・剣示さんの記憶を消してほしいの・・・」

「エッジ、何を言ってるんだよ」

「イヴ、お願い。剣示さんの記憶を」

「エッジ！……！」

剣示はエッジの肩を思い切り掴み自分のほうに向かせた。エッジの瞳からはつうつと雫が零れる。ハツとする顔をしてエッジは顔を背けたがすでに遅いことだった。

「エッジ・・・」

剣示は言葉を詰まらせる。どんな思いでそう言ったのだろうか？それさえも自分は理解出来ないことに嫌気がさす。

「ねえ、お願い。イヴ・・・」

「マスター・・・どうするの？」

イヴはこの雰囲気を感じたのかおずおずと訊く。剣示は何も言わない。否、言えないのだろう。

「剣示さん。存在しない人間の記憶なんて自らを苦しめるだけですよ・・・それが、甘いものとしたら尚更です。剣示さん。私のこと愛していますか？」

「ああ。今でも・・・偽りと分かってもまだエッジが好きだよ」

剣示の言葉にエッジは微笑んだ。本当に嬉しそうに。

「だったら、消してください思い出を・・・私の最後のお願いです」

次に目を覚まし、現実という世界に戻ればもうエッジのことは思い出せないのだろう。

理解している。分かっている。仕方の無いことだと。

長い沈黙の後、剣示は小さく頷いた。

「さようなら。剣示さん・・・」

気が遠くなる感覚の中、剣示は囁くようなエッジの声を聞いたような気がした。

愛していると。そう聴こえた気がした・・・

## 第六夢：現実の日常（前書き）

エッジ「・・・すうすう・・・うん・・・う・・・？はっ！？ご、ごめんなさい！寝てました！！えとえと！？み、みなさんこんにちはー！！！！エッジの・・・えつと・・・ほのぼの・・・コーナー・・・」

イヴ「あ、エッジさん、起きたんだね」

エッジ「え！あああ！！イブちゃんいてくれたのね！！よかったあああ」

イヴ「だ、抱きつかないで」

エッジ「で、どうしたらいい？私何も考えられなくて・・・」

イヴ「じゃあ。専門用語とか説明するコーナーとかにしたらいんじゃない？」

エッジ「！！！！いいっ！イブちゃん超スーパーミラクルナイスアイデアだよー！！！」

イヴ「そ、そこまで？」

エッジ「じゃあ早速！次回から！」

イヴ「え？次回からなの？」

エッジ「だって時間ないし」

イヴ・エッジ「じゃあみなさん！しーゆー」

## 第六夢：現実の日常

緑に囲まれた庭園の中央の噴水広場。柔らかな暖かい風が頬にあた  
り気持ちの良い陽気である。備え付けのベンチに座る女性の隣に自  
然に腰を下ろす男性がにこやかな笑顔で女性に微笑んだ。

その男性の着ている白いコートの下の制服のようなものも白、白一  
色。金色の髪を五分分けにした、青い瞳の端正な顔立ちで、笑顔が  
良く似合う優しい顔が印象的な男性だ。

「やあ、闇の剣とも言われたシェイド様らしからぬ顔だね」

「何の用だ。シャイン、貴様の任務は誰にも姿を見られぬようフオ  
ース内を監視することだろう？職務を放棄するつもりか？」

くだらない質問を笑い飛ばすような爽やかな笑顔でシャインはコー  
トからタバコを取り出し咥えた。

「貴方がここに居る時は誰も近づかないだろう？大体、その任務を  
与えたのは貴方だ。その貴方に見られるのも職務放棄なのかな？」

「ふん。全く、ああ言えばこう言う奴だよお前は」

シェイドが呆れたようにそっぽを向く間にシャインは咥えたタバコ  
に火をつけた。柔らかな光に照らされる紫煙がふうつと舞う。

「私がタバコが嫌いなのは知っていて吸っているのか？」

「ふ。僕は何でも知ってるさ・・・他人の知りたくも無い事情、感  
情だってね」

シェイドが表情をきつくし、睨む。飄々とその瞳を正面から見据え、  
長い沈黙が訪れる。

その沈黙の後、閉ざしていた口を開いたのはシャインだった。

「何故、殺した」

「そんなことを言うために来たのか？お前は自分の任務を何だと思  
っている」

シャインはタバコの灰が落ちる前に胸のポケットから携帯用の灰皿を取り出し、タバコを揉み消した。

「僕が言う台詞じゃないが、貴方は自分の感情を押さえつけすぎる。あの娘は貴方のお気に入りだったんだろ？あの娘も貴方のことを好いていた。そうじゃないのかい？」

「黙れ」

溜息と共にシャインはベンチから立ち上がる。去り際に顔を背けたまま言う。

「今度の特務隊長、いけ好かない奴だったよ。貴方にしては最悪の人選だった」

誰にも聴こえないほど小さな呟きがシェイドから漏れた……。

「済まない……エッジ」

暦的にはもう春だというのに寒さは一行に引く様子は無い。

特に朝方は白い息が色濃く映るほどの寒さだ。

剣示は自室のベッドで目を覚まし、開口一番こう言うしかない。

「なんじゃこりゃあー！！！」

この馬鹿寒い季節に窓のガラスはすっぱりと抜け落ちたようになくなっており、吹きさらしの極寒部屋と化していた。

「どうしたの？マスター？」



剣示の部屋のドアが開き、ひょこつとイヴが顔を出す。

「うむ、どうしたもこうしたも。この部屋を見て何か気付いたことはないか？」

「何か？」

キョトンとした表情のイヴを押しつけるかのようにリペアが部屋に入ってくる。

「朝っぱらから大声ださないでくださいよー。近所迷惑っスよ？」

「まあお前の口癖がいつから、なにになにっスとか言うアホな後輩みたいになったのかは知ったこっちゃないが、この部屋に異変があつてな」

リペアもイヴと同じくキョトンとした表情で訊き返す。

「異変って何です？」

「窓がその意味を失っている」

「そりゃ、ガラス割れちゃったんですから仕方ないでしょ？騒ぐほどのことですか？」

何を言っているのか分からないといった感じでリペアは困惑した表情した。

「問題はそのガラスが割れちゃった原因だ！朝起きたらいきなり無くなっている窓ガラス！割れた形跡すら残さないこの犯行はまさにミステリイだ！N A S Aの電話番号は何番だ！？」

「ミステリイって。エッジが割ったんでしょ、それに形跡ってかなり前の話じゃないですか」

「何だ。そのエッジってのは？かなり前って・・・？何の話してんの？」

「何の話をしてるのか聞きたいのはこっちですよー。エッジって言うのは剣示さんも知ってるあのふぉーぶっ・・・ぐ・・・」

リペアは話してる最中に見えない何かに張り倒されるように1mほど吹き飛んで、クローゼットに頭をめり込ませた。

「イヴ。朝っぱらから破壊活動は止めなさい」

「ごめんなさい。窓割ったのリペアなのにわけのわからないこと言

ってマスターを混乱させようとしてたから・・・」

「よくやったイヴ。そういう時は全然OKだ」

「それじゃあマスター。私達も学校があるから支度するね」

イヴはリペアを引きずりながら剣示の部屋を出る前に微笑み、剣示には聴こえないほどの声で「おかえりなさい」と言った。

気絶したりペアを自室まで引きずり、軽く頬を叩いて気を付かせる。

「うんあ・・・いたたたた・・・な。なにをするのよ!？」

「ごめんね。まだリペアには伝えてなかったけど、マスターの記憶はエッジに関することを消滅させてるの」

「あら・・・まあ。何で？」

強かに打ちつけた頭を撫でながら聞き返す。

「死んだから」

「はあ。エッジが？ふうん」

二人の会話は人の生き死にの話にしては淡泊すぎるほどだった。

それは、二人にしてはごく当たり前のことだったからだ。フォー스という組織に属するものには常に危険が付きまとう、死傷者も当たり前のように出る任務がその大部分を占めているのだ。顔見知りか死んだとしてもなんら不思議でもなんでもない、そういうことなのだ。

「でも、何で剣示さんの記憶消さなきゃならなかったわけ？」

「マスターの世界でエッジはマスターの恋人だったから」

「うひゃあ・・・そういうのって普通ヒロインとかがそうなるんじゃないの？ねえ？」

エッジの訳の分からない話を聞き流しながらイヴは淡々と朝の支度を始める。

「ヒロインてなに？」

「いや、ヒロインは私」

イヴは会話しつつも教科書を鞆にいれ、パジャマを脱ぎ始める。

「死にたかったの？」

「そういうことを言ってるんじゃないくて……というか私ってあんまり……ほら、活躍というかいいところくない？萌え〜とかいうシーンとかないじゃない？」

制服を身に着け、髪を梳かしながらリペアを振り返る。

「さあ？よく分からない」

「これってさ。人気投票とかしたらヤバイことになる予感がするのよね」

髪をリボンで結び、イヴの朝の支度は終了した。

「何とかして！！マジで、活躍させてよ！ホントお願いしますって」

「私に言われても……」

「夢幻商店街の福引券あげるから！ね！」

ごそごそとスカートのポケットからくしゃくしゃになった福引券をイヴに差し出す。

「だから。私に言われても……」

そんなこんなで朝からこの家にも活気がついた。それは二人も剣示の両親も喜ばしいことだった。

剣示がこの世界に還って来た後、イヴもリペアも大忙しに動き回った。

まずは剣示のいなくなった時の事後処理をなかったことにしなければならぬ。

両親や隣人、果ては学校の関係者などほぼ剣示を知る人間の記憶はイヴによって改ざんされていた。その後は物的なものの処理だ。エメールに写真、向こう側の家族、全てを無かったことにするには相当の労力が必要とされた。

リペアは事務を得意分野としてもっていたこともあり、その処理は比較的速やかに終了した。

そして、この世界に還って来た剣示は数週間の間、風邪をこじらせ肺炎を起こして入院したということになった。

エッジのことを伏せ、イヴは剣示がどうなったのか、どういう処理をしたのかを事細かに学校へ行く前に説明し終えた。

「というわけなの」

朝ごはんを終え、リペアとイヴと剣示は登校中にその話をしていた。「ふむ。じゃあ俺は肺炎で入院してたってことでいいんだよね？」

「そう、ちゃんと病院の診断書もあるし、病院には入院患者としての履歴もあるよ」

「すげえなあ。CIAみたいだな」

感心したように頷きながら剣示はイヴの頭を撫でた。その途端何とも嬉しそうに頬を染めるイヴが愛らしい。

「私も大活躍でしたよ。エッヘン」

「うむ。ヨキニハカラへ」

あまりにどうでもいいような台詞にリペアは頬を膨らませながら拗ねている。とそのとき、道の向こう側からひよろりとしたモヤシ少年みたいな、メガネをかけた変な男が嬉しそうに手を振りながらこっちへと一直線で近づいてきている。

「おーい！剣示くーん元気になったんだねえ！心配していたんだよう〜」

と、そんなことを言いながら爽やかともななんとも言いがたい笑顔で走ってきている。

「知り合いですかー？」

「お兄ちゃんの知り合い？」

二人して剣示に向って同時ともいえるほどのシンクロでそう訊いて来た。

「あ、あれは！？第一話に名前だけ出てきて今まで一度も出てこなかったオタッキー佐藤だ！忘れていたわけではないのに登場シーンを作ってもらえず今更ながら登場したわけだ！」

「いやに説明的な表現ですね・・・本当に友達ですか・・・？」

たった十数メートルの距離を走ってきたただけなのに肩で息をしつつ剣示の手を勝手に握りながら「よかったよかったよう」と嬉しがっている。

「お、お兄ちゃん・・・」

「怖がるなイヴ、根はいい奴・・・と思うぞ」

剣示がイヴに話しかけた途端、オタツキー佐藤のメガネがキラリと光った。

「だ、誰だい！？この萌え度満載の妹的キャラは！？ねえ、君、写真とらせてくれない？十枚！いや三枚くらいでもいいからさあ！」  
しつこく迫る佐藤の腹にリペアの足がめり込んだ。

「ちよつと！妹<sup>だけ</sup>の写真を撮るとか、姉である私（を差し置いて）の許可無く迫らないでくださいよ！！」

「お、お姉ちゃん・・・」

イヴはリペアに対して尊敬の眼差しをするが、次の瞬間にそれは失われた。

「いいですねえ！妹をけなげに守る美人姉！萌え・・・萌えですよ！おねーさん妹さんと一緒に撮らせてもらっていいですか！！！」

「え！？そ、そこまでいうのなら・・・いいですけど・・・綺麗にとつてくださいよ？」

佐藤が鞆からカメラを取り出す前に剣示は佐藤の襟を掴み引きずり歩く。

「おらつ。佐藤遅刻すんだろ！学校いくぞ」

「まっつてよう剣示くん！萌えが萌えが目の前にあるんだあつあ」

「じゃあなあゝお前らも遅刻すんなよ」

といってリペアとイヴの前から遠ざかっていった。

剣示は佐藤を引きずりながらも、この感じが嬉しく思っていた。

何故だか、とても普通に感じたからだ。そう、非現実じゃなくありふれた日常のひとコマに思えたのだ。

剣示の心にあつた少しチクチクする棘のような存在も今は忘れ去る

ことが出来た。

そう、剣示は現実の空気を胸いっぱいに取り込み、朝の日常を楽しもうと心に誓った。

その後、引きずっていた佐藤のスポンが尻の部分だけ破れていたの  
は言っまでも無い。

## 第七夢：夜桜（前書き）

エッジ「ハオーこんにちわ〜みなさん！今回から始まりましたエッジの魔法専門用語解説コーナー」

イヴ「まともな始まりかたになったね」

エッジ「うんうん。イヴちゃんのおかげだよ〜ありがとうね」

イヴ「えへへ」

エッジ「では本日の一発目っ！『アカシッククロニクレス図書館』このアカシッククロニクレスはアカシックレコードという世界や人の思考など全てを集約し記憶したものからとっています、故にこのゆめよこでは魔法などを使用する場合、このアカシッククロニクレスに脳内でアクセスしなければ行使できない仕組みになっています。とても重要な箇所なのですね〜」

イヴ「もつと碎いた感じのほう分かりやすすくない？」

エッジ「そっか！えっと、『アカシッククロニクレス図書館』はリペアが勤めていた所です！」

イヴ「え・・・それって専門用語解説なのかな・・・」

エッジ「イヴ、それじゃ皆さん。しーゆー」

## 第七夢：夜桜

「それで次は次のニュースです。春も中頃を迎え、桜の花がピークを迎えています。」

ぱーっとテレビを見ていたリペアがふと気が付いたように振り返る。

「剣示さん剣示さん。花見ですよ花見！」

「おー・・・花見かぁー」

休日の早朝、相島家では相島家主以外起床していた。

事の発端は昨日のイヴの家庭実習である。授業の一環で朝の食卓を作るというものが行われた。そこでありえないものを作成してしまったのである。

当然、名門学園教師は可愛い教え子の料理を味見した。

当然というか食中毒。可哀想にも入院。

そこで昨日、相島家に電話がかかってきた。

内容はこうである。イヴさんの調理には多大な問題があり、家族のほうで少し、料理の勉強をさせて欲しいとのことであった。

「イヴちゃん、それは一サジ、ううん。オタマで一サジじゃないわ・・・それは塩じゃなくて砂糖よ？」

などとキッチンから聞こえる。毒見、というか味見人として起こされた剣示は気が気ではない。

「花見・・・生きていたら行きたかったなあ・・・」

「大げさですねえ」。死にはしないですって・・・多分」

死刑執行を待つ囚人の気持ちばかりそんな気もしていた。だから剣示は看守との会話をしてみた。

「看守さん・・・おれあ、最後にあんころ餅くいてえなあ・・・」

とその言葉にリペアが反応し、続ける。

「そうか、ほら。玉露も用意しておいたぞ」

「うめえ、うめえよ。看守さんお世話になりましたあ・・・」

「何やってるのあんた達・・・？」



本物の涙を流しつつ演技している剣示とリペアを、剣示の母が怪訝そうに見つめながら訊いた。

「あ、・・・えっと？何やってるんですか？剣示さん」

「うむ。死刑執行を待つ囚人と看守の寸劇だな」

呆れたという顔をして、剣示の母はソファに腰掛けた。

「教師を病院送りにしたイヴの面倒みてなくっていいんですか？」

「ヤメロ。そのヤンキーな子みたいな言い方は・・・」

剣示の母は笑いながら新聞のテレビ欄を見ながらチャンネルを朝ドラに変えた。

「大丈夫みたいよ？後は一人でやりたいって」

「リーサルウェポンを野放しにしないでくれ。おふくろ・・・」

「剣示さんも十分酷い言い方してますよ？」

朝ドラに見入っている母とリペアを尻目に剣示はそーっとキッチンを覗いてみた。

剣示の視線に気付いたらしく、イヴはにこつと微笑む。

「もう少しで出来るよ。お兄ちゃん」

「あ、ああ・・・分かった・・・」

あんな顔されたら逃げるなんて出来ないわあ・・・。

剣示は泣く泣く元の位置に戻り、恐怖に立ち向かおうと誓った。

物体の色が紫色とか緑とかなら逃げようとも誓った。

というかまともなものが奇跡のように出てくれることを神に祈った。

テーブルに並んだ品々はどれもこれも言うことがないほどまともなものだった。といっても姿形だけの話だが。オムレツにコンソメスープ。サラダに、量を少なめにしたバジルパスタ。それにオニオントースト。いわゆる洋風朝食だ。

ハッキリ言って美味しそうなのだが、あの炭を作り、そして教師を病院送りにしたイヴだ。

何が隠されているか分かったものではないと内心冷や汗をたらたらと掻きながら剣示は言った。

「う、うまそうだな。すごいじゃないかイヴ」  
「えへへ」

剣示に褒められ、イヴはにかみながら微笑む。  
覚悟を決める俺！

よし。食うぞ・・・

食うんだ俺！

「おふくろ、リペア、く、食わないのか？」

「あんたのためにイヴちゃん一生懸命作ったんだから早く食べなさい」

「私も剣示さんのために作ったものまで食べるほど意地汚くないですよー」

オーケーテンキューベイバー。あんたらは興味津々と俺が毒見をする瞬間が見たいわけだ。

ごくつと喉を鳴らしながら、オムレツに手を出した。

口の中に入れ、2、3回確かめるように味を確認する。

「あ」

「え！？どうなんですか剣示さん！」

身を乗り出しながら喜々として質問してくるリペアに剣示はそのまま口に出した。

「美味しい・・・うまつー！」

「そうですかあ！じゃあ私も味見をば！」

といいつつさっき自分が言ったことすら忘れたようにリペアはオムレツを一口ほおばった。

「イヴちゃん。ちゃんと教えれば教えたことはちゃんと覚えるんだから美味しいのは当たり前よ」

と剣示の母は言う。なら、それ早く言えよと思いながらも剣示はイヴの頭を撫でながら美味しいと言ってやる。何とも嬉しそうな笑顔に剣示も笑顔になった。

イヴの作った朝食はどれも絶品で文句のつけようはなかった。少し量が多いとも思ったが難なく剣示の胃袋に収まってしまった。

「いやあ、うまかったあ・・・ごつそさん！」

「えへへ」

全部食べてくれたことが余程嬉しかったのだろう、イヴは満面の笑みを浮かべながら片付けを始めた。

満腹に満たされた様子で剣示が外を見ると何ともいい天気だった。

そこで剣示は提案した。

「イヴ。花見にでもいくかあ？」

キッチンから顔を出したイヴはキョトンとした表情だったが剣示の笑顔につられたのか笑顔で頷いた。

その後、剣示の父が起床し、父の提案で夜桜にしようということになった。

剣示も異存はなく、そうすることにした。

ということとで、天気がいいので花見の買出しに自ら行くことになった剣示は外に出て深呼吸をする。たったそれだけだがとても気分がよくなった。

一緒に行くと言ったイヴとリペアを待ちながら春の景色を満喫している。

舞阪市は人口こそ多くないが、その分近場に自然が豊富にあるのだ。特に夢幻町はこの時期桜で彩られる。知る人ぞ知る名所なのだ。

「お待たせしましたー！」

「お待たせマスター」

「おう。いくかあ」

三人が歩き出すと、桜の花びらがひらひらと風に舞う情景が目に入る。

「お、いいねえ」

剣示は思わず頬を緩めて花びらをしばし見つめる。

イヴもリペアも舞う花びらを感嘆するかのように見つめていた。

三人がやって来たのはやはりここ。夢幻町きつての何でも揃う商店

街、夢幻町アーケード街だった。しかし、ここはいつもと違う光景が広がっていた。向かい合う店と店の中央に屋台が並び、賑わいを増している。

「わぁ。何かすごいことになってますねえー」

「ああ。夜店の準備だろうな」

剣示の言葉にリペアが残念そうに聞き返す。

「準備ってことは今はやってないんですかぁ・・・」

「んー。どうだろ？やってる店もあるんじゃないかな・・・イヴ。ちよつと屋台見ていくか？」

剣示はじいつと屋台の列を見ていたイヴに笑いながら話しかけた。

「いいの？いいの？お兄ちゃん」

驚いたように訊き返すイヴに思わず噴出してしまつ。

「ぶつ。ははは、いいさ。じゃあ行こうぜ」

リペアははしやぎながらあちらこちらと屋台を見ていつている。ゆつくりとイヴと剣示は屋台を見ていきながら剣示はふと疑問を口に出す。

「でもさ、イヴはよくお兄ちゃんとマスターってのを使い分けてるなあ・・・口滑らせて人前でマスターって言ったことねえしさ」

「範囲内で会話を聞かれる可能性がある場合はお兄ちゃんって言うようにしてるから」

別段大したことではないという口調で言うが、剣示にとってはすごいことだった。

「ほぉ・・・すげえなあ」

「そかな？」

「うむ」

会話をしていた最中にイヴの視線が止まる。剣示がその視線を追うと二対の可愛いくまのキーホルダーだった。剣示は欲しいかと尋ねたらきつとイヴは否定するだろうと思う。本当にそういう子だと知っているからこそ、剣示は屋台の主に言う。

「これください」

「お、お兄ちゃん？」

「おう！可愛い妹さんだな！マケとくぜ！500円のところを400円だ！」

恰幅のよいオジサンがイヴに商品を差し出しながら言った。

剣示は代金を支払い、イヴを見た。

二つのキーホルダーをにこにこ微笑んで見ているイヴを見るとやはり欲しかったのだなと確信出来た。

「何か買ったんですかぁー？何々？何買ったの？」

終点まで見てきたのだろう、リペアが興味津々とこちらに走ってきた。

走ってきたリペアにキーホルダーの1つを差し出し、イヴは笑って言う。

「これ、リペアの分」

「おろ？私の分・・・ですか？」

「だってさ。受け取つとけリペア」

剣示は本当に仲の良い姉妹を見ている気分になって、自然に笑いがこぼれてしまう。

「んで、終点まで見てきたんだろ？なんかあったか？」

「ええ！向こうに！！人形焼きがやってました！！」

リペアが一大事だと言わんばかりに叫ぶのを見て剣示とイヴは顔を見合わせ笑う。

「うつし、今日は気分がいいからな。奢っちゃるぞ！」

「うひゃあ！剣示さん太っ腹！いい、いきましょいきましょ早くいきましょー！」

その後、あれだこれだと奢られるが、剣示は終始楽しい気分で過ごせた。

ちよつとした買出しのつもりが、帰りには黄昏時となり、かなりの時間を遊んで過ごしたことを物語っていた。

「イーヴァルズグラックスの主を殺すつもりかい？」

「それが私の任務だ」

自室で装備を整えている所に背後を取られたということに多少驚きはしたが、その顔が見知ったものだということで驚きを隠しながらシェイドは答えた。

「この前といい、今といい、何のつもりだシャイン」

シャインは答えない。無言でシェイドを見据え、手を翳した。

「・・・なるほど。お前か」

「分かってもらえて光栄だね。闇の剣」

シェイドはゆつくりと間合いを取りながら腰に備え付けたナイフに手をやった。

「名無し」お前が行動するとは意外だな」

「君には少し休暇が必要だろう？病院のベッドってというのはどうだい？」

「ほざけ！！」

シェイドはナイフを”名無し”の額に投げつけながらもう一方の手を翳しながら神具を具現化する。

「御出でなさい！レーヴァテイン！」

漆黒と紅の光がシェイドの手に収束し、禍々しい剣の姿を形取る。

それを合図に”名無し”は翳した手に刃を顕現する。

「闇より闇に属する力。さあ、来い。ナツシング」

「お前相手に手加減する積もりはない。最初から全力でいかせてもらうぞ！」

「光栄だね。だが、抗いは無駄だ」

シェイドはレーヴァテインを一振りし、左手を翳す。瞬間、光が収束する。

「ライトニングボルト！」

シェイドの左手から雷光と衝撃が”名無し”に向って放たれる。刹那、シェイドはレーヴァティンを”名無し”に向かって振りかぶる。 ”名無し”はそれらを跳躍して避け、天井を蹴り、シェイドに斬りかかる。

「ちっ！イグドレードバーニング！」

他方向に広がる炎が天井を焦がすが”名無し”の姿は最早そこには無く、シェイドは瞬時に後方にレーヴァティンを振り抜く。その瞬間、シェイドの口からゴポリと血液が吐き出される。

「だから。言っただろう？抗いは無駄だと」

”名無し”の言葉と共に膝から崩れ折れるが、シェイドには外傷は見当たらない。

「初めから・・・この部屋に・・・魔術を張ったな・・・ぐっ」

握り締めていたレーヴァティンも光の粒子に変わり、空中へと霧散していく。

「君の魔力は頂いたよ。実に美味だ。回復するのにも相当な時間を有するだろう？それともここで殺しておこうか？どうする？そうだが君が命乞いするのなら・・・その命助けてやっても構わないぞ？くっくく・・・」

シェイドは歯を食いしばりながらやつのことで口を開く。

「ほ、ざ・・・けっ」

「興ざめだ・・・最後の言葉にしては聊か面白みに欠ける」  
白い闇の剣をシェイドの首元に当てる。

「DEL・・・CLO・・・ZED・・・フェンリルっ」

シェイドの叫びと共にシェイドの周りから無数の氷の剣が具現化し、 ”名無し”を貫いた。

「くっくく・・・やはり、使ったな・・・それでかなりの時間お前・・・は力を蓄えねばなるまいて・・・はっはっはっは」

笑い声が途切れ、”名無し”はドロドロとその姿を闇へと変え消えていった。

「くっ・・・最初から・・・狙い、は、私の無力化、か・・・くそっ！」

月明かりと電灯に照らされ、神秘的に光り輝いている夜の桜。  
舞い散る花びらも淡く輝き夜の風に舞い遊ぶ。

「わぁ・・・綺麗です・・・ねえ・・・」

誰しもが絶句するほどの光景。

夜の桜。

「いやぁ。まじでいいなあ花見は」

一呼吸おいて剣示は溜息と一緒に話し出す。

「うん。綺麗」

「うむ、やはりいいものだろう？」

剣示の父はビールを飲みながら桜を見上げている。

イヴは興味津々と舞う花びらを見つめていた。

「本当、たまにはいいものね・・・」

用意してきた弁当やおつまみを広げつつ、剣示の母はにこやかに言う。



角度によって白く輝いたり、ピンクに輝いたりする花びらを眺めつ  
つ皆往々に桜を堪能していた。

花見で賑わうその場所も風が吹けば誰しもが見とれ、声を失う。  
それほどに美しい光景が広がる。

会話は少ないがどこか心が繋がる感覚を体感しながら剣示達、”家  
族”の夜は更けていった。

## 第七夢：夜桜（後書き）

### 《次回予告》

リペア「うおっついに後書きまで利用しちゃったよ・・・この人」

剣示「ひでえなこりや・・・あほだわ」

リペア「まあカンペありますんで読みましようかね」

剣示「よんだれよんだれ」

リペア「では！次回予告スタート！ってこれだけ！？」

「あの者の限定解除を執行する」

「アカシツククロニクレスの老人どもがイーヴァルズグラックスの破棄を決定したか・・・」

分かっていたと言わんばかりに大した驚きも無くシェイドは報告を聞いた。

「これが夢であればと思います」  
なびく髪をそのままに微笑む。

「私は私の意志で殺したくない！！！！」

次回「現世は夢、夜の夢こそ真」

## 第八夢：現世は夢、夜の夢こそ真（前書き）

エッジ「はいやって来ましたこのコーナー第二段！エッジとイヴちゃんの魔法専門用語解説コーナー！どんどんどんどん」

イヴ「元気だね」

エッジ「イヴちゃん元気ないねえ！どうしたの？最近お疲れ？」

イヴ「まあ本編はハードだから・・・」

エッジ「う・・・本編出れなくなつた私へのあてつけなのかしら・・・ま、まあじゃあ今回の用語は『魔道探查組織フォース』うーん私の元職場ですね！このフォースという組織は基本的には魔法書探索が主な任務なんですけどでもそれ以外には魔に囚われた者の抹殺などと暗殺部門もあり、色々な部署があるわけです。設立者はクロウという謎の男なのですが、現在フォースの全権を委託されているのはシェイド様ですね。フォースというこの組織の命名理由は圧倒的な力で世界を調律するといった意味があるそうです」

イヴ「そろそろ時間だよエッジさん」

エッジ「あれあれ？もっと熱く語りたいところですが残念ですね・・・

・じゃあ皆さんまた！」

イヴ・エッジ「しーゆー」

## 第八夢：現世は夢、夜の夢こそ真

光が仄かにステンドガラスから柔らかに舞う大聖堂の中、十数人のローブを羽織った人間が集まっていた。

「では、イーヴァルズグラックスを破棄するということでしょうか？」

声色は女のようなだがその年齢までは把握できない何ともいえないノイズが入ったような声が聖堂に響いた。

「”白き闇”が気付いたようだ。最早一刻の猶予もないであろう”聖堂の中心に佇む老人の声にざわざわとざわめきが始まる。”

「しかし、イーヴァルズグラックスは我らがアカシッククロニクレスきつての最強の魔法書。それを易々と破棄するなどと、本当によろしいので？」

「世界の崩壊を未然に防ぐのも我らが職務。管理だけが本分ではあるまい」

ざわめきが一瞬にして止まり、その中の誰しもが老人を見据えた。その中の一人が疑問を口に出す。

「イーヴァルズグラックスに対抗できる手段はあるのでしょうか？」

考え込むような沈黙の後、老人は口元を歪め、薄く笑い言い放つ。

「あの者の限定解除を執行する」

「アカシツククロニクレスの老人どもがイーヴァルズグラックスの破棄を決定したか・・・」

分かっていたと言わんばかりに大した驚きも無くシェイドは報告を聞いた。

「主を殺すのも諦め、そのものを破棄するとは馬鹿どもが考えそうなことだ」

点滴などの管や訳の分からない器具などに囲まれたベッドに寝かされているシェイドは少し身体を起こして、やつれている様子で溜息を吐いた。

「シェイド様・・・大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない。わざわざ報告済まなかったな。引き続きアカシツククロニクレス内部を探ってくれるか？」

心配そうに訊く部下を労いながらシェイドは薄く笑った。

「はっ！では私はこれで」

言葉と共に部下の姿はすでに消え去っていた。

白い部屋に囲まれながら苦々しい顔をするシェイド。

ベッドの部屋の傍の台の引き出しをそつと開け、中からあまり知られてなさそうな銘柄のタバコ『Del' Gladz』を取り出し、口元に咥える。

銀色のジッポを親指で押し開けると小気味のいい音が木霊し、刹那、火力のよい炎がタバコの先を包んだ。

甘苦い味が口内に広がり、落ち着いた様子でそれを肺の中に吸い入れ、吐き出す。紫煙がふうつと舞い上がり、薄く光が射す部屋でゆったりとたゆたう。

「ここは禁煙ですよ、シェイド様」

いつの間にか部屋に入っていた看護専門の隊員が特に寝る様子もなく淡々と言う。

「落ちぶれたものだ。お前の気配すら気付くことが出来ないのだ・・・」

・全く」

そう言いながら台の引き出しから携帯用の灰皿を取り出し、タバコを揉み消した

「そう気落ちなさらないでください、魔力は後数週間もすれば元に戻ります。問題なのは・・・」

「守護神獣を使ったことだろう？寿命を惜しいとは思わん。奴は私の命を救うたびに数年分の命を喰らっているだけだ。割のいい話じゃないか」

くだらない事を言うなとでも言いたげに吐き捨てるようにシェイドは言い放つ。

「シェイド様はフォースになくてはならないお方、ご自分のお体を、どうか・・・労ってやってください」

「ああ、ああ。分かってるよ。心配かけて済まないな」

「いえ、それではお大事に」

薄い微笑みを浮かべ、看護隊員は退出していった。

カチャリとドアの閉まる音でシェイドは苦痛さえ伴った溜息を吐き、呻く。

「っ・・・はあ・・・」名無し”・・・貴様の狙いは何なのだ・・・  
一体・・・」

虚空を見つめる瞳が焦点を失う。

シェイドは起こした身体をそつと横たえ、瞳を閉じた。

閉じた瞳に映るのは暗い闇だけ・・・

遠くで遠雷の響く音が聴こえる。

雨が近いな、シェイドはふいにそう思った。

朝の日差しが心地良く、梅雨も近いというのに雨も最近は降らない。田畑を耕す者にとっては深刻だろうが、学生にとっては喜ばしいことだ。

少しだけ暖かな風が吹いて、それを身に受けるのがとても心地良い。眠いのを省けば、朝という時間帯は最高の時だろう。

爽やかな朝の日差しを受けつつ、剣示は大きく伸びをした。

「うーん。いい日和だなあ・・・」

剣示は制服ではなく私服を着ている。

何故ならば、剣示は大学生になったからだ。

「今更ながら思いますけど、剣示さんよく大学受かりましたよね・  
・勉強してる雰囲気ゼロだったじゃないですかー？」

「ふっふっふ。それはだな、ここらへん周辺の大学はあほでも受かると評判なのだ！」

エヘンと胸を張る剣示。

実際、剣示は授業以外でほとんど勉強はしておらず、やったといえは受験前の数日だ。

それで受かるというのだから全くもってどうしようもない大学だと言えよう。

「受験する少し前にマスター徹夜してたから、がんばったんだよ」  
フォローを入れるイヴを見て剣示は泣きそうになるが、ぐっと堪えた。

だって、男の子だもん。

「じゃあ行つて来るねマスター」

「行つて来ます」剣示さん

「おう、きいつけてなあー」

駅前で二人を見送り、剣示は駅の自転車置き場に向う。

大学は駅前を経由しないのだが、剣示はいつものように三人で登校しようと思いつき、駅前に自転車を止めておき、駅前から自転車で大学に行くようにしていた。

別に誰に気を使うためにそうしたわけではない。

剣示自身が二人と居ると楽しいからそうしただけである。

自転車の鍵を外し、こぎだそうとした瞬間、冷たい風が強く吹く。

剣示が空を見上げると先程あれだけ晴れていた空に薄い灰色の雲が流れていた。

「雨・・・降るのかな・・・」

何の気なしにそう口に出し、大学への道を急いだ。

剣示の通う大学、夢幻大学は舞阪市の中央に面しており、交通機関に事欠かない。バスは大学前に停まり、電車さえも大学から歩いて2分のところにあるのだ。剣示が自転車で通う理由は2つある。1つは交通費節約。2つ目は駅から自転車で大学に行ったところで10分程度ということにあった。

大学の駐輪場に自転車を停めていると見知った顔が数人挨拶をしてくる。

夢幻高校で成績を下から数えたほうが早いメンバーだ。

かくゆう剣示は下から数えようと上から数えようとさほど変らない位置にあったのだが、受験前にありとあらゆる事件が重なり、この夢幻大学にしか受け入れてもらえそうなところはなくなっていた。

特に志望大学は無かった剣示だったので別に何の不都合もなくこの大学受験をあつさりと決めたのだった。

挨拶してきた連中に剣示は軽く手を挙げてから自分が選択した授業が行われる教室へと急いだ。

「やあ。剣示くんおはようー！」

教室に入るとオタツキ・佐藤が満面の笑みでこっちこっちと手を招く。



無視すると騒ぎ出すので仕方なく佐藤の隣に座り、溜息をつく。

「たくつ朝からウルサイなあお前は・・・」

「そんなことよりさ！本当に家に遊びにいつちやだめ？というよりもイヴちゃんの写真とつてくれないかなあ？リペアさんのでもいいよ！？二人とも元気かい？ね、ね、たまには僕の家にも遊びに来てよー二人を連れてさー」

相変わらずしつこく剣示にせっついてくる佐藤に多少ウンザリしながらも授業が始まる前まで世間話を交わす。

「そっぴや剣示君、最近この周辺でヤバイドラッグが出回ってるらしいよ？夜は危険だからね二人にもよく言っておいてくれよー心配でさ」

「あん？ヤバイ薬？ニユースでやってたのか？」

剣示も一般的にやっている時事などには一応目を通すタイプだ、剣示が知らないということはきつとネットで収集した情報だろう。

「ニユースにはなつてないよ。まだ事件は起こつてないからね、ネットでさこの辺に自分を覚醒させる力を得ることが出来るつていう薬を配り歩いてる女がいるつて噂があるんだ」

佐藤の話にはあまり引き寄せられることはないのだが、この日ばかりは少し違った。

剣示は眉をひそめながら話を促した。

「それで？」

「うん、それがさ。その薬の力は本物だという輩が多くてね、自分は選ばれたんだと言ってるらしい。事件が起こらないのは不思議だけどさ、どうやら統率者がいるみたいなんだ。まあ元締めなんだろうね。噂にしてもこのスレはアングラなだけどさ、量が半端じゃないんだ」

もつと話を詳しく聞きたいところだったが、残念ながら始業のベルに話は遮られ二人ともどちらからともなく前を向いた。

剣示は授業中も佐藤の話が気になっていた。

ドラッグ云々なら別に気にするまでも無いことだが、気になるのは

やはりその内容だ。

『ネットでさこの辺に自分を覚醒させる力を得ることが出来るって  
いう薬を配り歩いてる女がいるって噂があるんだ』

佐藤の言葉が脳内で反芻する。薬でラリっている奴の言葉ならば仕方ないが、何故かそう思えない節があった。

そう思うのには自分に起こった数々の事件が剣示の思考を変えてしまったこともあった。

今まで非現実的なことなどないと思っていたが現実には起こってしまったことには目を背けられるはずも無い。

まだ、事件が起こらない。

自分は選ばれた？

統率者。

薬を配る・・・女。

その後の授業もさほど集中出来ず、剣示はぼーっと過ごしてしまっただった。

時刻は夕刻。オレンジ色に染まる空に薄い灰色の雲が少しずつその量を増していつている。

今日イヴは強制的な週に一度のクラブ活動のためリペアより少し遅くなることになっている。リペアはイヴと待ち合わせたバス停のべ

ンチに鞆を置き、空を見上げてぼーっとしていた。

「はあ・・・雨・・・降りそうですねえ・・・」

誰に言うでもなくリペアは呟いた。

「そろそろ降るわ」

リペアの言葉に答えるように声はリペアのすぐ近くから発せられた。リペアが驚いたように振り向くとそこには冷たい瞳でリペアを見据えた女性が立っていた。

燃える様な赤い髪がサラリと肩まで伸び、髪に揃えたかのような赤い瞳がその表情を一層きつく見えるように際立てている。整った顔立ちだが、その顔は彫像のように冷たく、可愛いという言葉は全く似合わない。黒のロングコートの下には真っ赤な衣装を着込んでいる。

注意を促すほどの配色だろう。目に映るものに確実に印象を刻むほどその女性はその風景からクッキリと浮き出していた。

「く、クロノス・・・！？な、何で・・・貴方が・・・！？」

はつきりと分かるほどリペアの顔色が凍りついた。

そのリペアの表情を見たクロノスは口元を歪めて薄く笑う。

「そんなに意外か？リペア」

「・・・どうして・・・」

「どうして？だと？分かるだろう。それとも分かっているって訊いているのか？」

リペアは二の句も告げず俯いた。

「ふん。まあいい、リペア少し付き合ってもらおうか」

クロノスはリペアの鞆の上に封筒を置き、顎で歩けとリペアを促す。力を失ったようにリペアは項垂れるようにそれに従った。

空は完全に真っ黒な雲に覆われて、夕刻ということすらも分からないほど暗くなっていた。

写真研究会というサークル活動で少しばかり帰りが遅くなった佐藤はいつもならバス停でバスに乗って帰るのだが、丁度バスが行ったばかりらしく仕方なく駅へと向っていた。

「うーん、ついてないなあー。丁度バスが行ったばかりなんて・・」

ぼやきながらも早足で駅の明かりが見える位置まで来ていた。駅前では暗くなったというのにティッシュ配りにビラ配りといろんな人間が働いている。

大変だなあと佐藤は思いながらも配る人と一定の距離、差し出されることのない距離で歩きながら駅内へと急ぐ。

するといきなり服の裾を引っ張られ立ち止まってしまう。

「え・・・？」

驚きを隠せないで振り返ると、そこには滑らかな黒髪に大きな黒いリボンが印象的な喪服を模したような出で立ちの幼い少女が立っていた。

「お兄ちゃん。おめでとう」

開口一番少女はそんな台詞を放った。

「え？え？」

困惑する佐藤に二の句を告げせない様子で少女は佐藤の手を握り、歩くよう促す。

「お兄ちゃんは選ばれたんだよ。凜についてきて？お兄ちゃんは選ばれた戦士なの」

一瞬あのネットで見た事件が頭をかすめるが少女萌えなこの男のことなのだ、握られた手を嬉しそうに握り返し、言った。

「ねえ凜ちゃん、あとで写真とらせてね」

「おそくなっちゃった」

イヴはそう呟きながら早足で待ち合わせたバス停に急ぐ。

最早周りは6時前という時間にも拘らず闇に包まれている。

空には星や月の輝きは無く、あるのは一定の間隔でゴロゴロと鳴り響く雷鳴の音だけだった。

バス停に着いたイヴはリペアの姿を探すが、見当たらない。

ベンチに目をやるとそこにはリペアのと思われる鞆がある。近づくとその鞆の上には封筒が置いてあった。リペアの書置きだろうか？でもそれなら何かあったのかと思い、急いでその封筒を開封した。

開封した封筒の中には1つのペンタグラムが入っているばかりでほかには何も見当たらない。

不審に思ったがイヴはペンタグラムを手に取り出す。

「うあ」

手に取り出したペンタグラムは急激な速度で高熱を放ち、慌ててイヴはそれを手放す。

地面に落ちたペンタグラムは光を収束してゆく。そしてやがて光を放ち、ホログラムを浮き出した。

「イーヴァルズグラックスだな？私はクロノス。アカシツククロニクス管理部に属する者だ。本日付で貴様の破棄を決定した。抗うのなら貴様の主諸共消去する。もしも、主に危害を加えたくなくば今から指定する場所へと来い」

メッセージの終わりとともにクロノスのホログラムが消え、この周辺一帯の地図が浮き出る。

その地図に一点の赤い印が付いている場所、そこが指定した場所なのだろう。

イヴは即座にその地図を暗記し、駆け出した。

雨が降り出す前に剣示はなんとか家路にたどり着き、ほっとした表情で玄関のドアを開けた。

「ただいまー」

いつもならイヴやリペアが玄関へと駆け出して来るのだが今日に限ってはその気配はない。

まあテレビでも見入っているのだろうと思い、玄関で座り靴を脱いでいるところで後ろから声をかけられる。

「剣ちゃん。まだイヴちゃんとリペアちゃんが帰らないのよ・・・連絡もないし・・・どうしたのかしら・・・」

心配そうな顔をした剣示の母が溜息を吐きながら言う。

「ん・・・確かにもう遅いな・・・」

剣示も怪訝そうに呟き、仕方ないといった感じで脱いだ靴を履きなおした。

「じゃあちよつくらそのへん見回ってみるわ」

「お願いね。気をつけるのよ？」

「わーってるって。みつけたら連絡入れるわ」

「分かった、じゃあ行つてらっしゃい」

母に見送られながら帰宅した数分も経たないうちに玄関のドアを開けて外へと飛び出した。

（マスター・・・マスター・・・心配しないで、すぐ、すぐ帰るか  
ら・・・家から出ないで・・・お願い）

外へと出た剣示の頭の中にイヴの声が響く。

一瞬戸惑ったが剣示はイヴの何処に居るのかと念を飛ばしてみる。

（何処だ？今何処にいるんだ？）

返事は無かった。こちらからはイヴには聴こえないのだろうか？

何にしてもそんなことを言われたからおとなしく家で帰りを待つことなど出来るはずもない。

「くそっ！」

剣示は苛立ちを口に出しながらも駆け出す。

駆け出した途端にパラパラと小雨が降りだした。

服が濡れるのを気にした様子は無く、剣示はがむしゃらに走り始めた。

真っ暗な林を抜けた先、視界が広がるような広場にイヴは立ち止まった。

小雨に身体を濡らしつつも必死に駆け抜けてきた終点だ。

「リペア！？よかった無事なんだね？」

イヴの声にリペアが顔を向けるが表情はまるで無い。

イヴの言葉に答える様子もなく、只、興味もないような視線でイヴを見据えていた。

「来たか、イーヴァルズグラックス。抗うのもよし、抗うことなく自らその存在断つのもよし。好きなほうを選ばせてやる」

リペアのすぐ傍で大木に背をつけ腕組みをしているクロノスが口を開いた。

「私は存在を勝ち取るわ。貴方を殺してでも」

イヴはクロノスを睨みつけて言い放つ。クロノスは薄く笑い、両手を広げ光を収束させた。

「抗うのは自由だ。だがそれも徒労に終るがな」

「徒労に終るのは、貴方のほう」

クロノスに習うかのようにイヴも両手に光を収束させていく。

「ならば見せてみるがいい！最強最悪と謳われたその力を！デイスクリーズブラスティング！Run！」

両手から長く伸びる光、それをイヴに向けて交差するように振り抜く。

素早く身を伏せその光を避けつつ、イヴは左手を振り、即座に右手も振り抜く。

「ディアボロスの牙！クアトルの咆哮！」

駆け抜ける霧の獣とその後に続く衝撃波がクロノスを襲う。クロノスとともに大木は粉々に粉碎される。が、クロノスは無傷でその場に立っている。

「その・・・程度なのか？イーヴァルズグラックス・・・？あの最強と謳われた魔法書がこの程度・・・？興ざめも甚だしい！！ゴースト！Run！デスデライド！Run！」

クロノスは怒りにも似た感情を剥き出し、2つの魔法を行使する。

イヴの周りに無数に顕れる霧の兵隊。それらがイヴに襲い掛かるとともにクロノス自身も暗黒の大鎌を携え襲い掛かる。

イヴは兵隊の攻撃を避け、無数の兵隊を一つ一つ消滅させていくが全く間に合わない。

クロノスは薄ら笑いイヴの背中を切り裂く。

制服が切り裂かれイヴの背中から血が噴出す。顔を顰めるように痛みに耐えつつイヴは振り向きざまにクロノスに向って衝撃波を飛ばす。

「はっ！その程度！避けられないとも思ってたか！」

クロノスはイヴの行動を察していたかのように跳躍し身体を回転させながらイヴの側頭部を蹴りぬく。



強かに蹴り抜かれたイヴが地面に身体を擦らせながら数メートルほど吹き飛ぶ。

地面に倒れたイヴを取り囲むかのように霧の兵隊が群がる。剣や槍や斧を構えた兵隊が一斉にイヴに向けて振りかざした瞬間、黒い霧が辺りを包み兵隊達を喰らう。

「暗き闇の王。ヴェルフエルゴードル魂となりし者共を喰らえ！」  
黒い霧に包まれた兵隊達は断末魔にも似た叫びを上げつつ消滅してゆく。

肩で息をしつつ、ゆっくりとイヴは立ち上がり、クロノスを見据えた。

「そうではなくてはな。私も楽しませてもらえなければ私の存在が無意味にも等しいではないか」

クロノスは愉しそうに笑う。大鎌を構えてイヴに向って地を蹴った。凄まじい速度で振られる大鎌を最小限の動きで避けつつも徐々に身体に傷を帯びていく。

体中切り裂かれ制服はイヴの血で真っ赤に染まっている。

その光景を無表情で眺めつつ土砂降りになっていく雨のなかりペア  
は静かに佇んでいる。

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．うう．．．くう．．．」

どんどんと身体の血が抜けてゆき、体温が低下してゆく。更には冷たい雨が身体を冷やしていく。イヴは気が遠くなる感覚を必死に堪えながら応戦する。

遂に足がもつれ、倒れこむイヴは直感的に死、消滅を覚悟したがクロノスの大鎌が振り下ろされる前に大切に愛しい人の叫びがイヴの耳朵を振るわせた。

「イヴー……！！！」

マスター！？

イヴの鼓動は高鳴り、瞬間まるで別人のような動きを見せた。イヴ

の身体目掛けて振り下ろされる大鎌を左手で跳ね飛ばし、その反動を使ったまま回転してクロノスの腿を蹴り抜き、地に手足をついて着地する。

「はっ……主のご登場か……面白い展開になってきたな……くっくっく」

クロノスはイヴなど眼中に無いかの如く剣示の方をゆっくりと振り向く。

「てめえ……そりや何の積りだ……イヴに何をしたあ!!!!!!」

ドクン。と。

ドクン。とイヴの鼓動がまたしても高鳴る。

まるで剣示の怒りが自分の中の何かを突き動かす如く体内から暗い力が湧き出てくるかのようだった。

なんていう快い快感なんだろう？

イヴはトロンとした目で虚ろな表情をしながらふらふらと立ち上がる。

クロノスは下司な笑いをし、イヴを見ていう。

「そうだ。お前の大切な主から殺してやろう。そうすればお前も少しはがむしゃらに戦ってくれるだろう？」

その瞬間イヴの瞳が紅く紅く輝く。ギョロリとした瞳をクロノスに向け、言う。

「いい加減、私を侮辱するのはヤメロ。もうオマエの顔は見飽きた」  
イヴの爪が禍々しく伸び、刹那イヴの姿はクロノスの視界から消え失せる。

「!？」

クロノスが驚いた瞬間クロノスの右腕は地面に落ちた。

「がっ……なっ!？」

「望んでいたのは最強と謳われた私の力なのだろう？」

イヴの言葉が終る刹那クロノスは空中へと投げ出され、それとともにイヴも地を蹴って宙に舞う。次々に空中で切り刻まれ最後に心臓を突き刺し、地面に投げつけイヴは着地した。

「はっ・・・ああ・・・ごふ・・・の、ぞんで、いた・・・はっはっ・・・やはりこれほどのものはっ・・・はっ・・・私の役目が果たされる時が、来た・・・」

死を間近に控え、クロノスはゆっくりとリペアを見上げる。

表情の無いリペアを見据えながらクロノスはゆっくりとその言葉を告げる。

「私、の死に、より、オマエの・・・限定解除を、行つ。ふ、ういは解か、れる」

クロノスの息が絶えた瞬間クロノスの身体は光の粒子になり、リペアへと収束していく。

リペアの表情は天使のように穏やかに変わり、微笑む。

金色の髪は輝きを帯び、色素の薄い青い瞳はエメラルド色に変る。

「リペア・・・？」

「おい、二人とも大丈夫か！？」

剣示はイヴのほうに駆け寄る。そして変わりゆくリペアを見上げる。リペアは剣示とイヴにニコリと微笑み言う。

「イーヴァルズグラックス。貴方の破棄を実行します」

「リペア！？どう・・・しちゃったの？ねえ！？」

イヴの悲痛の叫びが木霊する。剣示は呆然とリペアを見て呟いた。

「冗談だろ・・・冗談なんだろ？・・・なあリペア」

雨と強い風が辺りを吹き抜けてゆく。雨に濡れた重い髪さえも強い風が靡かせる。

「これが夢であればと思います」

なびく髪をそのままに微笑む。

「だってお前・・・アカシッククロニクルスとはもうなんの関係もないんだろう!？」

リペアに向って怒りとも悲しみとも困惑ともとれる叫びを上げた。

「剣示さん、本当にそのようなことを信じていたのですか？イヴ。

私がアカシッククロニクルスを首になってからも何度も不正アクセスが認められた、その理由、これで分かってもらえたでしょう？私の力では無く、向こうが私に道を開いてくれていたのです」

「な、なんで・・・リペア・・・私達は友達だよ・・・私、リペアと戦いたくなんか・・・ないよ」

イヴの言葉にリペアは微笑む。本当に天使のように美しい笑顔で。

無造作にリペアはスカートのポケットからイヴから貰ったくまのキーホルダーを取り出し、イヴに投げ返した。

「では、絶交と行きましょう。これで貴方が主から制約された『友達を殺すな』というものから解放されたでしょう?」

イヴは唇を震わせながらキーホルダーを見つめた。

剣示には滴る雨がイヴの頬を伝っているのを見て、それが涙みたいに見えた。

「違う・・・」

「何が違うのですか？イーヴァルズグラックス」

震える声。イヴは初めてこんな感情を得たのだろう。

小さな声が雨音に掻き消されていく。

「さあ、殺し合いましょう。抗うのは自由なのですイーヴァルズグラックス」

「違うんだよりリペア・・・」

土砂降りの中、剣示は困惑してどうしていいかも分からず立ち尽くす。

イヴの声は本当に切なく響く。

本当の幼い少女が心を痛めたように切なく。

「私は私の意志で殺したくない!!!」

その叫びを聞いた後、剣示ははつきりと分かった。イヴは泣いているのだと。

リペアはイヴの叫びを聞き、溜息を吐いて言う。

「それは貴方の自由です。ですが、私は私の職務を果たすだけです」  
どうして、こうなるんだろう？

私はこんな気持ち初めてだったのに・・・

どうして殺したくないと思えた相手と殺し合いしなくてはならないのだろう？

私・・・どうしたらいいんだろ・・・？

私・・・

雨は止む気配もなくその勢いを次第に強くさせていつている。  
闇が・・・もう完全に辺りを包み込む。

夢であれば、どんなにいいだろうか。

夢であるならば・・・とイヴも剣示もそう祈るように思っただった。

## 第八夢：現世は夢、夜の夢こそ真（後書き）

### 《次回予告》

剣示「あーだるうー次回予告かぁ・・・」

リペア「そーですねえ・・・」

剣示「バックレルか」

リペア「まあカンペ読んでから帰りましょ」

剣示「うむ、次回予告スタート！」

「イーヴァルズグラックス、本気にならないと一瞬でケリがついてしまいますよ？私の力は貴方の本来の力と互角とも言われているのですから」

「闇。ゲヘナの領域。私は望むその腹を覗くことを」

イヴの詠唱とともに辺り一帯には禍々しい瘴気がたちこめた。

「私を殺せないのなら、貴方に未来などありません」

「やめろおおおおおおおおおおおおお！」

「私は・・・」

## 第九夢：邂逅（前書き）

エツジ「こんにちわ！みなさん！今日もはりきっていきますよ！  
エツジとイヴちゃんのナゼナニ魔法専門用語解説コーナー！」  
<br>イヴ「始まったね今日も」<br>エツジ「うんうん！さ  
って今日の一発目はっ！『魔法書物』これです！えっと魔法書物と  
いうのは長い年月をかけて、それ自体に力を宿す傾向があるんです。  
それによつて書物自体が擬態し人の形をとったり、自ら主を選んだ  
りとおつても不思議な行動をとるんですよ」<br>イヴ「かくゆ  
う私もその一例です」<br>エツジ「そうそう。イヴちゃんを見  
てれば分かりますよね？そういうことなのです」<br>イヴ「ね  
えエツジさん、聞いた話だとそろそろ本編復活するってほんと？」  
<br>エツジ「イヴちゃん！？そういう内情を話すクセやめなさ  
い！！そ、そういうことだから！みなさん！」<br>イヴ・エツ  
ジ「しーゆー」

## 第九夢：邂逅

ぼつぼつと小雨が降る中、クロノスとリペアは互いに背を向けながら会話を交わしている。

「全く因果なものだな。私という存在はお前を力を縛るためだけにある。何度私というものが生まれ何度死んでいったのか・・・見当もつかんよ」

「・・・累計を聞きたいですか・・・？」

「ふ、よしてくれ。自分が何度死んだかなどと聞きたがるものなどいやしないだろう」

そう言いながら皮肉ぽく笑うと、リペアの方を振り向いた。

「全く、なんていう顔をしてるんだ？情でも移ったか？だから言っただんだお前には向かない任務だと」

「うるさいですねえ・・・任務はちゃんとこなしますよ」

「当たり前だ。そうでなくては私が死ぬ意味がない！！」

語尾を強調したようにクロノスはリペアを睨みつけた。

「・・・私の枷として生まれた貴方にはそれだけしかないのでしょうね」

「自分の運命を嘆いたりはしないがな・・・只、私は戦って死ぬ。それが望み、それこそが私が生きたという証だ」

強くなつていく雨の中、クロノスはリペアに顔を向けていながらも強い眼差しでどこか別の何かを見据えていた。

「強いんですね・・・貴方は」

「・・・皮肉なのか、それは」

リペアは少し自嘲ぎみに笑う。

「いえ、心が強いということです」

「・・・ふん」

そんなリペアを見てクロノスは薄く笑い鼻を鳴らした。



土砂降りの雨の中、只お互い見つめあうだけ。

微笑み、イヴを見つめているリペアに対して、心底辛そうに悲しい顔をしリペアを見つめているイヴ。イヴの傍にいる剣示は言葉もなく虚空を見つめていた。

火花を散らす女と女の壮絶な戦い。などと茶々を入れられないほどシリアスな雰囲気寒気が走る。

どちらかが・・・本当に死んでしまう？何故こんなことになってしまったんだろうか？

「イーヴァルズグリアックス、貴方から仕掛けてくるのは無理でしょうから・・・私から仕掛けてあげます。降りかかる火の粉を払うのであれば、心の痛みも少しは和らぐでしょう？」

「リペア・・・やめ・・・て・・・」

イヴの声が掠れて切なげに響く。

「本気なのかよ・・・リペア！？考えなおせ！俺達は”家族”だろう！？」

「いいえ、他人ですよ。剣示さん、今回貴方は関係ありません・・・貴方の抹殺は最早撤回された任務ですので、少し動きを封じさせていただきます」

剣示の言葉を冷酷に否定し、リペアは剣示に向って手を翳した。

「影縫い。Run」

リペアの言葉が放たれると、剣示は指一本すら動かせない石像にでもなったような気分になった。感覚すら無い、雨に打たれながらも冷たいなどとも感じられない。

完全なる麻痺。

「・・・っ」

言葉すら失った剣示は唯一知覚できる視界だけが頼りになった。

睨むような視線でリペアを見つめ、この状態を解くように訴える。

「ええ。全てが終わったら貴方の呪縛を解きましょう」

剣示が何を言いたいかなどお見通しといった風にリペアは微笑んだ。

「リペア・・・お願い。こんなことやめよう？」

イヴの悲痛な言葉が雨音に掻き消されていく。リペアは相変わらず笑顔を絶やさずに両手を広げた。

「御出でなさい。我が愛刀、妖刀鬼神。神刀白夜」

二振りの刀を両手に構え、リペアは表情を少しだけ硬くした。

「リ、ペア・・・」

「いい加減、この状況を理解なさい。イーヴァルズグラックス・・・いきます！」

紅く輝く剣閃鬼神の太刀がイヴの首を狙う。白く輝く剣閃白夜の太刀がイヴの胸を狙う。

人間ではとても生み出すことの出来ない速度で振りぬかれる剣閃。まさしく神速。

それすらもイヴの瞳は捉える。瞬時にバックステップで剣閃を避ける。

「流石、イーヴァルズグラックスですね。そろそろテンポアップしましょうか・・・クラルリアウ、Run！」

豪雨の中リペアの姿が霞み、二重三重とその数を増やしていく。

イヴの瞳に5人のリペアが映し出されている。

「どれが本物かとは見極めようとしても無駄ですよ、イヴ。幻影などという陳腐な真似は致しません」

5人のリペアが同時に声を放つ。多重音声のように響く声にイヴが驚愕する。

「自己増殖・・・本気なんだね」

「今更言ってるんですか？全く甘いにもほどがありますね、貴方がどうしてそんなに変わってしまったのか・・・剣示さんが主になってから本当に子供になってしまいましたね」

リペアの瞳が冷たくイヴを見つめた。5人のリペアが刀を構え、イヴに向って地を蹴った。

「くっ、ロドムの煉獄」

イヴの周りを轟炎が包みリペアに対しての壁を作る。

それを構う素振りも見せずリペアはその轟炎の中に飛び込む。

「この程度で、私を止められると思っていたなら、愚の骨頂ですよ？」

辺りを明々と照らす轟炎の中心に抜けたリペアは刀を振り回す。

イヴは紙一重で避けながらも1つ2つと傷を負っていく。

「あうっ」

イヴの小さな悲鳴が轟々と燃え続ける炎にも消されず、剣示の耳朵を擦った。

（やめろお・・・リペアっ・・・やめろおおお）

「っっ」

声を失った剣示は必死に身体を動かそうとする。

だが、それでも指1つ動かすことは出来なかった。

イヴの顕した炎が消えうせ、辺りから光が失われ闇に染まっていく。ぼろぼろに傷を受けたイヴは何とか力を振り絞り、震えながらも立っている。

「イーヴァルズグラックス、本気にならないと一瞬でケリがついてしまいますよ？私の力は貴方の本来の力と互角とも言われているのですから」

「あ・・・はあ・・・うつ・・・あ・・・」

声も切れ切れにイヴがリペアを見つめる瞳は敵を見るものでは無く、家族を見る瞳そのもので切なさうにリペアを見据えている。

「・・・失望です、イーヴァルズグラックス。終わりにしましょう。最大の技で貴方を葬りましょう」

イヴの周りを囲んだりリペア達がそれぞれ刀をイヴの向け詠唱を始める。

「死とは、永遠ではない。DELOILE」

「生とは、不滅ではない。 R O T L I B L」

「命とは、莊嚴ではない。 S I L Z B A L」

「魂とは、鮮明ではない。 E L L D A G O」

闇や、光が交錯し、リペアが握る刀が紅く光、自ら意思を持つかのようにリペアの手から離れる。

10の刀がリペアから離れ、イヴを切り刻む。

血飛沫が舞い散る中、リペアは手を翳し、回りをたゆたう闇と光を収束し、イヴに放つ。

「インペリアル・フォアローブル！」

5筋の光と闇を纏った衝撃波がイヴに襲い掛かり、凄まじい爆音を轟かせイヴの居た場所を抉った。

どうして・・・？

どうして・・・？

どうして、私はこんな思いをしなければならないの？

も、う、わ、た、し、は、  
！！！！

舞い上がる煙を雨が掻き消してゆき、イヴの姿が露わになる。

ボロボロの姿が痛々しいと見えるはずなのに、剣示の瞳にはそれは禍々しく映っていた。

紅く燃える瞳が憎悪を湛え。

薄く歪めた口元が嘲りを含む。

「闇。ゲヘナの領域。私は望むその腹を覗くことを」

イヴの詠唱とともに辺り一帯には禍々しい瘴気がたちこめた。

「やっと、本気を出す気になりましたか。先の攻撃で仕留める積りだったのですが、矢張り貴方を消滅するには及びませんでしたか」

「ディアボロスのカイナ」

イヴの声とともにリペアを襲う巨大な腕が具現化し、叩き潰そうと振り下ろされる。

リペアが咄嗟に避けるも数人のリペアはその腕に飲み込まれ地の底へと引きずられていく。

「カリュストアルの剛剣」

畳み掛けるかのように次々にイヴは詠唱を行う。

次に顕れたのは巨大なビルほどもある剣だったリペアに向けられた憎悪がそれであるかのように剣は意思をもちリペアを襲う。

「デスの大鎌」

死神の鎌が唸りをあげながらリペアの一人の首を断ち切る。

血飛沫が上がり、頭部を失った体がどさりと地面倒れる。

リペアが攻撃を避ける間にもイヴは次々と様々な闇を生み出す。

「イリュストアの宣言」

視界を奪う更なる闇がもうもうと辺りを包みだす。

「くっ！流石です！イーヴァルズグリアックス！！ですが！インフアーナル・ライト！Run！」

リペアはイヴの攻撃のラッシュを受けながらも紙一重で躲しながら詠唱を行い力を放つ。

イリュストアの宣言の闇を眩いばかりの光が相殺する。

すでに一人となってしまうたりリペアが襲い来る鎌と巨大な剣を迎え撃つ。

「妖刀鬼神その魔をもって向かい来る敵を喰らえ！神刀白夜その光をもって向かい来る敵を焼き払え！」

妖刀鬼神を巨大な剣に突き刺し、神刀白夜を鎌に投げつける。

鬼神が巨大な剣を侵食してゆき、端からボロボロと崩れ去っていた。白夜は凄まじい光を放ち、鎌を包み込み消滅していく。

「私から双刀を奪い去るとは・・・しかし、まだこれからですよ」

「・・・」

イヴの瞳には感情というものは無く、ただ虚無を見つめるごとく虚空を見つめたまま動くことは無い。

「私を殺せないのなら、貴方に未来などありません」

その言葉に反応したかのようにイヴはゆっくりと視点をリペアにあわせる。

「・・・」

ゆっくりと本当にゆっくりと手をリペアに翳し、イヴは混沌という最も禍々しいものを生み出そうと詠唱を始めた。

「死より灰暗い闇に渦巻くモノ、私は望む汝の力」

「イイヴアルズグラアアアクッスウウウ！！！！」

悲鳴にも似た叫びを上げながらリペアはイヴに向って地を蹴る。

「全てを飲み込む闇よりも穢れた汝よ、姿を顕すことを許可する」

イヴに至近距離でリペアは手を翳し力を解き放つ。それに呼応するかのようにイヴもリペアに向けて力を放った。

「セフィラス・コード！Run！」

「カオス・ブラム」

激しく交錯する光や闇、言葉では表すことすらできない力が鬨ぎあい、軋轢の中激しい騒音を響かせながら収束し、膨張し、辺りを飲み込むほどの力の奔流が起こっていた。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおお！」

急に自由を取り戻した剣示に様々な感情が奔流し、気持ち悪いほど



その光景をまるで他人事、映画でも見るかのように剣示は眺めている。

言葉は無い。

感情さえも今は何も感じなかった。

イヴの手に力が収束していく。

その力を放つ寸前、イヴの身体が宙を舞い、剣示の近くまで吹き飛ばされた。

倒れたリペアの傍に現れたローブを着込んだ人影が低いトーンで言う。

「今、我らが司書を失うわけにはいかぬ。この勝負は預けておく。よいか、イーヴァルズグラックス、貴様が闇に染まるというのであれば、我らアカシッククロニクレスは全力をもって貴様を消す」  
言い終わるとともにリペアを肩に担ぎ、その姿を消し去った。

「・・・ま、すた・・・」

いつものイヴに戻ったらしく、剣示の傍にゆっくりと近づいて寄り添うように倒れこむ。

「私は・・・」

何かを言おうとし、イヴはその瞳を閉じた。

その光景を見つめていた人影が薄く笑う。

剣示はそれに気付くことなく、それから暫らくして剣示は重い身体を引きずるようにイヴを背負い、家路へとついた。

あれほど降り続いた雨は帰路に着く前に上がっていた。

闇を濃くしていた雨雲が明けて空には禍々しいほどの紅い月が映えていた。

何かがこれから起こるかと言いたいかのごとく燃えるような月が煌々と辺りを照らし出していた・・・。



## 第九夢：邂逅（後書き）

剣示「よりペア」<br>リペア「あー剣示さん」<br>剣示「今回次回予告なしだつて」<br>リペア「そーなんですかー」<br>剣示「で、何するかつつと、今後の展開をちよこつと言  
うみたいなことするらしい」<br>リペア「あーカンペがありま  
すねー」<br>剣示「まあそういうことだ。んー何と！俺がちよ  
つとヤバイ状況になるんだこれが！」<br>リペア「私なんても  
う、悪役みたいじゃないですか？これじゃ」<br>剣示「まあお  
前裏切りもんだもんな」<br>リペア「う・・・し、仕方ないじ  
やないですか」<br>剣示「そんでほれ、なんとつエッジが出て  
くるぜ！死んだのにね」<br>リペア「シッコイ人ですねえ」<br>剣示「まあいいつこなしねそう言つのは」<br>リペア  
「んーそろそろ終りましようかねー」<br>剣示「そだのうー。  
で？イヴ達みたいなのやるわけ？」<br>リペア「いつときます  
けども、最初にあれ言つたのわたしですからね！？」<br>剣示  
「しーゆー？」<br>リペア「そうですね！じゃあまあ本家本元  
のいきます！じゃあみなさん！」<br>剣示・リペア「しーゆ  
ー！」

## 第十夢：狂気目覚メル（前書き）

エッジ「えー、皆様。遂に最終回目前となつてしまつた今日この頃。どうなることかと思いましたがようやくオワリが見えてきたといつたところですよ」  
< b r >イヴ「今日はコーナーないの？」  
< b r >エッジ「そろそろコーナーも打ち切りで、ここで本当に前説することになつたの」  
< b r >イヴ「へえ……最初からそうしとけばいいのにね」  
< b r >エッジ「うん……それは反省してるとカンペにかいてありますね」  
< b r >イヴ「……」  
< b r >エッジ「それでは本編のほうをどうかお楽しみくださいませ」  
< b r >イヴ・エッジ「しーゆー」

## 第十夢：狂気目覚メル

夢を見ている。

自分の夢じゃないことがはっきりと分かる夢だ。

異常なほど鮮明な夢。

それでも夢だと分かる、ソナナ夢。

「さん、どうかしたんですか？」

自分の名前ではない。

だけど俺は自然に反応してしまう。

「いや、何でもなし。少しぼうつとしていたよ」

俺は気取られない様にそんな当たり障りの無いことを言ってしまった。

「そうですか。酷いお顔・・・そんな顔をして何でもなしなんて、信じられると思いますか？」

俺はこの女性を知っている。本当に綺麗な女性だ。

和服が良く似合っている。本当・・・の俺もこの人を知っているかもしれない。

今はそれは分からないが、ただこの人は今の俺の恋人だ。

「君は心配性だな。本当に何でもなしといっているだろう」

俺は微笑む。そして何時も？のように彼女の髪を指で梳くように触った。

彼女もそうされるのを喜ぶように微笑む。

彼女が俺のことを愛していることを知っている。

今の俺が彼女を愛していることも分かっている。

そしてこの後の結末さえもすでに分かっている。

自分のことじゃないが自分のことだ、だが、自分の意思ではないものがすでに決まりきっている道を辿らせようとしている。

まるで何度も何度も見た映画を自分を主人公にして反芻するかのよ

うな気分だ。

焦燥感はある。

だが、それを誰かに伝える術は無い。

決められている台詞を決められた時に言うだけなのだ。

そこに俺の意思は存在しない。

どんと、結末に近づく。

終焉の幕が下ろされた後俺はどうなるのだろうか？

ただ、それと思う。

悲しいとも切ないともやり切れないとも思う。

でも、それは俺の意思なのかは分からない。

遂に終焉の日が来る。

俺はこの日のことを知っている。

何故だかそれは知らない。

意識の中にあるのだ。

その日は冷たい雨が降っていた。そのことを知っているにも拘らず俺は傘を持つことは無く彼女の家へと急いでいる。

「貴方にだけは、こんな姿、見られたくありませんでした」

激しい雨の音に消されること無く彼女の言葉が耳にこびり付く。

薄暗い家屋の中、項垂れるように彼女は俺を上目に見ている。

着物の乱れた姿。美しい栗色の髪が流れるようにその着物の上を走る。

乱れた着物の隙間から覗くものはその女性には似つかわしくない、禍々しく隆起した赤黒い肌。首筋の下辺りから左肩までがその化け物じみた肌に犯されていた。

「嗚呼。何が、何があつたんだ・・・」

サッド・・・。

俺が呼ぶ名。それは彼女の名前だ。

「私のことは、もう。忘れてくださいまし」

何を言っているんだろうか？そう思う。俺にとって一番辛い言葉なのだろう。胸の奥が激しい痛みに苛まれている。

俺は言葉すらも通じていないのかと思う程困惑した顔で彼女を見つめてしまう。

これが夢であればいいと幾度願ったことでせう・・・。

俯いた彼女の口から漏れる嗚咽を含んだうめき声。発声すらきちんとしていないというのにも拘らず、俺の耳にこびり付くかのように鮮明に刻まれる言葉。

「私は。闇に囚われました。最早私は長くはありません」

いずれは人ではなくなり、人を喰らうものへと変わり果てませう・・・。

嗚呼。嗚呼。俺は嘆く。己の招いた惨事が彼女に絶望を招いてしまったのだと。

「マスター・・・」

この少女のことを俺は知っている。今の俺も元の俺も知っているの  
だろう。

俺の背中にか細い声がかかる。振り向いた俺の瞳は酷く憎しみを孕  
んだものだ。全て台本どおりに行われる映画の1シーンのよう  
な、そんな異質な感情。

一瞬全てを白く染めるかのように雷光が進み、落雷音が酷く大きく  
響く。

その後静まりかえる暗がりの中、俺は静かに口を開いた。

「お前のせいだ」

魘されていたらしく、剣示は酷く寝汗を掻いていた。

「う……。頭いてえ……」

軽く頭を振りながら身体を起こす。

どうやら風邪を引いたらしい。

何か変な夢を見ていた気もするが、剣示にはそれを思い出すことは  
出来なかった。

激しい頭痛にせりあがって来る吐き気が考え事をするという意識を  
失せさせる。

「剣ちゃん。大丈夫？」

部屋のドアを控えめに開けて剣示の母が少し顔を出す。

「ああ、母さん。大丈夫、でも今日は大学休むわ。流石にこの状態で授業受けられるとは思えんしなあ・・・」

「そうなさい。あとでお粥と薬もって来るわね」

「ああ。ありがとう」

剣示の言葉に微笑んで部屋のドアがカチャリと閉まった。

剣示は憔悴しきったイヴの様子も見に行かなくてはと思いながらも溜息を吐いてはベッドから動こうとはしなかった。

何故か今はイヴに会いたいと思えないのだ。

魔されていたときに見た夢のせいなのか、それとも・・・いや、今は分らない。

そう、剣示は今一人で居たかったのだ。

エッジ・・・。

心に木霊する名が酷く苦痛を伴い胸を締め付ける。

私のことは、もう。忘れてくださいまし

消してください思い出を・・・私の最後のお願いです

ドクンと。剣示の鼓動は激しくなる。

重なる声が何かを思い出させる。

酷く気分が悪かった。

剣示は起こした身をゆっくり横たえ溜息とともに瞳を閉じた。

その日はイヴに会うことはなく、剣示は一日寝て過ごすこととなった。

次の日、剣示が目を覚ますとイヴはすでに学園へと登校しているとのことだった。

幾分気が楽なのか、剣示は少し遅めの朝食を済ませる。

「本当に大丈夫？昨日の今日よ？イヴちゃんも大丈夫っていいなが

「何か辛そうだったわ」

剣示の母が心配そうに剣示を見た。

剣示は笑って大丈夫だと言う。

身体のほうは本当に大丈夫になっていた。普通なら考えられないがあれほど辛かった身体も一日でほぼ完治していたのだ。

剣示は何時ものように駅まで歩き、それから自転車で大学に向った。

大学では少しだけ心の棘を忘れていた。

多くの人と会話する喧騒と授業に集中することで考え事をする暇を自分に与えなかった。

「やあ。剣示くん。昨日はどうしたんだい？」

午後の授業も終了し、帰り支度を始めたころ、佐藤が剣示に声をかけた。

「ああ、ちつと風邪ひいてな。大事をとって休んだんだ」

「ふむう。大丈夫なのかい？」

「ああ、もう平気だ」

普通の会話のはずなのに剣示には何か違和感があるように思えて仕方なかった。

「佐藤？お前こそ・・・どうかしたのか？」

「？おかしいことを訊くね。どうかしていたのは君のほうでしょ？」  
そうだ。

自分で言っていてオカシイと思う。

だが、決定的に何かがおカシイと気付いている自分もいた。

「そうだ、剣示くん。これから予定あるかい？」

「何だ？家に遊びに来てっていうんならお断るぞ」

「むう。まあそれは今度でもいいよ。実は剣示くんに会わせたい人がいるんだよ」

佐藤は妙な笑いを浮かべた。

あまり気乗りはしなかったが、剣示はどうしても気になっていたので誘いに乗ることにした。



駅前を抜け、狭い路地を通り入り組んだ道をひたすら歩く。

何時もなら面白おかしく話しかけてくるはずなのだが、今日に至ってはそれはない。

佐藤は言葉すら忘れたかのように黙々と歩き続けている。

やがて人里離れた一軒の屋敷を指差して言う。

「あそこに会わせたい人がいるんだ」

「へえ、結構な豪邸じゃねえかよ。誰なんだそいつは」

佐藤は会って見れば分かるとそれだけ言い、屋敷へと歩を進めた。

屋敷の玄関を開けるとそこは最早家というにはあまりにも在り得ないつくりをしていた。

そこは空洞だった。馬鹿に広い広間のほかには何も無い。

ただ、その広間には数十人もの人数が狂宴を行っている。

おぞましい熱気が広がっている。

啞然としている剣示を他所に佐藤はその輪に加わるように入っていく。

「お、おい！佐藤！？」

佐藤の肩を掴む寸前で剣示の首筋に冷たい殺意が押し当てられた。

「動くな。相島 剣示！」

「っ・・・お前・・・は」

「ふん。覚えているか？炸羅だ。貴様に受けた屈辱忘れたことはない」

炸羅にナイフを押し当てられ、身動きを取れない剣示の視界が広間の中央を見据えた。

広間の中央には黒いコートを羽織った男と、着物を着た女性サッド、そしてその隣には黒髪の少女、凜が歩いてこちらのほうに近づいているところが見て取れた。

「これはこれは、上客が来たようだね。待っていたよ剣示君」

「お前は・・・」名無し「！何の真似だよこれは」

「この惨状のことかな？これはね、餌付けだよ。ご褒美ってやつさ」

自慢げとでもいいだけに”名無し”は手を広げて周りを見渡す。

男は数人がかりで一人の女性を犯し、女は女同士や、一人の男を数人で囲んだりし、異質な雰囲気で酒池肉林の宴を繰り広げていた。

「動くな。動けば貴様の頸動脈を断つ」

炸羅が剣示が詰め寄ろうとするのを制する。

「まあ、炸羅。剣示君を傷つけるのはやめてくれたまえ」

「・・・はっ」

炸羅は”名無し”の言葉に少しだけ押し当てていたナイフの力を緩めた。

「いい気味ね剣示！」

凜が嬉しそうに笑う。

「・・・なんだ？何を企んでいる・・・お前は何を」

「私の企み？そんなことを知りたいと思っていたのかい？それなら最初から分かりきっていると思うのだが？君だよ私の目的は。君が欲しいのさ」

そっちの趣味は・・・などと頭を掠めたが剣示はあえて言うことはせず、シリアス雰囲気を保つことにした。

「俺の・・・俺の力が欲しいってことかよ？つまりイヴが欲しいってことだろう」

「いいや。イーヴァルズグラックスは只の力の入れ物にすぎない。入れ物から出す鍵を持たねば何の意味もない無用なものさ」

ニヤリと口元を歪めて剣示を見やる。

「実は君にプレゼントと思ってね。用意していたんだが、少々汚しってしまった。見てくれるかい？」

”名無し”が指を指す方向をゆっくりと追う。  
数人の男に陵辱されている女性が見て取れる。

それは。

俺が。

知っている。

「け、んじ・・・さ・・・んあ、んっあん」

俺の。

愛した人。

「どうした？怒りで思考が止まったかい？」

ドクン。ああ。

ドクン。ああ、もう。

ドクン。ああ、もう、この男は。

ドクン！！クロス！！！！！！

「動くな！相島！」

再び炸羅のナイフが首筋に強く押し当てられる。剣示の思考は最早、真っ白に染まっていく。

瞳が紅く燈る。視界は真っ赤に染まる。

真っ黒な感情がとぐろを巻いて肥大していく。

「もう少ししたら奴らも飽きるだろうから。もう少し待ってくれるかい？動けば君が血に染まることになってしまう。それは私としても良いことではない」

嘲う。

動けば俺が血に染まる？

何を言っているんだ？

剣示はせせら笑う。そしてゆっくりとした口調で言い放つ。

「こいつのナイフが俺の皮膚を裂く間に」

「俺はお前の」

「心臓を抉る！！」

## 第十夢：狂気目覚メル（後書き）

剣示「ちわっ！皆さん！遂に残り2話となりました」<br>エツジ「へえ！後2話なんですか」<br>剣示「適当なストーリーだが、まとまったのかまとまっていないのか今は微妙だ」<br>リペア「微妙どころかまとまっていないと思いますか？」<br>剣示「あ。それ言っちゃだめな。あつたかい目でみるよ」<br>リペア「何があつたかい目なのかサッパリ」<br>剣示「まあいいや。じゃあ次回お楽しみに」<br>エツジ「皆さんまたね」<br>リペア「しーゆー」

## 第十一夢：真実（前書き）

エツジ「あろうはゝみなさーん 遂に最終回手前です！ここまで何時もご覧になつてくれた皆様には本当に感謝の気持ちでいっぱいです！」<br>「<br>エツジ」さて、次で最終回ですが、その次にエンディングを用意しています」<br>「<br>エツジ」数個用意したみたい」<br>「<br>エツジ」なので・・・ご覧になつてくれた皆様が見たいエンディングを投稿しようと思います！」<br>「<br>エツジ」感想の欄でも掲示板でもメールでもいいから誰のエンディングが見たいか投稿していただけるとこれ幸いです」<br>「エツジ」用意しているエンディングキャラは、『エツジ』『イヴ』『リペア』このヒロイン達の誰のエンディングが見たいでしょうか？ それでは皆さん本編のほうをお楽しみください ではゝまた会いましょう」<br>「<br>エツジ」しーゆー」

## 第十一夢：真実

「リペア・・・」

「・・・はい」

小さな寝室で老人がベッドに横になっているリペアに話しかけた。

「しくじったそうだな」

「はい。そうです」

自分の失態の言い訳をすることなく簡潔に答える。

「もう、この王国も長くあるまいて・・・」

「・・・」

虚ろな表情で虚空を見つめる老人をリペアはそつと見る。

「世界を管理する絶対の知識アカシッククロニクルス。世界を管理する絶対の力フォース。どちらも潮時だったのかもしれない」

「・・・クロウ・・・様」

リペアが口にはしてはならないと言われ続けた名を呟く。

「久しい名だ・・・お前には古来から伝説とされたアカシックレコードの管理天使リペアの名を使わせていたのだったな・・・ネクロノミコン」

「・・・マスター」

何百年ぶりだろうかその名で呼ばれたのは。

リペアは胸が締め付けられるかのようだった。

「我らが作ったこの世界の裏ももう終る。そうだろう？ネクロノミコン」

「・・・」

「もうそろそろ世界は”人間”の手に返すべきなのだろうて・・・私も長く生きすぎた」

老人、クロウは何時にない優しい顔を浮かべてリペアの頬を撫でた。  
「お前の書に刻まれた禁忌の法が不老不死。そして相反するイーヴアルズグラァックスに刻まれた禁忌の法が・・・全てを消し去る白

き滅び。我々が蒔いた種は我々が摘み取らねばならぬ」

「はい。マスター」

クロウは薄く笑い、自分の顔を撫でた。

瞬時に老人の顔は老人のものではなくなり、若々しい20代の青年の顔に変わった。

「お前の禁忌を破れば奴の禁忌も破られる。そう知った上でやってしまったことなのだ。裁かれるべきは我ら、そうだろうて」

若々しい声が懐かしい響きをリペアの耳朵に伝えた。

「今まで”白き闇”を抑えられたのは奇跡にすぎん。そして、奇跡は二度も起こるほど安くは無かるう」

クロウが言葉を止めると同時に個室の扉が音も無く開いた。

「クロウ。お前は本気でやる気なのだな？」

「来たか、シェイド。この姿で会うのは久しいな」

「ふん、貴様の姿なぞ瑣末事だ。我らが築いてきたものもこれで終いか・・・不老不死を失えばもう全ては元には戻らぬぞ。クロウ」  
シェイドの言葉にゆっくりと頷く。

「お前には聞かせていなかったな・・・シェイド。長い時を私と共に過ごしてきたお前に聞かせておきたいことがあったのだ」

シェイドは口を挟むことなく頷き、クロウの言葉を促す。

「昔話だ。遠い・・・遠い・・・昔の話だ。私はある魔法書を見つける。それはそれは素晴らしい力を持っていた・・・」

それは偶然としては少々オカシイ出来事だった。

ある日私はそれを見つけることになる。

小高い丘そこは私と私の恋人の憩いの場だった。

体の弱い彼女は時々臥せってしまい、私はそのたびに丘に生えている野花を摘んでくる。

その日も私は彼女の見舞いにと野花を摘みに丘へと赴いた。

そして丘へとたどり着いた私の前に金色の髪の少女が顕れた。

彼女はこう言う。



「待っていた」  
と。

私は一瞬何のことか分からないが、その頃には在り得ない金色の髪を見た時点で神か仏かと思ったものだった。

そして私を待っていたと言う。

私は小躍りしたものだ。私は神に選ばれたのだと自惚れもした。

そして私は彼女、イーヴァルズグラックスの主となった。

それからの日々はまるで夢の様だった。

力があれば何でも手に入る時代だ。

そして、イーヴァルズグラックスは絶対無比な力だった。

私は叶わないものなどないと思った。

しかし、それは間違いだったとすぐに気付く時が来た。

私の愛しい人の命は最早風前の灯となっていたのだ。

私はイーヴァルズグラックスに問うた。

「彼女を助ける方法を教えてくれ！そうだ！主として命令する」

「・・・それは、ないことはないわ・・・でもマスター・・・この方法は禁忌。使ってはならない禁忌の法なの」

そう言うイーヴァルズグラックスを卑怯にも主として命令した。

「いいから！主として命令する。禁忌の法を使い！」

そして、ネクロノミコンが目覚めた。

それと同時にこの世界に”白き闇”、”名無し”が生まれたのだ。

私はイーヴァルズグラックスの力を使い、ネクロノミコンを手に入れる。

そしてネクロノミコンの主となった。

そして彼女を不老不死へと変貌させ、私もそれに習いそうになった。だが、不幸というか当然の報いだろうか、彼女は”白き闇”に囚われることになった。

”白き闇”は私に言った。彼女を助けて欲しくば我の真の名をよこせと。

真の名とはイーヴァルズグラックスに刻まれた解き放ってはなら

ない滅びの章にあると奴はいった。

私はイーヴァルズグラックスを謀り、魔法書の姿に戻した上でその滅びの章を破った。

だが、彼女は心を病んでいた。

もう人には戻れなかったのだ。

私は・・・それでも構わなかった。

断片を奴に引き渡す時、イーヴァルズグラックスは顕れた。

私のことを信じていたというその言葉に私は胸がつぶれる思いだった。

しかし、もう後には引けないところまで来てしまっていた。

強引にも私は奴への取引に応じようとするが、イーヴァルズグラックスはそれを自らの最大の禁忌まで犯してやめさせた。

主を殺すことだ。

それをしてしまった彼女は数百年は魔法書の姿のまま開かれることもなかった。

私は先も言ったとおり、不老不死の体だ。

数週間後には元通り死体から健康体へと変貌を遂げていた。

だが、同じ不老不死の体のはずの愛しい人は何処にもいなくなっていた。

私は数十年という年月を掛けて彼女を探した。

だが、どうやっても彼女を見つけることは出来なかった。

永遠に生きる体。

最早心は磨耗して何も感じられなくなっていた。

そして、今にも死に掛けているシェイド。君と出会った。

君は私に血を吐きながらも笑ってこう言った。

「私は、こんなところで死ぬ、人間ではない」

「だが、お前は死ぬだろう」

「私は！こ、の腐りきったせ、かいを調律するために、生まれた、のだ！このような死に様、ありえない！」

私はその言葉に強い煌きを感じた。

そう、これが偶然とは思えなかった。

私以外では君を死から救うことなど到底叶わない。そう天文学的な確率で私の目の前で死を迎えようとしている君をみて私は決心した。それがこの2つの組織の始まりだった。

「そう、私は本当の所、どうでもよかったのだよ。君の夢に乗ったに過ぎない・・・私の心は当の昔に死んでいたのかもしれない」

クロウの言葉にシェイドはフンと鼻を鳴らして答える。

「別にお前の思惑などどうでもよいことだ。私は私の理想を追い求めてここまで来た。お前を利用したに過ぎん」

「そうだな。今更あれこれ語り合う必要はないだろうな」

クロウは薄く笑う。それに付られたようにシェイドも口元を歪める。

「名無し」の目的を知っているんだな？クロウ」

「ああ、至極簡単なものだよ。奴の目的は”名”だよ」

訝しげにクロウを見返しながら訊きかえた。

「名”だと？そんなものに一体何の意味がある？」

「名”には意味がある。存在を固定するものであり、自らを自らと認識する言わば力ある言葉と何の変りもない。今の奴にはそれがないのだ、存在はきわめて希薄、自らを自らと認識できない苦痛。

そして何より自分の力をも量りかねている、それによって力を発揮できずにいる状態なのだ」

「そう、いうこと・・・か」

それで全てを理解したといった風にシェイドは誰に頷くわけでもなく首を深く落とした。

「私はこれから奴と対峙する。奴を滅ぼし、それによってネクロノミコンは封じられ、我々に掛けられた不老不死も解け、自然の摂理にしたがい土に還るのだ」

「ふ・・・最後の時私に似合うのは戦いだろっな」

「すまないな・・・シェイド、ネクロノミコン」

自嘲するかのように薄っすらと微笑みを浮かべ、クロウは分厚いフ

ード付きのコートを脱ぎ捨て白いレザーコートを羽織った。

「行きましょう、マスター。全て終焉へと向って時を刻んでいます」

「このメンバーで戦に赴くのは久方ぶりだな」

「ああ。全て、この夜に夢や幻のように終る」

「こいつのナイフが俺の皮膚を裂く間に」

「俺はお前の」

「心臓を抉る!!」

剣示の足が地を蹴る。音が消え、世界はまるでスローモーションのようだ。

剣示は今音速の世界にいる。

”名無し”が微動だにしないうちに剣示はゆっくりと手刀を心臓に突き入れる。

まるで豆腐に指を差し入れるかのように何の抵抗もないまま埋まっていく。

剣示が動きを止めた瞬間凄まじい衝撃が辺りを襲い、突き入れた手に生暖かい感触と服や顔に吹き出る血飛沫を感じた。

「あ・・・け、んじ・・・さ」

耳元で懐かしいとも思える愛しい声が耳朵を擦る。

何故？

確かに俺八・・・

奴を殺すはずで・・・奴の心臓を抉ったはずで・・・

何だ？これ・・・

何・・・？

貫いた手を動かせないまま。剣示はエッジを抱えるように腰を抜かしてしまう。

「い、いの・・・こ、れで・・・どう、せ、わた、しは・・・しん、でいた、んだ、から」

言葉が出ない。

喉の奥がひりつくように熱く乾く。

・・・

心が壊れる音がした・・・。

ああ。

もう。

何もかも。

どうでもいい。

剣示は瞳に焦点を失い、ゆっくりと意識を手放した。

”名無し”は狂喜して大声で笑い出し、早足で剣示に近づく。

剣示の頭に手を翳し、”名無し”の体は服を残して一瞬に灰へと変貌した。

「ああ、最高の気分だ」

剣示は抱きかかえたエッジをまるでゴミでも扱う如く無造作にどかした。

”名無し”の残した黒いコートを羽織り、口元を歪めて笑う。

「やっとだ。やっとここまで来た。私は鍵を手に入れた」

「そう！ やつと凜にもすごい力を与えてくれるのね！？」

喜々として剣示へと近づいてきた凜の心臓を無表情に剣示は貫いた。  
「え……ごぼっ」

「ああ、君達もよくやってくれた。よくぞここまで狂気を飼いならしてくれた。そう、私が真の名を手に入れる糧として、ありがたく頂戴しよう」

「裏切ったのか！？ 俺達を！！」

剣示に向って炸羅が激昂する。その言葉に失笑したかのように剣示は嘲う。

「育てた家畜を喰らうのは裏切りなのかどうか知らないが、裏切るというのは仲間と互いに思うときに発生する言葉だと思うのだがね」

「よくも……ぬけぬけとそんな言葉が吐けたものだな！」

飛び掛った炸羅のナイフを易々と奪い右腕左腕両足を切断する。

バラバラに刻まれ血の雨が降る中、慈愛にも似た笑顔でご苦労と剣示は言った。

その一部始終を見ていたサッドは表情さえ変えず、剣示を見据えていた。

「覚悟しているのかは知らないが、サッド。お前にはまだ利用価値というものがある、お前を喰らうのはことが済んだ後でも構わん。だからこそ、これだけの人間を集めたのだからな」

よく響き渡る剣示の声に狂った宴会を繰り広げていた人々がざわつき始める。

「おい！まさか・・・俺達殺すつもりか！」

「え・・・何？どうなってるの？」

「あいつ仲間殺したぞ・・・おいどうなってる！？」

剣示は口元を歪めた。

「もういい加減、ブヒブヒ鳴く家畜にはウンザリしていたところだよ。ここらで全て食してやろう」

悲鳴と怒号、血飛沫と涙。響き、舞い散り、人は人の形を失っていく。

「や、やめてくれ、剣示くん！ぼ。僕は・・・僕は友達だろ友達ね？」

「・・・お前は喰らう価値すらないな・・・狂気が少ない上に気味が悪い」

剣示は佐藤を一瞬だけ視界にいれるが、興味を失ったようにほかの人物を次々と喰らっていく。

ざわついた雰囲気が消え去り、館に静けさと佐藤のすすり泣く声だけが残った。

満足げに剣示は頷くと、屋敷の扉が音もなく開いていく。

「やっと来たか・・・イーヴァルズグアックス！！待っていたぞ待っていた！！！！」

「・・・ま、すた・・・どうして・・・」

主に呼ばれたのを気付き、瞬間的に学園を抜け出し、この場所へと急いできたイヴの目に映ったのは主の姿をした悪魔だった。

血飛沫に真っ赤に染まり禍々しい顔でイヴを見つめるその瞳はあの優しい主のものではない。

「さあ、私の名をよこせ！」

「！？」

主の姿をしたモノが言う。イヴは憎しみと共に顔を歪める。

「白き・・・闇・・・マスターに何をした！！！！！！」

「くつくつく。人間の心は脆いたやすく心を壊せた。私はキツカケを与えたに過ぎない。心を破壊したのは彼自身だ」

「ゆる・・・さない」

イヴの体を禍々しいゲヘナ（地獄）の力が包み込む。

「くつくつく。そう、そうだ。憤り、怒り、蔑み、嫉妬、憎しみ、恐怖、狂気。それこそ我が糧。心地良い感情だ」

衝動にまかせてイヴは地を蹴る。

収束した力を剣示に向って放とうとした瞬間、剣示は微笑んで愛しい主の声で言う。自らの名を優しく言う。

「イヴ・・・」

寸前で力を止めたイヴに剣示は笑って顔面に拳を打ち込む。

強烈な力をその身に受けイヴは強かに地面に身体を打ちつける。

「ぐっ・・・あ・・・」

「はっはっは！いいぞ、いい気味だな。イーヴァルズグラックス！」  
蹲ったイヴに剣示は蹴りを放ち続けていた。

「ああ！う！ぐっ！や、め・・・てました・・・」

「くつくつく！はっはっはっはっは！！！」

「それくらいにしてもらおうか。」白き闇”よ”

何時の間にか開いた扉から差し込むオレンジの光を背に受けた人影が口を開く。

「ほう、貴様か。クロウ・・・」

「く、ろ・・・う！？貴方・・・生きて・・・」

まるで必然の事象を見るかのような剣示に対して驚愕に瞳を見開くイヴ。

「覚えていたのね、イーヴァルズグラックス」

「・・・り、ぺあ・・・」

「そう。貴方が私を感じられなかった理由は断片を失ったから、私はネクロノミコン貴方の相反する片割れ」



「！？ネクロ・・・ノミコン・・・」

真実が明らかになっていく、そのなかでイヴは戸惑いながらも理解した。

「くつく、そうか。道理でその女からは同属の匂いがすると思っていたのだ。貴様だったかネクロノミコン！」

「同属？貴方に同属扱いされたくないわね。そろそろ私達と共に滅びなさい」

リペアの言葉に剣示はニヤリと笑う。

「そうか、クロウ。貴様は全てを白紙に戻す積りか、そう簡単に戻ると思っているのか？」

「戻るさ」

いきなり剣示の背後から声が響いた。

その瞬間心臓に灼熱の激痛が走る。突き出ているその剣はシェイドの愛剣レーヴァンティン。

「貴様か。シェイド・・・この程度、私を滅ぼすに値する力と思っているところが哀れだよ」

「抜かせ！我が魔剣レーヴァンティンよ！猛れ！その力開放せよ！レーヴァティンから激しい光が漏れ出す。魔剣が持つ最強最悪の自己破壊と共に起こる消滅の力。最早逃れるすべさえない。

シェイドは素早くその場を離れ、空間ごと喰らって消滅していく魔剣の姿を眺めた。

「・・・私にとって生涯で最高の相棒だった・・・安らかに眠れ・・・レーヴァティン」

やがて光が昇華されていく。そして残った人影にシェイドは驚愕する。

「哀れだな。本当に貴様は私を滅ぼせると？」

「・・・くつ！！！！！滅びろ”名無し”！！！！！！DEL・・・CLO・・・ZED・・・フェンリル！！！」

幾万の氷の剣が剣示に向けて放たれる。

それを避けることなく剣示はせせら笑った。

「BELZ・・・CHOROS・・・ILE・・・ケルベロス!!」

氷の剣は剣示に届くことなく、業火によって全て融け去っていく。

「地獄の番犬か。面白い術を使うものだ。それはイーヴァルズグラックスの力か・・・」

「ふ、その通りだ。クロウ・・・」

クロウは剣示に向って一歩踏み出し、一振りの刀を構えた。

「ゆくぞ、」白き闇”我が力、神刀海神わだつみとくと見るがいい」

「くつくつく、悪いがお前の相手は用意してある」

剣示はニヤリと笑い、指を鳴らした。

剣示の隣に現れた人物にクロウは目を見開いた。

「・・・九朗・・・」

「サッド・・・お前・・・生きて・・・」

剣示は禍々しい笑みを浮かべ、サッドに言い放つ。

「クロウを殺せ」

「はい・・・」

何の迷いもない瞳でサッドは頷く。

クロウは舌打ちをした。

そして、リペアに向って命令を下す。

「ネクロノミコン！シェイドと共に奴を討て！私は彼女の相手をしなければならぬようだ」

「・・・マスター・・・貴方・・・」

何か言いたげなリペアに向って優しくクロウは微笑み、頷いた。

「分かりました・・・マスター！」

リペアは地を蹴る、力強く地面が音を立てて窪み、リペアの身体を慣性の法則に従い風よりも早く運ぶ。

リペアは剣示の胸目掛け、手拳を放ち、力を解放する。

「イグニート！Run！」

屋敷の裏側を破壊し、吹き飛ぶ剣示を見、リペアはシェイドを一瞬

見てから小さく頷く。

「まさかお前と組むことになるとはな！」

シェイドはリペアと剣示を追う形で走り出した。

「ずっと・・・お前を探していた・・・サッド」

「そう・・・でも私は永遠など欲しくは無かった・・・」

聴こえるか聴こえないか微妙な囁きでサッドは言う。

「アカシッククロニクレスにアクセスして擬似武器を使う積りはありません・・・私も本当の武器を使いませう」

そういつてサッドは腰元に備えた二振りの小太刀を構えた。

「瞬華と連華か・・・お前の剣舞は久方ぶりだな」

「貴方と手合わせするのは数百年ぶりですもの」

空気が振動する。お互いが動くことなく間合いを取ったまま微動だにしない。

風が屋敷の中に木の葉を運ぶ。

そしてその木の葉が地面に達する瞬間、二人は動いた。

クロウは海神を神速の速さで抜きざまにサッドの胴を狙う。

サッドは後手にその攻撃を先読みし、身体をまるで舞いでも踊るかのように回転し、避けつつ右の小太刀瞬華でクロウの喉元を狙う。

クロウはサッドの攻撃を地を蹴って避け、空中で一回転し、地面に伏せる形で足をつくと同時に再度海神を振るう。

地面をなぎ払うような剣閃をサッドはバックステップで避け、連華を投げつける。

素早くクロウは畳んだ足を伸ばす力を使い、後ろに飛ぶ。それを見ることなくクロウが地を蹴った瞬間、サッドは瞬華をその軌道に乗せるかのように投げつけ、駆け出し、地に刺さっている連華を抜く。クロウを狙う瞬華を海神で打ち返す形で払った。

宙を舞う瞬華はまるで主の元に帰るかのようにサッドの手に収まる。

「流石だな・・・サッド」

「貴方も・・・九朗」

死闘を呆然と見ていた佐藤は蹲り、小さく震えているイヴを見つけた。

佐藤は駆け寄り、イヴを抱き起こす。

「い……イヴちゃん？大丈夫かい？」

「う……お、ね……がい……ま、すたーの所に連れて行って……」

まるで剣示が受ける痛覚をイヴが受けているような苦痛を体中に受けてイヴは立つことさえ不可能な状況だった。

苦痛に満ちた顔で尚、佐藤に頼みごとをする。

佐藤は何も言わずイヴを背負った。

恐怖に竦む足腰を奮い立たせて駆け出した。

夕日が沈み、藍色に染まっていく空。

夜がもうそこに來ていた。

そして……今夜全てが終焉に向って進んでいた……。

## 第十一夢：真実（後書き）

剣示「遂にここまで来てしまったなあ」<br>リペア「筆不精な作者には在り得ないくらいがんばったかもね」<br>剣示「そうだなあ・・・ストーリーめちゃくちゃかもしれないのに皆みてくれてどうもありがとう!」<br>リペア「ありがとうございます!」<br>剣示「最終回に向けて最後までご覧くださいませ」<br>リペア「それじゃあ皆さんまた会いましょうね!」<br>>

## 最終夢：夢幻町へようこそ（前書き）

エッジ「はあ、最終回です最終回！遂にここまでできてしまいましたー！」<br>イヴ「長かったのか短かったのか分からないけど応援してくれた皆さん本当にありがとう」<br>エッジ「ありがとうー！！」<br>イヴ「遂に最終回ですが、前にも言ったとおりエンディングを用意しています。反応うすいけど少数の人がエンディング選択に協力してくれました。ありがたいですなきそうです」<br>エッジ「本当にうれしいですよ・・・」<br>イヴ「それで、この最終回から2日後にエンディングを投稿したいと思いますので、それまでに見たいエンディングを投稿していただけると助かります」<br>エッジ「掲示板のほうで見たいエンディング選択を設けておりますのでそちらをご利用いただけるとたすかります」<br>イヴ「それでは皆さん本当にありがとうございました」<br>エッジ・イヴ「グッバイ」<br>

## 最終夢：夢幻町へようこそ

日が沈み、闇に染まっていく雑木林の中、先程から光が炸裂しては闇に戻ると繰り返している。

「はあはあ・・・あつちかな・・・イヴちゃん」

「・・・うん・・・あつちに急いで・・・」

佐藤は力なく頷くイヴを背負いなおし、光が瞬く場所を目指した。

闇。

何もない空間。

それはどこまでも無限に広がっている。

誰かがそこを明かりもなく歩く。

揺ぎ無い自信に満ちた歩み。

何も見えなくても感じる事が出来る。

そう、その人は大事な人を感じることが出来る。

『・・・見つけた』

鈴の音のような耳朵を擦る声音が蹲っている人影に響いた。

『泣いてるの？悲しいことがあったの？』

わからない。

蹲った人影は声も出さずに感情や言葉をその人に伝えられる、否、その人になら伝わるのだ。

『わからないのに悲しいの？』

大切な人を失った・・・から？

人影は自分のことすら曖昧で何も分からないのだろう。

『そう、大切な人を失ってしまったの？』

・・・うん。

力なく頷く人影にその人は微笑む。

『きつと大丈夫。貴方が望むならばその人は貴方と共に生きられる』

本当・・・？

『うん。本当だよ・・・だから悲しまないで』

「エーテルブラスト！！Run！」

リペアの翳した手から光の衝撃が剣示を襲う。すかさずシェイドが剣示が避ける方向へと力を解き放つ。

「イグドレードバーニング！」

灼熱の炎が木々を焼き払いながら剣示を追う。

「その程度その程度なのか！くつくつく！アイシングウォール！」

剣示が身体を伏せるような形で地面に手をついた。瞬間、厚い氷の壁が剣示の前に顕れ、灼熱の炎を防いだ。



（くっ！何故こうも防御一辺倒なのだ！？奴め、何を企んでいる・  
・いや、何を狙っている！？）

シェイドが焦燥感を感じずにはいられなくなっていた。

剣示はこちらを攻める気配はなく、こちらの攻撃を全力で防いでいる。

傍から見ればこちらが優勢であることは目に見えて分かる展開だ、  
だが、そうではないことはシェイドもリペアも分かっていた。

「さあ・・・もう終わりなのかな？お二方・・・」

嘲うかのように挑発をしてくる剣示にシェイドは奥歯を噛み締める。

「シェイド、挑発に乗ってはいけませんよ」

「分かっている！指図はするな！リペア！奴は何を狙っている！？」

（おそらくは・・・イーヴァルズグラクスのページを読み取っている最中・・・剣示さんというイーヴァルズグラクスの断片から生まれたイレギュラーな鍵を手に入れたことによって”名”を探すことに躍起になっているはず・・・）

リペアはシェイドを一瞬見る。

そしてすぐに剣示に視線を戻し言い放った。

「これ以上、時間を与えるわけにはいきません！一気に奴を消滅させますよ！！！」

「指図はするなといったはずだがな！この際仕方ない！いくぞリペア！！！」

「最後に君に会えて、私は幸せ者だな」

「それが殺し合いだとしてですか？」

本当に私も幸せ者です・・・最後の時に貴方に会えることが出来るなんて。

サツドの受け答えた言葉にクロウは小さく噴出した。

「ふっ、君に私を殺すほどの力はない。そして私には君を殺す気はない。これが殺し合いといえるか疑問だな」

「そう。私が本気だとしてもですか」

本気になれるはずがないわ・・・

「私が憎いか・・・サツド」

「ええ、こんな皮肉な長い時間を与えた貴方が憎いのは当たり前でせう？」

憎めるはずがないわ、私の貴方への愛が途絶えたことはありません・  
・

「私は貴方を憎んでいます・・・」

私は貴方を愛しています・・・

その言葉を最後にサツドは二振りの小太刀を構えた。

それに習うようにクロウも海神を鞘に戻し居合いの型で構える。

先に仕掛けたのはクロウだった。

先の手、神速の剣速を生み出す居合い。

後の手、それを避けながら心臓を狙ったサツドの瞬華がサツドの手から離れクロウへと放たれる。

すぐさまクロウの動きを察し、そこへと投げつけるはずの連華が手からするりとこぼれる。

サツドの瞳に映ったのは微笑んだまま動かないクロウ。ゆっくりと本当にゆっくりと時間が進む。

投げた瞬華がゆっくりとクロウの心臓へと向かい進んでいく。

やめて・・・

見開いたサツドの瞳が潤み、どうしようもできない感情が雫を作り出す。

やめて・・・クロウ！何をしているの！？避けて避けてよ！！！！

ゆっくりと流れる時間の中、クロウは心臓を貫かれ、崩れ折れる。

「くろおおおおおおお！！いやあああああ！！！！」

雫が零れ、涙の筋を作る。

館に差し込む月明かりがサツドの涙の残滓を照らした・・・

「セフィラス・コード！Run！！」

「セフィラス・コード！！」

凄まじい色彩の光が炸裂し、辺りを包む。

全てを飲み込むほど強烈な光が木々や草木土までも飲み込み、消滅していく。

その中央にいる人影が薄くなっている。

剣示の姿だ。

しかし、その姿は絶叫しているというよりも高らかに笑っているようにみえた。

「ますたあああああああああああああああああ  
！」

「！？イーヴァルズグラックス！？」

「もう、これで終わりのはずです、滅びのときが来ましたイーヴァルズグラックス」

佐藤に背負われて現れたイヴを二人は振り向いて見た。

イヴの視線が昇華していく光に注がれるのを見、二人は素早く振り返る。

「くつくつく・・・得たぞ。私は得たぞ？”名”を！！私の”名”は！！」

「くそおおおお！やめろおおおお！」

「？      ！！」

剣示がその”名”を叫んだ瞬間、全てが光に包まれる。

否、それは光ではない。

影すら作ること無い完全なる白い闇。

広がり、飲み込み、蹂躪していく。

世界は・・・白く何もかも感じることもない無機質なものに変わり果てていく。

「ぐ……白き闇に……世界を奪われるか……ふ、それも……い、い」

「どうしてっ……どうしてこんな……っ!!」

倒れたクロウを抱き起こすようにサッドが寄り添う。

幾度も幾度もクロウの頬にサッドの雫が零れる。

「憎んで、いた、のだろう？せめて……最後にと……思っただが」

「あなたはっ！あなたはいつもそう!!……本当に女心のわからないお人……っ」

クロウの顔を自分に引き寄せ咽び泣くサッドを見てクロウは少しだけ後悔をした。

「そう、か……」

「そう、よ……ねえ、知っていた？私がいつも貴方を愛していたことを」

「そして、貴方と共に生き、共に死にたかったことを……」

そう言い終わるとともにサッドは自らの胸をもう1つの小太刀で貫いた……。

誰かが呼んでいる・・・

『そう、それは貴方の大切な人？』

わからない・・・

『貴方が望むなら、私は貴方に望むものを与えられる』  
何を望めばいいのかわからない・・・

『それはとても簡単でもとても難しい』

謎掛けは苦手なんだ・・・

『貴方の愛する人の”名”を与えてくれる？』

どうして？

『私を私として認識出来なければ、私は存在できないから』

君は誰なんだ・・・？

『まだ私は誰でもない。誰でもないし、誰にでもなりうる全ての雛形<sup>オノ</sup>』

俺は・・・もう、起き上がれないよ・・・

『ねえ、今の世界の有様を見て』

これは・・・何？白い・・・何も見えないよ・・・

『これが今の世界。これは君が望んだ未来？』

こんなもの望むはずはない・・・

『貴方はこれを変えることが出来るわ、でも私は強制しない』

どうして？世界を救えっていうんじゃないのか・・・？

『だって、この世界は誰も何も感じない世界。誰一人苦しんだり、

悲しんだりしていないもの・・・そう、何も感じない世界でも、こんな世界間違っている・・・

『君はこの世界を変えられる。でも君自身も変わってしまう』

それは、俺が人ではなくなること？

『うん。貴方は人ではなくなってしまう』

どうして君はそんなことが出来る？

『ねえ、知っている？パンドラの箱・・・パンドラの開けてしまった箱にはありとあらゆる災厄や不幸、不のエネルギーが詰まっていた。でもね、その箱にはそう、希望というものも入っていた』

君は希望なのか？

『貴方が望むのなら私は希望』

そうか、君には”名”がないんだったね・・・

『私は貴方に永遠を与える者。そして貴方の永遠をたゆたう伴侶として作り出された雛形』

俺が君に”名”を与えれば君自身はどうなってしまうの？

『私は魂がないの。只の入れ物。そして今は貴方に与える力が詰まっている只の人形・・・だからどうなることもないわ。私は貴方を与える”名”で私になれる』

与えた人の魂・・・俺がその”名”を与えてしまったらその”名”を持った人は悲しまないだろうか？

『気になるの？』

・・・ああ

『ここは全ての魂が奔流する夢幻の空間。貴方の想う魂に語りかければいいじゃない』

俺が・・・想う・・・魂・・・

『そう、貴方が想う・・・大切な魂』

なあ、君は俺と永遠を生きることを願うだろうか？

『・・・』

そう、本当にそれでいいのか？

『・・・』

俺？俺は・・・君と共に生きるなら後悔しない  
『・・・』

なあ、君。君に”名”を与えたいんだ。俺の一番大切に愛している  
人の”名”を。

『うん。聞かせて、私の”名”』

君の”名”は・・・

・・・

「どうしてお前は存在できる？この世界に」

白い闇の中、                   ？                   の音が響いた。

「さあ？何でだと思うよ？」

剣示は白い闇のなかで鮮明に形を整えた。

自らの体を確かめるように各関節などを確かめながら不敵に答えた。

「まあ、いいさ。この世界では全て私の思うが儘よ」

「ふうん？そうなんだ」

白い闇の中、剣示と向いあう形で                   ？                   が剣示の姿で

顕れる。

「こういうことさ」

「だから？」

「いらない存在は私は排除するってことさ」

「やってみな」

剣示は不敵に笑った。



？ が剣示に向けて手を翳す。

「インファール・レクイエム」

白い空間に白い霧が立ち込める。

気を失うような瘴気が辺りを包み剣示を背後から ？

が襲う。

それを分かつていたとでもいうように顔色1つ変えずに剣示は

？ を振り向きざまに蹴り上げた。

人間ではない力で蹴り上げられた ？ は果ての無い

空間の中を吹き飛ぶ。

吹き飛んだ ？ を剣示は地を蹴って追い。

跳躍し、踵を落とす。

凄まじい音とともに ？ が空間の地面に叩きつけら

れ血反吐を吐き散らす。

「く・・・何故だ・・・この空間で力を振るえるのは私だけのはず

だ！」

「知るかボケ」

「たかが、断片が寄生した人間の分際で・・・この私に!!」

剣示は怒り狂う ？ を嘲った。

「やめたんだよ」

「なんだと・・・？」

「やめたよ。人間ってやつをさ」

？ が目を見開いて驚愕する。

今度はその姿を希薄させ、世界と同化しようと悪足掻きをする。

剣示は哀れむ、その ？ の姿が酷く滑稽だった。

「無駄だよ、俺はこの世界だって消せる」

「はっ！ハッターを！！お前など存在させん！消えろ相島 剣示！

！！！！」

世界はかくも儚く。

夢か幻か。

我望む、世界をも変える力。

闇よりも濃く光よりも眩く。

全てを飲み込む絶対なる夢幻。

「消えるのは・・・貴様だ

？

！」

！

剣示は叫ぶ、絶対なる滅びの力の名を。

光は闇を打ち消し、闇は光を包む。

全て相殺し、混ざり合い、混沌となる。

白き世界は・・・滅んでゆく・・・。

全ての時間を吹き飛ばし、事象を巻き戻し、修正し、世界は変わっていく・・・。

朝梅雨に体を少し濡らした湿っぽい服が気持ち悪いが、清々しい空  
気とともに佐藤は目を覚ました。

「う……ん？」

何故自分がこんなところに寝ているのかと一瞬意識が真っ白になる  
が、すぐに冷静に取り乱す。

「む、あれ？そうそう……イヴちゃんがいて……リペアさんが  
なんか戦ってて……僕はなんで……あれ。れれれ？？？」

辺りには壮絶な戦闘を繰り返したとも思えないほど平穏だった。

丘の上に建っているはずの館すらその姿を消し去っている。

「……む、夢遊病！？」

不に落ちない気持ちを引きずりつつも佐藤は時計を見るとそろそろ  
大学に向う時間だった。

剣示にこのことを言えば夢か事実かも分かるかもしれない。

そう思い佐藤は大学を目指した。

それからしばらく剣示にも会えなかった佐藤が知ったことは剣示の  
失踪届けが出たということ、イヴやリペアという人物など存在しな  
いということ。

それから佐藤は精神科にも通うことになるが、記憶は鮮明に今でも  
残っているのだ。

楽しそうに笑う剣示や、イヴやリペア。

あれが夢などと到底信じることなど出来ずに時がどんどん過ぎ去  
っていく。

遂に剣示は失踪したまま、死亡届が受理されることとなった・・・。

世界は剣示という人間を失った・・・。

それでも。

それでもこんなにも世界は本当の光に満ちている・・・。

全ての人に等しく与えられる希望という”名”の光に満ち溢れている・・・。

E N D

## 最終夢：夢幻町へようこそ（後書き）

本当に長かったのか短かったのか分かりませんが、今まで応援してくれた人達には本当に感謝してもしきれない思いでございます。  
<br><br>ここまで付き合ってくれた方々に深くお礼申し上げます。  
<br><br>本当にありがとうございます！

エッジ：永久の悠久

君の”名”は・・・

エッジ・・・

全ての超常的な組織は白紙に戻され、魔法書はその存在をまた伝説に帰化させることになった。

だが、剣示に与えられてしまった力は最早消え去ることはなかった。  
レギオン  
雛形に与えられたエッジの魂は定着し、レギオンはエッジという存在になった。

二人は永遠をたゆたう。

本当の世界の終焉を見る存在になりうる存在だろう。

桜が舞い散る・・・月明かりに照らされてハラハラと・・・。  
佐藤 真吾朗。それを襖をあけて眺める人物の名前だ。

89歳という年齢を生きたその人の肌はしわくちやで年齢をその身に刻むようだ。

ハラハラと舞う桜……。

何と美しいことか……。

静かに舞う花びらを老人はそれと同じく静かに眺めている。

彼は自分の寿命がもうそろそろだろうと感じている。

だからこそこの美しい風景を目に焼き付けているのだろう。

「よう……佐藤」

不意に自分と呼ぶ声に視線をその人物に向けた。

その姿は紛うことない友の姿だった。

年月を重ねていない彼の姿は失踪した時のままだった。

老人はしわくちやの顔をさらにしわくちやにして笑った。

「剣示くんか……懐かしい。懐かしいなあ……」

「そうだな……元氣……だったか？」

数年会わなかったただけのような会話をする彼に老人はまた笑う。

「君はかわらないね……」

「ああ、お前は変ったな……じじいになった」

「ふふ、そりゃあそうさ。あれからもう70年以上過ぎ去ったからね」

「そう、だったな」

剣示はふつと切ない顔をした。

それで老人には剣示が何故今自分のもとに現れたのか悟った。

「いい、冥土の土産が出来たよ、剣示くん」

「・・・何度見ても慣れないもんだ・・・知人の死つてのは」

「そういうものだよ。君を知っている人はもう、わしだけかい？」

「ああ・・・」あの頃”を知っているのはもう、お前だけだよ」

会いに来てくれてありがとう。

老人は静かに呟いて自分の寢床についた。

もう老人が朝を迎えることはないだろう。

それは老人も知っていた。

「おかえりなさい、剣示さん・・・お別れ・・・済みましたか？」

「ああ、済んだ・・・」

ハラハラと舞う花びらが滲んでいた。

エッジはそつと剣示に寄り添い剣示の頬を撫でる。

「悪い・・・俺ばつか感傷にふけっちゃまって・・・」

「ううん、そんなことないよ・・・私ね、剣示さんのそういう優しいところが大好きよ」

剣示はエッジを優しく抱きしめてから囁くように言った。

「俺さ・・・あの時エッジに訊いたこと・・・後悔してるんだ・・・」

「あの時？」



キョトンとした表情でエッジは訊き返す。

「あの夢幻の空間で、君に俺と共に永遠を生きてくれるかって訊いたことだよ・・・」

「どうして？私とじゃ嫌だった・・・？」

「違う。君は・・・絶対に嫌だって言わないと知ってた・・・知っていてそう訊いていたのかもしれない・・・俺はずるい奴だと思う・・・なあ、本当に後悔していないか？」

エッジは微笑んで剣示とキスを交した。

「ねえ・・・知ってる？私は殺されない限り、あの世界では永遠に生きられる命だったの。それでね、剣示さん・・・貴方を愛してそして、私ね・・・貴方も不老不死になったら私とずっと一緒にいてくれるかなあってそんな夢ばかり見てたわ・・・」

「・・・エッジ」

「貴方とならこの先の何十年何百年・・・そして何千年・・・月日を重ねても・・・共に生きていける・・・そう信じてる」

剣示は真摯に語るエッジを見て止まった涙腺がまた緩んだ。静かに零れ落ちる雫をエッジが人差し指で掬うように撫でる。

「剣示さん・・・愛してる・・・」

月が淡い光を生み出し世界を照らす。その淡い光に照らされている照れくさそうに微笑むエッジは剣示にとって全てをなげうつてでも守りたい人。

剣示はふうつと息を吐いてエッジを抱きしめた。

「俺も・・・愛してる・・・」

剣示は永遠をたゆたう・・・

エッジという愛する人と共に・・・

永遠に・・・

FIN

## イヴ：時から外れた者

君の”名”は・・・

イヴ・・・

あれから全ては”白き闇”を取り除いた事象から時を刻んでいた。  
全ての人、全ての世界。

それらは”白き闇”の存在を消し去った。

そして、全ては一からのやり直しを迎える。

魔法書物との出会い。

アカシッククロニクレスの創設、フォースの創設。

次々と繰り返される世界の中・・・剣示とイヴ、魔法書イーヴアル  
ズグラックスだけは時から外れた異質な存在と成り果てていた。

「我らフォース、そしてアカシッククロニクレスは新たな脅威を発  
見した。いや、脅威になりうる存在を発見したとでもいうべきか」  
数々の人々が壇上で演説をするシェイドの姿を熱い瞳で見つめてい  
た。

これから始まる壮絶な戦闘でも期待するかのように。

演説する壇上の後ろに座った人物がフォースとアカシッククロニクルス最高責任者のクロウ。

そしてその隣に微笑んで佇む女性はクロウの妻、サッドである。

「魔法書と思わしき力を持つ人物とその主たる人物。その捕縛を我ら二つの組織は慣行する！いいか！油断はするな、どのような力を持っているかも今はまだ把握できていない！努々油断するな！？解散！！」

シェイドが壇上を降りると共に人々から雄叫びのような声が迸った。

「お疲れ様でした。シェイド様」

「お、エッジか。どうだ、フォースの特務隊長にはもう慣れたか？」

シェイドを迎えたエッジにシェイドは微笑む。

シェイドの質問にはにかむように答えるエッジ。

「いえ・・・私みたいな若輩者にはまだ荷が重いです」

「ふ、そうでもなかるう。お前の隊にはお前のファンが多いそうぞ」

からかう様なシェイドにエッジは頬を染める。

「か、からかわないでくださいよう・・・」

「ふ、それからな、エッジ今回の任務の先陣はお前が取ることになった。しっかりやれよ？」

シェイドは去り際にエッジの肩を一度叩いた。

「は！力の限り任務を遂行します！」

「マスターマスター！」

「何だ？」

「あの屋台のものが食べたい」

「えー・・・さっき昼食べたばかりだろうが・・・」

ウンザリした表情で横目でイヴを見やる剣示を他所にイヴは頬を膨らまして呟く。

「ぶう・・・デザートは・・・別腹なんだもん」

「ぷーあはははは。はいはい、お姫様。仰せのままに」

可愛い表情を浮かべるイヴに恭しく傳きながら剣示は答えた。

春の日差しが心地良い陽光の中、二人はベンチに座って先ほど買ったチョコバナナクレープを頬張る。

「む、このチョコとバナナのコラボレーションは絶品だ！」

「おいしーねマスター」

イヴは剣示にぴったりと寄り添いながら満足げに平らげた。

「いい、陽気だなあ・・・こんな日は日向ぼっこで昼寝だな」

「はい」

「ん？何だ？」

イヴは自分の膝をぽんぽんと叩きながら何かを促している様子だった。

「膝枕してあげるよ。マスター」

「いや、それじゃイヴが疲れるだろ」

それより何より公共の場でそのような行為が恥ずかしいので断りたい。

「だめー。するの。膝枕」

「へいへい。お姫様の仰せのままに」

薄く笑いながら剣示はイヴの膝に頭を乗せた。

瞳を開けるとじつとこちらを見つめ微笑むイヴの笑顔が見える。

本当に・・・いい陽気だなあ・・・

剣示は心地良い日差しと風に眠りへと誘われる。

はずだったのだが、仰々しい声にそれを阻まれる。

「魔法書とその主だな!!」

聞き覚えのある声に薄く目を開く。

そこには白いコートを纏ったエッジとその後ろに控えているフォースの隊員らしき者達が剣示達を囲むように立っていた。

「へえ・・・フォース。やっぱ創立されたわけだ」

「そうみたいだね、マスター」

にやりと笑ってイヴの膝から起き上がった。

立ち上がり、黒のコートをばさりと翻し、剣示は口を開いた。

「少しは退屈しないで済みそうだ」

「どうするの？マスター？」

イヴも久しぶりの力の行使にうずうずしている様子で笑顔でそう訊いてくる。

「数百年ぶりの知人なんだ。丁重にご相手しようじゃないか」

「あは、マスターほんと楽しそう」

「さあ。フォース。かかって来な、手加減してやるから。楽しませ  
てくれよ?」

f i n

## リペア：不思議世界

君の”名”は・・・

リペア・・・

ちやらりりーちやらりらーちやらららっちやらりりー)  
世にも奇妙な風音楽)

「ハロー皆さん。リペアです。今日は私が主役バンザイなエンディングへようこそ」

黒皮な高級そうな椅子に足を組んでリペアが微笑む。

「ええ、ええ。何なんだこりゃあって思っている方はすぐさま戻るをクリックプリーズで」

物憂げに視線を逸らしながら足を組みなおす。  
ギシッと椅子が音を立てて響く。

「実際ね、まあ私の人気なんてありませんよ、ええ、ありませんとも。やれ、イヴちゃんがいいだの、エッジがいいだの・・・ハア？



大体一話目にでた女ってヒロインじゃない？おかしくないですか？」

真っ暗な空間でリペアがすつくと椅子から立ち上がり拳を立てた。

「おかしいですとも！ええ！真に憤慨です！」

息を荒くして椅子に腰掛けてまたカメラ目線で微笑みなおすリペア。

「ですから、リペア萌え！ああ、何て魅力的　な、エンディングを自ら！私自ら慣行することにしました」

椅子から立ち上がりウロウロとするリペアにぴったりとスポットライトがあわせて動く。

「ストーリー性？ハッ！知ったこっちゃありませんよ！エンディングですもん。しかもね、これ没になる可能性大っ！もうね、やってらんない」

誰にしているのかは分からないが中指を立ててF A C K！みたいなポーズをとっている。

「まあ、それはさておきそろそろリペアちゃんの不思議世界へようこそです」

『私は相島　リペア。剣示兄さんとは血の繋がらない兄弟なの。最近兄さんに言い寄る女性が気になってしかたないの・・・どうしてだろう？この気持ちはイケナイものなのかしら・・・』

「お、おいリペア？どうしたっていうんだ・・・」

両親がまだ帰らない夕暮れ、剣示はひょんなことからリペアに迫られることとなった。

「ねえ、兄さん・・・私・・・私・・・兄さんが・・・兄さんが・・・すき・・・なの」

「り、ペア・・・」

「兄さん・・・キス・・・して・・・兄さん・・・」

剣示はリペアを想う気持ちをひた隠してきた。

そのリペアから想いを打ち明ける日が来るなんて思いもなかった。

「リペア・・・だめだ、そんなことしたら。俺達はもう戻れなくなる」

「いいの。兄さん・・・私兄さんと一緒ならどうなったっていい」

リペアのその言葉で剣示は遂に一線を越えてしまう。

リペアを抱きしめ、熱いキスを交わした。

「ああ、兄さん・・・兄さん・・・」

「って。どーよ！？まあこれ兄弟ものの王道みたいな？でも萌え度

があんまり変動ない王道ってよくない？ヨクナイデスカ・・・ハア！？何だコリヤとか思ってるやつとかいるんでしょーせ！そんな奴私の魔法でめっちゃめっちゃのぎったんぎったんにしてあげるとこですがね。今日はマジックポイントがないので勘弁してあげます」

言い終わってからリペアは「次行ってみよう」と高らかに叫びながら人差し指を天に掲げる。

『私メイドのリペア。今日もご主人様にご奉仕するの　だーいすきなご主人様にご奉仕するのが私の生き甲斐なの　さー、今日もオネボウサンなご主人様を起こしてあげなくっちゃ　』

「ご主人様　おーきーてください　早く起きないとキス・・・しちゃうから　」

「てね？まあメイドインチャイナ服みたいなシュチュエーション的なもの想像して？くだらないか思った人はそんな気持ちはダストボックスにスローインしてください。最後まで凹ませないで！相手方はどうしたって？ええ。ここに書置きがありますとも！」

『やってられないので。とりあえず帰る。剣示』

「ハッ！最後の最後までこれですよ！？薄幸って言葉がこれほど相応しい私ってある意味希少ですよ！！相手方なんていりませんとも！知るかそんなの！」

変な踊りを踊りながらピンと指を立てて「次にズームイン」と叫んでいるリペア。

『私は患者さんを癒す白衣の天使リペア。今日も忙しく患者さんの心と身体を癒すのが仕事』

「きゃん もう。剣示さんったらイタズラするとおっきな注射をうつちやいますよ？うふふふ」

「どんどん泥沼にはまって行ってる気がするのは気のせいじゃないでしょうね。ええ、ええ。分かってます。自分がどれほど浅はかで愚かだと！！でもここまできたらあれですよ！かつ えびせんですよ！！あれのキャッチフレーズなみにもう止まらないんですよ！！」

リペアは椅子から立ち上がって一回転し、「VTRスタート！」と叫んだ。

割愛します。

「ハッ！？今割愛します。とか意味不明な文章でなかった？あれですか？巻きでお願いしますってことですか！？最後なのに？最後の好き勝手させてくれませんか？もうね。やってらんない！大体ですね  
割愛します。」

げえげえと息を切らしてリペアが椅子にへたりこんだ。

「今ね、皆さん。私5分ほど喋り倒しました。でもねカットですよカット！！割愛しますだあコノヤロー！！フザケンナ作者の分際で！！ああ、ええ。もういいです！こんな番組やってられません！降板したるわ自ら！！自ら辞表だわマジで！」

息を切らしてリペアはよろよろと倒れこんだ。

それからほどなくして薄っすらとスポットライトが光を失っていく。

「いや・・・まじで・・・私に愛をください・・・」

END

## リペア：不思議世界（後書き）

何故かリペアを見たいという人がいまして・・・。  
<br>なんとまあ奇特な方がいらつしやいますことで・・・。  
<br>ランキングとかで上位にはいつちやった記念にリペアエンディングを投稿してみました。  
<br>まあリペアは選ばれることないなあと思います。  
<br>気で適当に適当を重ねた至極の一品に仕上がっています。  
<br>お楽しみいただけたなら幸いですよほんと・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0745a/>

---

夢幻町へようこそ

2010年10月10日05時22分発行